

指宿市埋蔵文化財調査報告書（6）

県営畠地総合土地改良事業に伴う東部Ⅵ工区の
埋蔵文化財包蔵地確認調査報告書

横瀬遺跡

（道下工区）

1982年3月

鹿児島県指宿市教育委員会

序 文

道下地区は昭和55年度調査が実施された宮之前遺跡とは、湊川を挟んで、その南側に位置する周知の埋蔵文化財包蔵地であります。

この遺跡は県営南蔭畠地帯総合土地改良事業実施に伴い「道下遺跡発掘調査事業」として総額 750万円（文化庁補助 375万円、県補助 187万5千円、市費 187万5千円）で調査が実施されたものであり、その調査概要を報告書としてまとめました。

報告書にありますように、この地区も古鏡片を含む多種多様な土器遺物が出土し、貴重な文化財が埋蔵されていることが明らかにされました。については、この調査の成果が土地改良事業実施にあたって、遺跡保存のため適切に活用されるよう念願いたします。一方この報告書が広く考古学研究の資料として尊重され、学術文化の向上に役立てば幸と存じます。

なお、この調査にあたっては、文化庁調査官の指導を受け、また県文化課からは、調査員を派遣して発掘調査を直接担当していただきました。

この発掘作業は、次年度昭和57年度実施予定であった本地區土地改良事業が、昭和56年中実施に変更されたため、急きょ当初の実施計画を數か月繰り上げ、昭和56年7月13日から9月18日まで、真夏の炎天のもとで行われることになりました。ここに大変なご尽力くださった調査員はじめ、指導者、作業協力者並びにご協力くださった土地所有者の方々に深く感謝申しあげます。

昭和57年3月1日

指宿市教育委員会

教育長 貳 方 忠 雄

例　　言

- 1 この報告書は指宿市教育委員会が昭和56年度に実施した確認調査の埋蔵文化財調査報告書である。
- 2 確認調査は県営畠地総合土地改良事業東部Ⅱ工区に伴う事前調査として、国及び県の補助を受けて実施した。
- 3 調査は指宿市教育委員会が主体となり、発掘調査は鹿児島県教育庁文化課が行なった。
- 4 本書に用いたレベルの数値は全て海拔絶対高である。
- 5 発掘調査及び整理作業では鹿児島県文化財保護審議会委員河口貞徳氏、指宿高等学校教諭成尾英仁氏に指導、教示を受けた。なお、成尾氏に地形、土層の執筆を依頼した。
- 6 出土遺物の銅製品については、北九州市立歴史博物館主幹、小田富士雄氏に鑑定を依頼した。
- 7 放射性炭素測定は京都産業大学に依頼した。
- 8 遺物の実測・トレースは各執筆担当で行ない、写真撮影ならびに図版作成は弥栄が行なった。
- 9 本書の執筆分担は次のとおりで編集は弥栄が行なった。

第Ⅰ章	吉永
第Ⅱ章	弥栄
第Ⅲ章	成尾
第Ⅳ章 第1・2節、第3節2・3 (2)	吉永
第3節1・3 (1) (3)	弥栄
第Ⅴ章	吉永、弥栄
(付録)	山田

目 次

第Ⅰ章 調査の経過.....	7
第1節 調査に至るまでの経過.....	7
第2節 調査の組織及び対象面積.....	7
第3節 調査の経過.....	11
第Ⅱ章 遺跡の環境と周辺遺跡.....	14
第1節 遺跡の位置と環境.....	14
第2節 周辺遺跡.....	14
第Ⅲ章 遺跡の地形と地質.....	18
第1節 地形概略.....	18
第2節 層序.....	18
第3節 年代.....	22
第Ⅳ章	27
第1節 第1地点の調査.....	27
1 調査の概要.....	27
2 遺物.....	27
(1) 土器.....	27
(2) 石器.....	28
第2節 第2地点の調査.....	32
1 調査の概要.....	32
2 遺物.....	32
第3節 第3地点の調査.....	33
1 調査の概要.....	33
2 遺構.....	34
3 遺物.....	39
(1) 土器.....	39
(2) 土製品.....	54
(3) 石器.....	54
(4) 軽石加工品.....	55
(5) 金属器.....	71
第Ⅴ章 もとめにかえて.....	72
(付録) 指宿市横瀬住居址の年代.....	74

挿 図 目 次

第1図	遺跡附近の地形及び調査対象地区図	9
第2図	調査地点及び試掘トレンチ配置図	10
第3図	指宿地方の位置	14
第4図	横瀬遺跡と周辺遺跡の位置図	16
第5図	調査区の地形・地質図	19
第6図	調査区の標準地質柱状図及び各トレンチの地層対比図	20
第7図	各地点の層位図 (1)	24
第8図	各地点の層位図 (2)	25
第9図	各地点の層位図 (3)・横瀬遺跡	26
第10図	第1地点の出土遺物の土器実測図 (1)	29
第11図	第1地点の出土遺物の土器実測図 (2)	30
第12図	第1地点及び第2地点の出土遺物 石器実測図	31
第13図	第2地点の出土遺物、土器実測図	33
第14図	第3地点、第2トレンチ3区抜張区の土器出土状況図	36
第15図	横瀬遺跡の住居址と遺物出土状況図	37
第16図	横瀬遺跡の住居址検出状況図	38
第17図	第3地点の出土遺物、土器実測図 (1)	41
第18図	第3地点の出土遺物、土器実測図 (2)	42
第19図	第3地点の出土遺物、土器実測図 (3)	43
第20図	第3地点第5トレンチの出土遺物、土器実測図 (1)	44
第21図	第3地点第5トレンチの出土遺物、土器実測図 (2)	45
第22図	第3地点第5トレンチの出土遺物、土器実測図 (3)	46
第23図	横瀬遺跡2号住居址の出土遺物、土器実測図 (1)	49
第24図	横瀬遺跡2号住居址の出土遺物、土器実測図 (2)	50
第25図	横瀬遺跡2号住居址の出土遺物、土器実測図 (3)	51
第26図	横瀬遺跡の4・6号住居址の出土遺物、土器実測図	52
第27図	横瀬遺跡の8・9号住居址の出土遺物、土器実測図	53
第28図	第3地点の出土遺物、石器実測図(1) 及び土製品	57
第29図	第3地点の出土遺物、石器実測図(2)	58
第30図	第3地点の出土遺物、石器実測図(3)	59
第31図	第3地点の出土遺物、石器実測図(4)	60
第32図	第3地点の出土遺物、石器実測図(5)	61
第33図	第3地点軽石加工品実測図(1)	62

第34図	第3地点軽石加工品実測図(2).....	63
第35図	第3地点軽石加工品実測図(3).....	64
第36図	第3地点軽石加工品実測図(4).....	65
第37図	第3地点軽石加工品実測図(5).....	66
第38図	第3地点軽石加工品実測図(6).....	67
第39図	第3地点軽石加工品実測図(7).....	68
第40図	第3地点軽石加工品実測図(8).....	69
第41図	第3地点軽石加工品実測図(9).....	70
第42図	銅鏡及び鉄製品.....	71

表 目 次

第1表	これまでの経過.....	8
第2表	指宿市内の主要遺跡.....	15
第3表	第1地点出土の石器.....	17
第4表	第3地点出土の石器.....	54
第5表	第3地点軽石製品.....	55

図 版 目 次

図版1	調査地域全景と横瀬遺跡遠景.....	76
図版2	横瀬遺跡の近景と横瀬遺跡の調査風景.....	77
図版3	第1地点第1トレンチ深掘土層断面と第1地点第2トレンチ遺物出土状況.....	78
図版4	第2地点第1トレンチ調査状況と第2地点第1トレンチの池田火山灰堆積状況.....	79
図版5	第2地点第2トレンチ調査状況と第2地点第4トレンチ遺物出土状況.....	80
図版6	第3地点第1トレンチ調査状況と第3地点第2・3トレンチ調査状況.....	81
図版7	第3地点第2トレンチ第1拡張区遺物出土状況と第3地点第2トレンチ拡張区出土状況.....	82
図版8	第3地点第2トレンチ埠出土状況と第3地点第4トレンチ壺形土器出土状況.....	83
図版9	第3地点横瀬遺跡の遺物出土状況と第3地点横瀬遺跡の住居址および遺物出土状況.....	84
図版10	第3地点横瀬遺跡の住居址検出状況.....	85
図版11	第3地点横瀬遺跡の2号住居址と第3地点横瀬遺跡の2号住居址の高坏出土状況.....	86
図版12	第3地点横瀬遺跡の2号住居址の木炭出土状況と第3地点横瀬遺跡の4号住居址の出土状況.....	87
図版13	第1地点第1トレンチ出土遺物土器と第1地点第2トレンチ出土遺物土器.....	88
図版14	第1・2地点出土遺物石器と第2地点出土遺物石器.....	89

図版15 第3地点出土遺物土器	90
図版16 第3地点出土遺物土器	91
図版17 第3地点出土遺物土器（土師器）	92
図版18 第3地点出土遺物土器と第3地点出土墨書き土器	93
図版19 第3地点出土遺物須恵器と第3地点横瀬遺跡の出土遺物土器	94
図版20 第3地点横瀬遺跡の出土遺物土器	95
図版21 第3地点横瀬遺跡2号住居址の遺物土器	96
図版22 第3地点横瀬遺跡2号住居址の出土遺物土器	97
図版23 第3地点横瀬遺跡2号住居址の出土遺物土器	98
図版24 第3地点横瀬遺跡2号住居址の出土遺物土器	99
図版25 第3地点横瀬遺跡2号住居址の出土遺物土器	100
図版26 第3地点横瀬遺跡4号住居址の出土遺物土器と第3地点横瀬遺跡6・8号住居址 の出土遺物土器	101
図版27 第3地点横瀬遺跡6号住居址の出土遺物土器と第3地点横瀬遺跡9号住居跡の出 土遺物土器	102
図版28 第3地点の出土遺物土製品石器と第3地点の出土遺物石器	103
図版29 第3地点の出土遺物石器	104
図版30 第3地点の出土遺物石器	105
図版31 第3地点の出土遺物軽石加工品	106
図版32 第3地点の出土遺物軽石加工品	107
図版33 第3地点の出土遺物軽石加工品と第3地点の出土遺物鉄器	108
図版34 第3地点の出土遺物銅鏡	109

第Ⅰ章 調査の経過

第1節 調査に至るまでの経過

県営畑地総合土地改良事業に伴い、事業予定地区内の埋蔵文化財の分布調査及び確認調査を行なって、事業の推進と文化財保護との調和を図るために、第1表に示すように昭和50年度から実施しているものである。当初（昭和50・51年度）は鹿児島県教育委員会文化課により実施されたが、昭和52年度からは国・県の補助を受けて指宿市教育委員会社会教育課が実施している。

南薩東部地区道下工区について、昭和55年11月に事前の分布調査を行ない。遺物の散布が確認されたので、その後、鹿児島県農地整理課、南薩畑地灌漑事務所、指宿市教育委員会、鹿児島県教育委員会文化課が協議を重ねた結果、昭和56年度に国・県の補助を受けて、指宿市教育委員会が確認調査を実施することになった。

第2節 調査の組織及び対象面積

調査主体者	指宿市教育委員会	教 育 長	貳 方 忠 雄
調査担当者	鹿児島県教育委員会文化課	文化財研究員	吉 永 正 史
		主 事	弥 栄 久 志
		文化財調査員	川 畑 昭 光
事 務 担 当	指宿市教育委員会社会教育課	課 長	堀 口 次 雄
		文 化 係 長	小牟礼 隆 繁
		主 事	大岩本 稔
		タ	和 田 カツ子

なお調査企画において、鹿児島県教育委員会文化課長猿渡侯昭、課長補佐新時弘、同本田武郎、主幹吉井浩一、主任文化財研究員飯舘千代氏等の他管理係の指導・助言を得た。

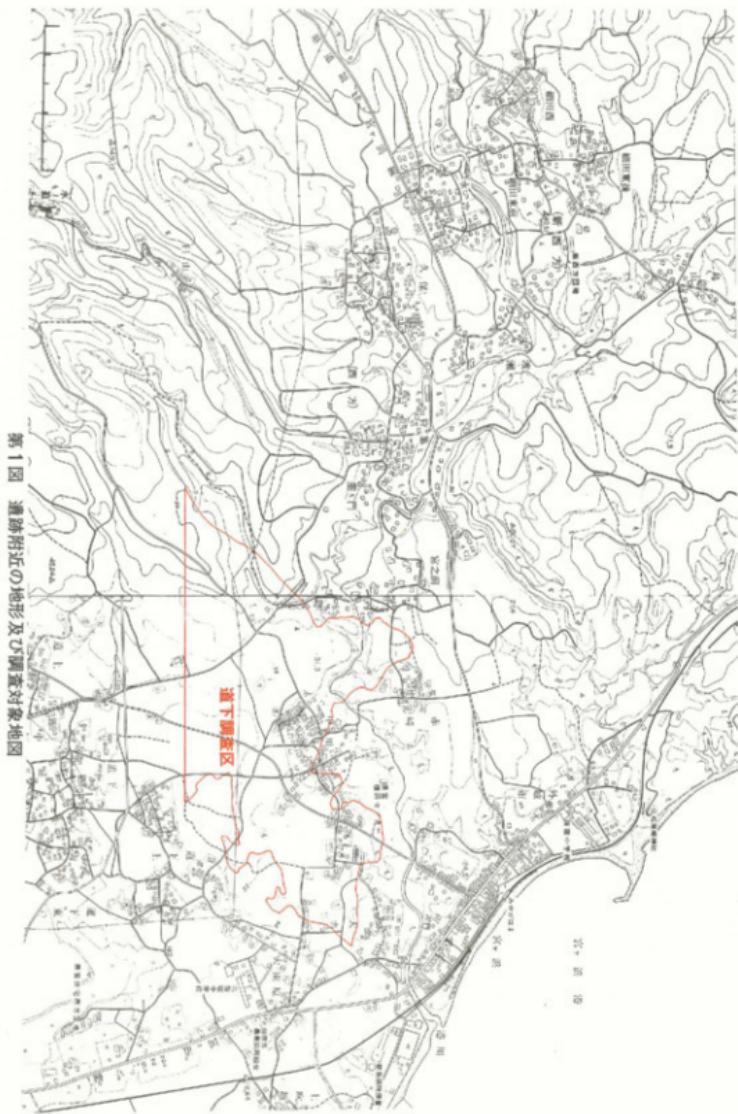
又、確認調査及び報告書作成作業において、鹿児島県文化財保護審議会委員河口貞徳氏と指宿高等学校教諭成尾英仁氏の指導・助言を得た。

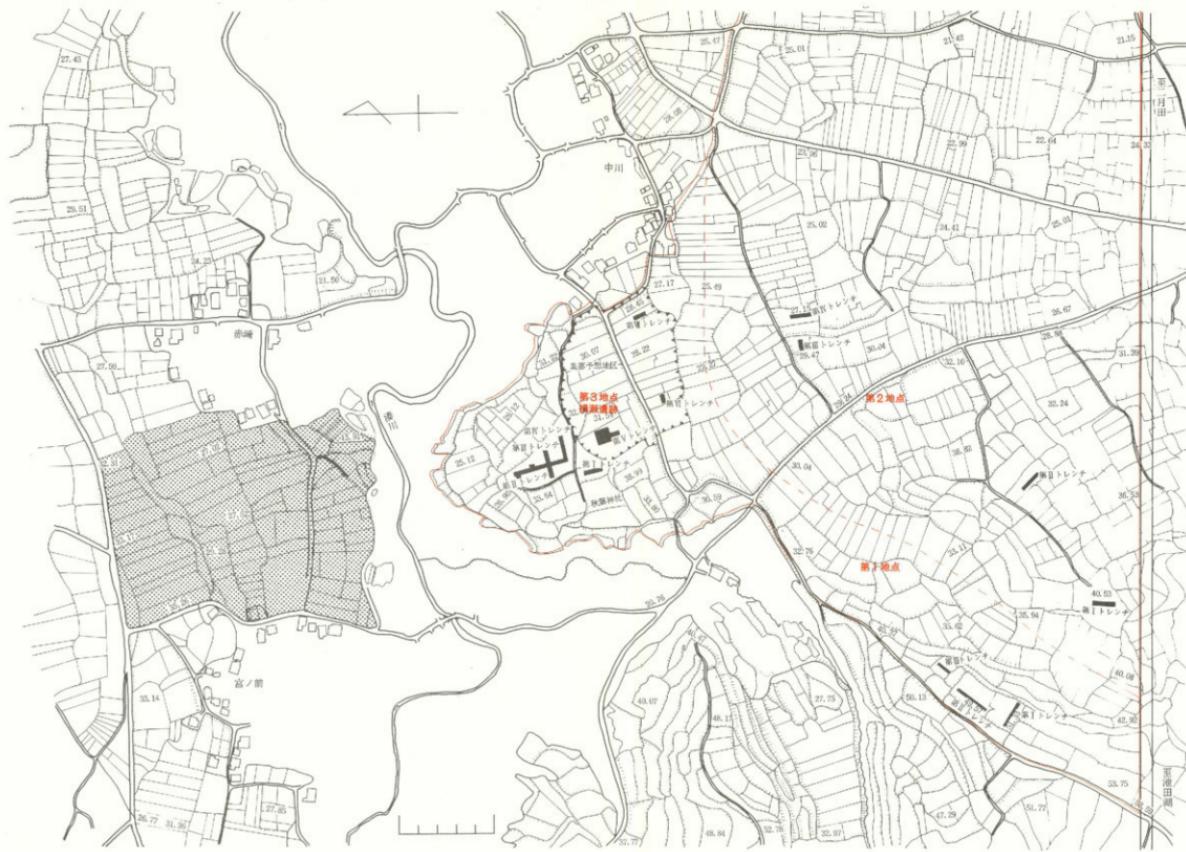
出土遺物のうち、銅製品については、北九州市立歴史博物館主幹小田富士雄氏に鑑定を依頼した。

確認調査対象面積は 700,000m² で第1図に範囲は示し、確認調査面積は800m² (2000m²) で第2図に各地点の分割と各トレンチを図示した。

第1表 これまでの経過

調査年度	調査地区	発見遺跡	時代・時期	調査者	備考
50年度	新西方地区 (主体者 文化課)	岩本遺跡	古墳時代 弥生時代中期 縄文時代晚期	文化課 吉永 正史 中村 耕治	設計変更保存 整理中
51年度	岩本工区 (主体者 文化課) (小牧第I)	第一地点	縄文時代	文化課 出口 浩 長野 真一	保存・整理中
		第二地点	古墳時代 縄文時代前期		文化課で記録保存 (出口浩・西田茂) 整理中
		第三地点	縄文時代早前期 旧石器時代		文化課で記録保存 (長野真一・中島哲郎) 整理中
		第四地点	縄文時代前期		保存・整理中
		第五地点	縄文時代前期		タ タ
		第六地点	縄文時代前期		タ タ
		第七地点	古墳時代		
52年度	岩本工区 (主体者 指宿市)	A地点	古墳時代 弥生時代中期	文化課 長野 真一 中島 哲郎	概報あり A・C遺跡は一部記録保存
		B地点	旧石器時代 弥生時代		設計変更・保存
		C地点	弥生時代 縄文時代晚期 縄文時代前期		整理中
53年度	小牧工区 (主体者 指宿市) (小牧第II)	出水追跡	弥生時代 縄文時代 旧石器時代	文化課 弥栄 久志 中島 哲郎	54年度報告
		尾越・堀添遺跡	旧石器時代		
		中尾遺跡	旧石器時代		
		露重遺跡	旧石器時代		
		小久保遺跡	縄文時代 旧石器時代		
54年度	鳥山工区 (主体者 指宿市)	西原道畠遺跡	縄文時代	文化課 弥栄 久志 中島 哲郎 井ノ上秀文	55年度報告
		西原追跡	弥生・縄文時代		
		早馬追跡	弥生時代		
55年度	宮之前工区 (主体者 指宿市)	宮之前遺跡	古墳・奈良時代	文化課 弥栄 久志 中島 哲郎	56年度報告
56年度	道下工区 (主体者 指宿市)	横瀬遺跡	縄文・弥生時代 古墳・歴史時代	文化課 吉永 正史 弥栄 久志	本報告





第2図 檜山町調査地点及び試掘トレンチ配置図

第3節 調査の経過

確認調査は、昭和56年7月13日から昭和56年9月19日まで実施し、出土遺物の整理作業及び報告書作成作業を昭和56年9月21日から昭和56年10月30日までと、昭和57年2月1日から昭和57年2月27日まで実施した。

以下日誌抄にて略述する。

7月13日（月） 本日より調査を開始する。発掘道具、器材等の搬入、トレンチ設定の準備を行なう。

14日（火） 第1地点に第1トレンチ（2×30m）、第2トレンチ（2×25m）を設定し、掘り下げを開始する。

15日（水） 第2トレンチに弥生時代中期の遺物の散布を確認する。第3トレンチ（2×15m）を設定し、掘り下げを行なう。

16日（木） 第2トレンチに縄文時代晩期の遺物が弥生時代中期の遺物と混在して出土する。

17日（金） 第2地点に第1トレンチ（2×25m）を設定し、掘り下げを行なう。

20日（月） 第1地点第3トレンチは遺物の出土ではなく、土層実測を行ない終了する。

21日（火） 第1地点第2トレンチの遺物出土状況の平板実測及びレベル測定。

第2地点に第2トレンチ（2×25m）を設定し掘り下げを行なう。第1トレンチの表土下は池田シラス層が厚く調査を終る。

22日（水） 第1地点の第1及び第2トレンチ掘り下げ終了。

第3地点に第1トレンチ（2×20m）を設定し、掘り下げを行なう。

23日（木） 第1地点第1トレンチ遺物出土状況1/50実測、レベル測定。第3トレンチ埋め戻し。

第3地点に第2トレンチ（2×65m）、第3トレンチ（2×30m）を設定し、掘り下げを行なう。

24日（金） 第1地点第2トレンチの遺物出土状況1/50実測、レベル測定。
他のトレンチは掘り下げ続行。

27日（月） 第1地点第2トレンチ土層実測を行ない、終了する。

28日（火） 第3地点第2及び第3トレンチに遺物の散布を確認する。第4トレンチ（2×23m）を設定し、掘り下げを行なう。

29日（水）～8月5日（水）

第3地点の第2～第4の各トレンチにおいて、古墳時代以降の土師器塊、甕等の遺物散布がみられ、検出・写真撮影・平板実測（1/100）・レベル測定遺物取り上げの繰り返し。

この間、第1トレンチの埋め戻し。

6日（木） 第3地点に第5トレンチ（2×20m）を設定し、掘り下げを行なう。第2

～第4トレンチ作業続行。

7日（金）～12日（水）

第3地点の第2～第5の各トレンチにおいて、遺物の検出・写真撮影・平板実測・レベル測定・遺物の取り上げの繰り返し。この間、第4トレンチの土層実測。

17日（月）～18日（火）

第3地点の第5トレンチに完形の高壙等の遺物と方形の落ち込みを確認したので、住居址を想定して、トレンチ拡張のため排土処理を行なう。

他のトレンチは掘り下げ続行。

19日（水） 第3地点の第5トレンチに拡張区（ $2 \times 2\text{m}$, $4 \times 3.5\text{m}$, $4 \times 4.5\text{m}$ ）を設定し、掘り下げを行なう。

20日（木） 第3地点第3トレンチの土層実測、他のトレンチは掘り下げ。

21日（金） 第3地点第3トレンチの埋め戻し、第2・第4トレンチ土層実測。

24日（月）～25日（火）

第3地点第2～第4トレンチ埋め戻し、第5トレンチ掘り下げ作業。

26日（水） 第2地点に第3トレンチ（ $2 \times 10\text{m}$ ）と第4トレンチ（ $2 \times 20\text{m}$ ）を設定する。

第3地点に第6トレンチ（ $2 \times 10\text{m}$ ）を設定する。第5トレンチは遺物精査・写真撮影・平板実測・レベル測定・取り上げ。

27日（木）～9月1日（月）

第2地点第3・第4トレンチの掘り下げ。

第3地点第5トレンチの掘り下げ続行。第6トレンチ掘り下げを行なう。

9月2日（火）～5日（金）

第2地点第3・第4トレンチ掘り下げ、遺物の散布を確認。

第3地点に第7トレンチ（ $2 \times 10\text{m}$ ）を設定し掘り下げを行なう。磨製石鎌が出土する。

7日（月）～11日（金）

第2地点第3・第4トレンチ、遺物出土状況平板実測・レベル測定・土層実測後埋め戻し。

第3地点第5トレンチ住居址検出作業。白銅製品・磨製石鎌・石製垂飾品及び甕の完形品出土。遺物出土状況1/20実測。第6トレンチ埋め戻し。

8日（火）に河口貞徳県文化財保護審議会委員に現地指導を受く。

14日（月）～17日（木）

第3地点第5トレンチ住居址9基検出する。清掃・写真撮影・遺物出土状況1/20実測・レベル測定・取り上げ後遺構の断面図作成後に埋め戻し。第7

トレンチ埋め戻し。

18日（金）発掘器材等の運搬、調査終了。

報告書作成は56年9月・10月整理を行ない、57年2月・3月に作成した。なお整理の段階で川畠昭光調査員も担当した。

56年9月24日

57年2月22日

{ 土器洗い

{ 原 稿

26日

27日

28日

{ 土器洗い

10月3日

5日

{ 注記

9日

12日

{ 注記・復元

17日

19日

{ 復元・実測

24日

26日

{ 実測

31日

57年2月1日

{ レイアウト

6日

8日

{ トレース

10日

12日

13日

} 原 稿

15日

{ 原 稿

20日

第Ⅱ章 遺跡の環境と周辺遺跡

第1節 遺跡の位置と環境

横瀬遺跡は鹿児島県指宿市西方横瀬にある。横瀬遺跡のある指宿市は薩摩半島の東南部に位置し人口約33,000人、面積78.24km²の温泉観光都市である。指宿市は指宿市郡の中では中心部にあり、北は喜入町、南は山川町、開聞町、西は頸城町に接し、東は錦江湾に臨み、対岸の大隅半島を一望できる。

指宿地方は火山活動の痕跡が多く、九州一の湖である池田湖、薩摩富士で名高い開聞岳、自然の良港山川港等がある。いずれも火山ないし、カルデラであり、他に山川マール、辻之岳、鰐池等が火山活動でできた地形をなしている。

遺跡付近は火山灰と腐植土で形成され、西側の山側より東側の海岸へ緩傾斜する台地である。火山灰は阿多カルデラに関する阿多火山灰、姶良カルデラに関する入戸火山灰、鬼界カルデラに関するアカホヤ火山灰、池田カルデラに関する池田湖火山灰、開聞岳に関する開聞岳火山灰等がある。本遺跡で関係するのは池田火山灰と、開聞岳火山灰である。

気候は亜熱帯性の北限でソテツの自生地があり、近くには天然記念物のメヒルギが自生している。そのため南国ムードがたどり、温泉と協調して観光都市をつくっている。

今回調査した地域は市街地の北西約4kmの所で北指宿中学校の西部にあたる。調査対象となったところは、道下・道下上・大園原・中川・柴立等の部落で、囲む地域にあたり、約70haの面積である。

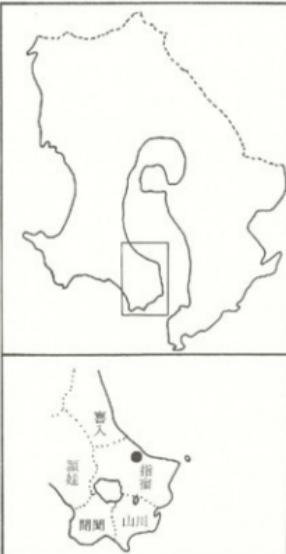
対象地域の地形は標高401.9mの清見岳より西へ傾斜する台地で最高位で標高50m、最低位で標高20mで30mの差がみられるところである。この地域は大きく3ヶ所の台地に分かれ、その間を谷が走っている。第2図は台地で地点を分けたものである。第Ⅰ地点が最も高く、第Ⅱ地点は最も広く、第Ⅲ地点は最も狭い。

横瀬遺跡の北側には湊川が東西に流れ、対岸には昨年調査した宮ノ前遺跡がある。

第2節 周辺遺跡

指宿市内で南薩畠地総合土地改良事業により調査した遺跡は50年度から56年度まで7回におよび、第2表に整理して記載した。

その中で主な遺跡は、小牧ⅢA遺跡・岩本遺跡・尾



第3図 指宿地方の位置

越、堀添遺跡、露重遺跡、宮ノ前遺跡である。小牧ⅢA遺跡は51年度に調査した遺跡で岩本工区にあたり、小牧第Ⅰ調査区で調査した第Ⅲ地点にあたる。ここは旧石器時代のナイフ形石器や尖頭器等が多数出土した遺跡である。なお、縄文早期の土器も出土した。

岩本遺跡は52年度に調査し、貝殻文の円筒土器が多量に出土し他に隆帶文土器、押形文土器がみられる。石器は石斧・石槍・石鎌など出土している。

尾越・堀添遺跡と露重遺跡は53年度小牧第Ⅱ調査区で発見された遺跡である。前者にはナイフ形石器が出土し後者には小型のナイフ形石器が出土した。

宮ノ前遺跡は55年度発見された遺跡で古墳時代から奈良時代にかけての遺跡である。住居址が8基確認され、その住居址の形態は堅穴が二重になっているものが4基、その内、方形の中に方形が掘り込まれているものが3基、方形の中に円形の堅穴が掘り込まれているものが1基検出された。遺物は成川式土器の壺形土器、壺形土器、鉢形土器、高壺形土器、壺形土器をはじめ6世紀末~8世紀初頭の須恵器が出土している。また鉄鎌や軽石加工品・石斧・石皿・植石・砥石等もみられる。

他に指宿市内では、国指定の史跡、「指宿橋牟礼川遺物包含地」がある。昭和48・49年度に指定地域内の調査が行なわれ、その後、都市計画で周辺の調査が54年度に行なわれた。縄文後期の指宿式をはじめ、古墳時代の成川式土器が多数出土した。周辺の調査からは住居址も1基検出した。現在では指定地内を買収し史跡整備を計画している。

以上のように指宿市内は重要な遺跡が多くみられるが、他に、国分直一氏・重久十郎氏・河野治雄氏等先史の調査した遺跡も多くある。

第2表 指宿市内の主要遺跡

遺跡名	所 在 地	時 代	地 形	備 考
1 宮 之 前	西方	古 墓・奈 良	台 地	成川式・須恵器・住居址
2 岩 本	小牧	縄 文 前 期	*	前平系土器
3 小 久 保	小牧小久保	縄文前・晚 期	*	晚 周Ⅱ式土器
4 露 重	小牧露重	旧 石 器	*	小型のナイフ形石器
5 尾 越・堀 添	小牧尾越・堀添	旧 石 器	*	ナイフ形石器・尖頭器
6 中 尾	小牧中尾	旧 石 器	*	小型の石器
7 小 牧 Ⅲ A	岩本	縄文前・旧石器	*	吉田式・尖頭器・ナイフ形石器・台形石器
8 鳥 山 (1)	新西方鳥山		*	土師器・須恵器
9 鳥 山 (2)	*		*	土師器・須恵器
10 鳥 山 (3)	*		*	土師器・須恵器
11 細 田 東 後	新西方細田東後		*	土師器・須恵器
12 舟 木	新西方舟木迫		*	土師器・須恵器
13 鳥 山	新西方鳥山		*	石斧・敲石



第4図 横瀬遺跡と周辺遺跡の位置図

	遺跡名	所在地	時代	地形	備考
14	渡瀬	新西方渡瀬	繩文中・後期	台地	阿高式・市来式・指宿式
15	幸屋	新西方幸屋		夕	土師器・須恵器
16	おばこぎこ	西方尾長谷川迫7420	弥生後期	夕	土師器・須恵器
17	外城市	西方外城市	弥生後期	夕	
18	松尾城址	西方6803	中世	夕	城址・堀
19	中川	西方中川	弥生後期	夕	住居址
20	道上	西方道上	弥生後期	夕	壺・變形土器
21	光明寺址	十町追田	奈良	夕	扁額「円通南仏書」
22	指宿高校校庭	十町236	弥生後期	夕	弥生土器
23	矢石	十町二月田矢石	弥生後期	扇伏地	變形土器
24	清見城址	池田清見城	中世	山形	
25	大円寺址	十二町小田大円寺	奈良	台地	穴地蔵・千手觀音木像
26	南追田	十町南追田	弥生後期	夕	
27	櫛奉札川	十二町大六下里櫛奉	繩文中・後・晚	扇伏地	黒川式・夜日式・市来式・阿高式
包舍地	札川		弥生中・後期		成川式・人骨・住居址
28	南丹波	十二町南丹波	弥生後期	扇伏地	壺・變形土器・圓石
29	沼ヶ浜	十二町沼ヶ浜	弥生後期	夕	壺形土器・高环
30	朝鮮ヶ岡	十二町朝鮮ヶ岡	弥生後期	台地	壺形土器
31	大山崎	十二町大山崎	繩文後期	夕	市来式・指宿式
	大渡	十二町大渡	繩文後期	夕	市来式・指宿式・人骨

第Ⅲ章 地形と地質

第1節 地形概略

横瀬遺跡は指宿市北部を東西に流れる港川の南岸の台地及び丘陵に位置する。遺跡の南西端は海拔約50mで、ここから北東にむかって火山々麓の末端が広がり、高度を徐々に減じていく。遺跡中央部から北東及び東部にかけては海拔約30mの比較的平坦な台地となっている。第5図に示されるように遺跡一帯の地形は(1)指宿火山中央火口丘群に属する火山の山麓地形、(2)池田湖形成に係る火山噴出物の一つである池田火碎流のつくる平坦な火碎流台地とその末端急崖、(3)湊川により開析され形成されたごく狭小な谷底平野の三つに区分される。(1)の火山々麓地形は第5図に示されるように比較的の包配はゆるやかで、中央火口丘群からの降下火碎物であるスコリア質の黄褐色火山灰(唐山火山噴出物)により基盤がつくられている。(2)は遺跡及び周辺に広くひろがっている平台な台地であるが、数m内外の小起伏をもっている。台地面の高さはおおよそ30mであるが、これは池田火碎流の厚さに近い。(3)の谷底平野は湊川により開析された狭小な平野であり、湊川が池田火碎流を浸食してつくられた。堆積物は池田火碎流が浸食されたものであることより、軽石まじりの成層した砂礫層である。遺跡内では比較的浅い谷が數本みられるが、いずれも北東から南西にのびている。これは火山裾野に形成された雨裂(ガリー)成長したものと考えられるが、谷内に池田火碎流、入戸火碎流が分布していることより形成の時期は古いといえる。

第2節 層序

横瀬遺跡の地層は、最上層の間聞岳火山噴出物互層から最下層の入戸火碎流(シラス)まで大きく8層に区分されるが、各々は堆積物の特徴によりさらに細く区分される。これらの堆積物はいずれも噴出源年代を異にする火山噴出物と、それを母材とする腐植土からなり、最高所のI地点の第1トレンチは全層厚は約4mに達する。ただ低地になるほど層厚は厚くなり、3地区の第3トレンチでは間聞岳火山噴出物の厚さだけでも3m近くに達する。

各層の名称及び特徴は次のようである。

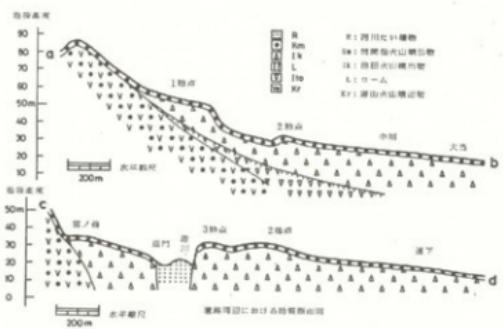
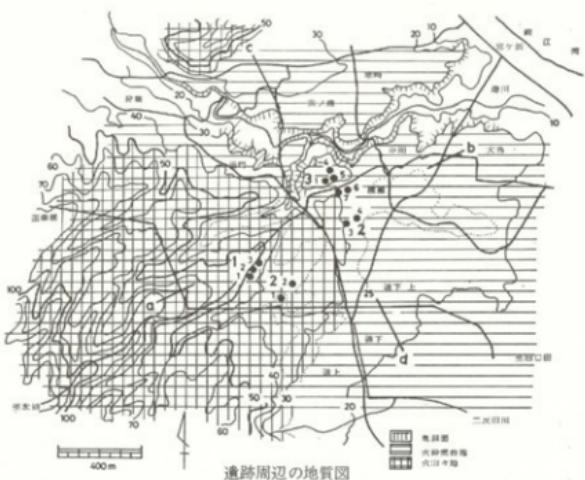
I層 表土、現耕作土。場所によっては2~3層に区分されることがある。

II層 間聞岳火山噴出物互層とその腐植土。

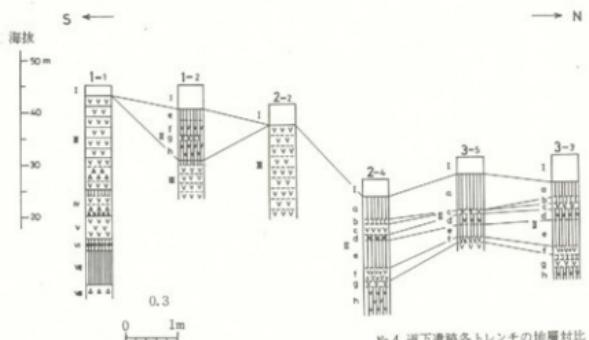
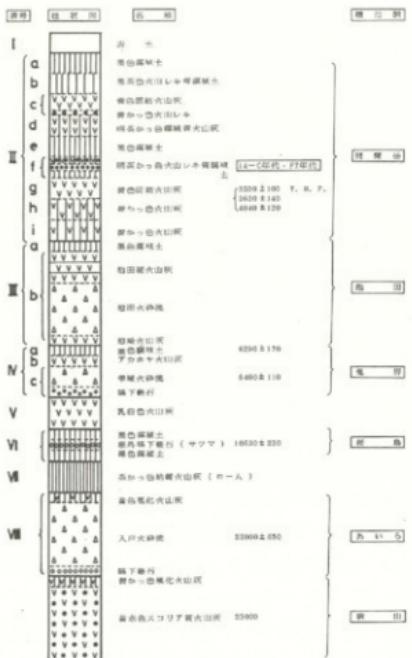
a 黒色腐植土。黒色が強く真黒であるが粘質ではなくサラサラしている。ごく少量の小径の火山礫が点在する。

b 黒茶褐色火山礫質腐植土。上位のa層より黒色が弱く、火山礫が多くなる。

c 紫色固結火山及び黄褐色火山礫。いわゆるコラ層とよばれるものに相当する。径3~4mmの火山角礫の間が紫色の細粒火山灰により充填されそれが硬く固結している。遺跡の低所では約30cmの厚さがあり、連続性もよいが、高所ではブロック状となる。場所によっては固結火山灰の直下に径4~5mmの角張った黄かっ色火山礫が成層している。



第5図 調査区の地形・地質図



第6図 調査区の標準地質柱に因及び各トレンチの地層対比図

d 明茶かっ色腐植質火山灰。若干の腐植を含むために稍黒色を呈する。
径3~4mmの小火山角礫地や、橙色の風化スコリアが点在する火山灰層でやや粘質を帶びている。

e 黒色腐植土。下位のf層を母材とする腐植土で、径1cm前後の火山礫が点在するためザラザラしている。

f 明茶かっ色火山礫質腐植土及び火山礫。径5mm前後の多数の亜円形火山礫と腐植土が入り混っている。多くの場所では火山礫と腐植土とははっきり分けることはできないが、3地点の3トレンチでは上位に黒色の腐植土があり、その下に径4~5mmの比較的淘伏の良い赤かっ色、黄かっ色の弱く固結した火山礫層がはっきりと認められる。

g 黄色固結火山灰比較的粗々で淘状の良い黄色ないし灰黒色の火山灰が硬く固結している。厚さは10cm内外でブロック状に点々とつながっている。

h, i 黄かっ色火山灰。やや粗粒の火山灰で上位のg層に較べてやわらかである。i層はやや黒色を帶びている。

III層 池田湖火山噴出物と腐植土。

a 黒色腐植土。池田湖火山灰を母材とする腐植で、黒色が強く粘質を帶びている。
b 池田湖火山灰。細粒から中粒の白色、桃色、黄色などの種々の色調の火山灰が細く成層し、小さな火山豆石を多量に含んでいる。遺跡内の最厚所では2m以上の厚さがある。

c 池田火碎流。5~10cmの角張った軽石、岩片まじりの非成層火碎流。遺跡内の高所では40~50cmと比較的薄いが、低所の台地では厚く30mにも達する。

d 池崎火山灰。黄色の中~粗粒の火山灰で、部分的には細く成層している。黒色の径2~3cm前後の安山岩片が点在するが、これは火山弾でボニブサグ構造をつくっている。

IV層 鬼界カルデラ火山噴出物と腐植土。

a 黒色腐植土。アカホヤ灰を母材とする腐植で、粘質はほとんどない。
b アカホヤ火山灰。ガラス質の黄色火山灰で下部ほど粗粒となる。
c 幸屋火碎流。きわめて発泡の良い径4~5cmの黄白色軽石が点在し、基質はガラス質火山灰でうめられている。火碎流の下部には径4~5mmの比較的淘状の良い角張った降下軽石が5~10cmの厚さに堆積している。

IV層は全層約60cmである。

V層 乳白色火山灰。細粒のガラス質火山灰でやや粘質を帶びる。色は乳白色~肌色を呈し、下部のVI層の黒色腐植土が混じることもある。下部の層との境界は直線的ではなく波状である。

VI層 桜島起源軽石と黒色腐植土。軽石の径は2~3cmで、風化が著しく色は黄橙色に変化している。軽石は黒色腐植土の中に広い幅をもって点在している。

VII層 茶かっ色粘質火山灰(ローム)。茶かっ色を帯びたきわめて粘質の強い火山灰であるが、指宿市北部の他遺跡のように各々の火山灰は明瞭に区分されない。

VIII層 入戸火碎流とその風化火山灰。上部の火山灰は風化により黄色化したごくガラス質の

AT火山灰であり、下部の入戸火砕流（シラス）も風化により黄色化している。発掘の調査のおこなわれたトレント内では以上のような堆積がみられるが、トレント外の崖部ではこれらの地層の下位に大隅降下軽石層と、黄色～赤褐色スコリア質火山灰（唐山火山噴出物）がみられる。大隅降下軽石は入戸火砕流の噴出に先立つ降下軽石で、約50cmの厚さをもちウズラ大の黄橙色軽石が大部分である。スコリア質火山灰は粗粒で固くしまっている。これは遺跡外の中央火口丘群からの噴出物で、遺跡内での厚さは十数mである。

第3節 年代

道下遺跡でみられる地層は前述のように多数の火山噴出物よりなるが、それらの各々については¹⁴C年代やFT年代が他地点で測定されている。

(1) 開聞岳火山噴出物 最初期噴出物の黄色火山灰の年代は¹⁴C年代により、およそ、3500～4000年前であることが知られている。また3～5トレントの住居址内にも開聞岳火山の中期噴出物がみられるが、その上の住居址内の炭化木の年代は、 1980 ± 15 Y.B.P.である。

(2) 池田湖火山噴出物 山川町福元海岸で採集された池田火砕流の二次堆積物の¹⁴C年代は約6300年前と8300年前であるが、これはやや古くでいる。

(3) 鬼界カルデラ火山噴出物¹⁴C年代等について数十例の報告があるが、約6300年前に近いようである¹⁰。

(4) 桜島起源軽石 従来薄層理火山灰層とよばれていたものに対比され、その降下軽石部分が飛来したものである。¹⁴C年代は約11000年前程度である。最近町田により新称「薩摩」が与えられた。

(5) 入戸火砕流及びAT火山灰 数十例の¹⁴C年代が知られているが、およそ22000年前に近いようである¹¹。

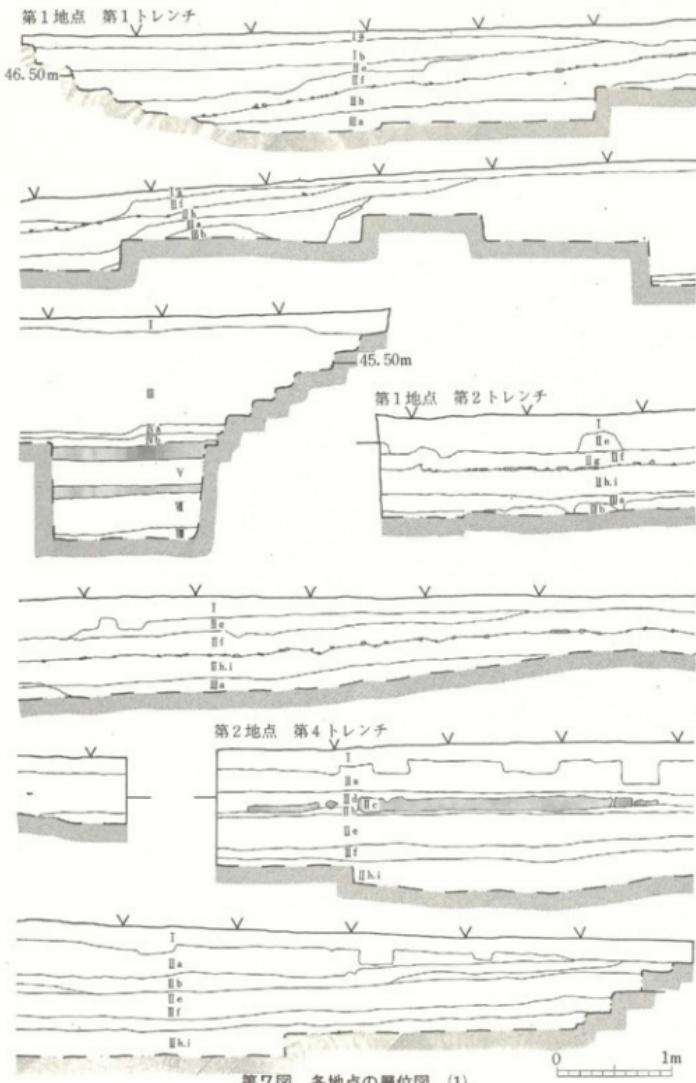
(6) スコリア質火山灰（唐山火山噴出物） 中央火口群からの噴出物であるスコリア質火山灰については¹⁴C年代は知られていないが、中央火口群をつくる火山の一つである清見岳のFT年代は 25×10^4 年である¹²。清見岳はスコリア質火山灰とほぼ同時期につくられているので、火山灰もおよそこの付近の年代に落ち着くものと考えられる。

4. 各層の堆積様式

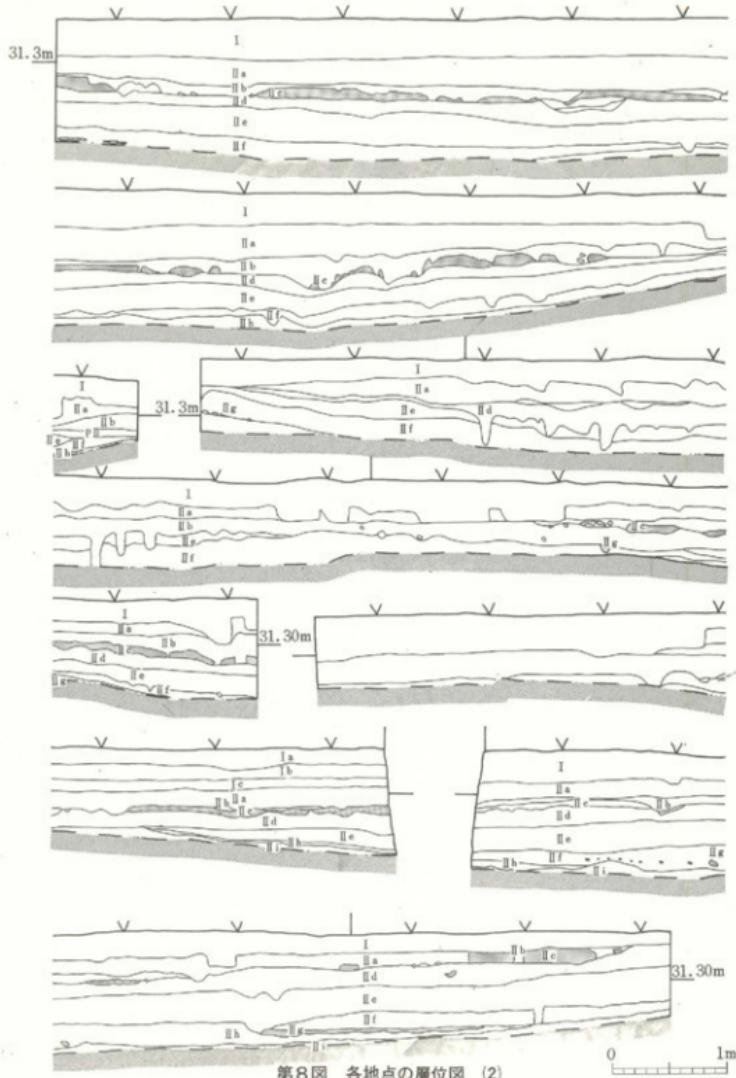
各層の堆積様式は昭和54～55年にかけて発掘された鳥山遺跡とほぼ同様であるが、遺跡内の高所では池田火砕流、入戸火砕流はきわめて薄く1m以下の厚さであるが、低所にくると急激に厚くなり池田火砕流では30m前後に達し台地を形成している。これは池田火砕流が濁川沿いの旧地形の低所にそって流走し、そこに厚く堆積したことを示している。

鬼界カルデラ火山噴出物、開聞岳火山噴出物は地形にそってほぼ平行に堆積しているが、高所では薄く低所では厚くなる傾向がある。特に開聞岳火山噴出物は低所ほど降下碎物の枚数が多く、しかも厚くなっている。これは池田火砕流のつくる平坦な台地上に堆積し、その後の流水により削平が少なかったことに起因する。

- (1) 古川博恭, 中村真人 (1969)
石川秀雄他3名 (1979)
- (2) 地質調査所 (1975)
- (3) 町田 洋 (1982)
- (4) 石川秀雄他4名 (1972)
- (5) 町田 洋 (1981)
- (6) 町田 洋 (1977)
- (7) 地質調査所 (1975)

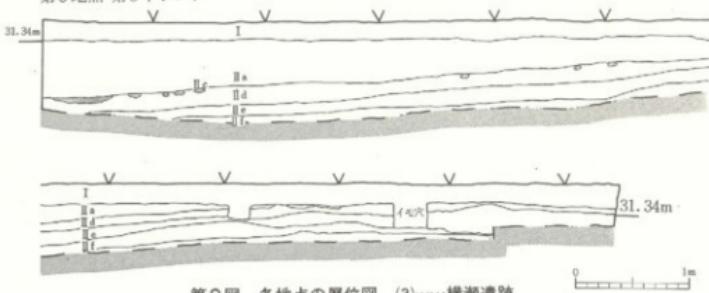


第7図 各地点の層位図 (1)



第8図 各地点の層位図 (2)

第3地点 第5トレンチ



第9図 各地点の層位図 (3)....横瀬遺跡

第Ⅳ章 各地点の調査

第1節 第1地点の調査

1. 調査の概要

第1地点は、道下工区内の西側の台地末端部分の尾根状になったところの南側にあり、標高は約52—46mを測り、工区内はもちろん指宿市街地も一望できるところである。

トレンチは、地形が階段状となっているため、畑の区画等を考慮しながら認意に設定し、掘り下げを行なった。

土層は、開墾等のため階段状となっていて保存状況は必ずしも良好とはいえず、第1・2トレンチではII層のうちa～dが、第3トレンチではII層のほとんどが欠除していた。

第1トレンチでは一部について深掘りを行ない、Ⅴ層（シラス土）までの層序の確認を行なった。

第1地点では、遺構は検出されず、遺物が第1・2トレンチからII層から散布状況で出土したのみで、第3地点からは遺物も出土しなかった。

2. 遺物

(1) 土器

縄文土器（第10図、図版89）

II f-h層から出土したものである。1は赤茶褐色を呈する口縁部から胴部にかけての破片である。口縁径は24.5cmを測り、口縁部には台形状の隆起がみられ、4本の平行横線文を施すものである。器面は内外共になで仕上げである。胎土に砂粒を含み、焼成は良い。2は暗茶褐色を呈する頸部が「く」字状をなし、直口の口縁部片である。口縁径は24.8cmを測り、口縁部には3本の平行凹線文をめぐらしている。器面は内外面共に丁寧なヘラみがきがなされている。胎土に細砂粒を含み、焼成は非常に良い。3はやや外に開く直口の口縁部片である。色調は茶褐色を呈する。口縁部ではやや肥厚しており、器面の内外に植物纖維による擦痕がみられる。胎土に細砂粒を含み、焼成は良い。4は胴部が「く」字状の張りをもち、若干内傾する口縁部片である。胴部屈曲部と口縁端部に突帯を貼りつけ、刻みを施すものである。外面が黒褐色、内面が茶褐色を呈し、器面はややあらい。胎土は石英砂粒を多く含み、焼成はやや悪い。5は暗茶褐色の底部破片である。底部径は10.6cmを測り、底部端は張り出し部を有する。外面は丁寧なヘラみがきが継続になされている。砂粒を胎土に含み、焼成は良い。6は外面が茶褐色、内面が黒褐色の底部破片である。底部径は11.3cmを測り、底部端は5同様張り出し部を有する。内外面丁寧なヘラみがきを行なっている。砂粒を胎土に含み、焼成は良い。

弥生土器（第11図、図版89）

II f層から出土したものである。7は、口縁径が16.9cm、頭部径が13.4cmの壺の口縁部片である。外反する口縁部で口唇部は浅い凹線状となっており、頭部には細い沈線状のものがめぐ

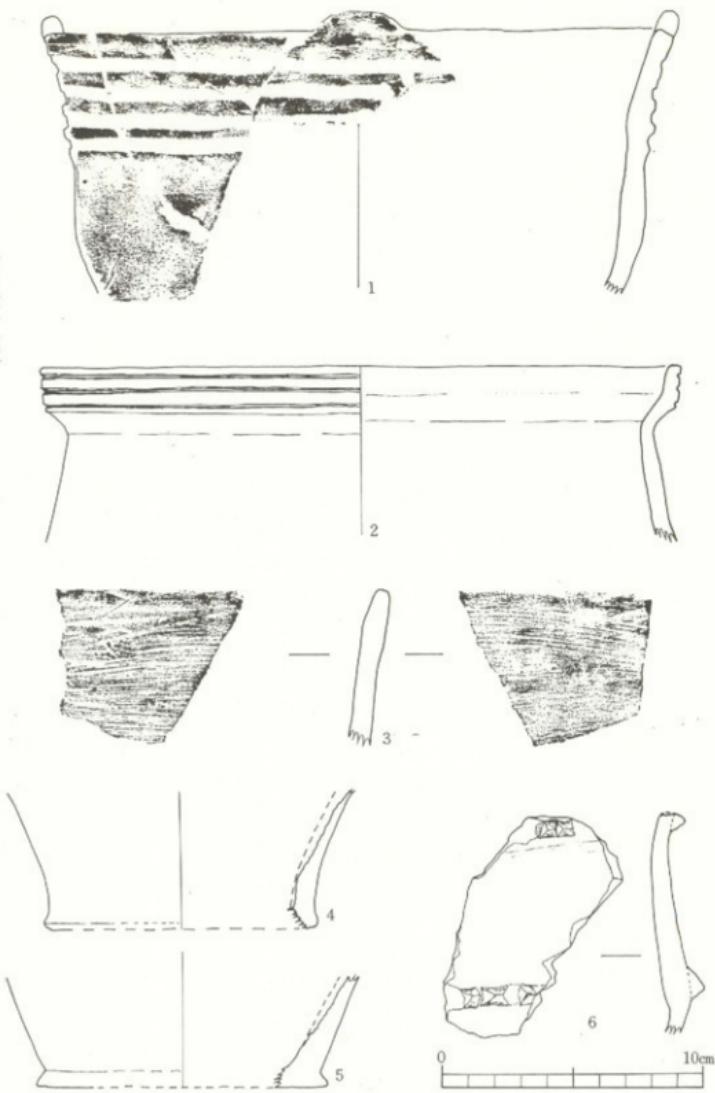
っており、文様を意図したものか、成形の際に生じたものかは不明である。色調は淡茶褐色を呈しており、胎土に砂粒を含み、焼成は良い。8～10は甕の小破片である。8・10の口縁端部は断面三角形の貼り付けがなされ、10は整形のためか断面が台形を呈する。いずれも茶褐色を呈し、9には口唇部から内面にかけて朱が塗られている。胎土には砂粒を含み、焼成は8が良く、9・10はやや悪い。11はほぼ直口の口縁端に断面三角形の突帯をもつ甕の口縁部片で、口縁径は32.0cmを測る。器面は内外共になで仕上げである。色調は外面が暗茶褐色、内面が淡茶褐色を呈する。胎土に砂粒を含み、焼成はやや悪い。12はほぼ直口の口縁端とその下位に断面三角形の突帯を貼り付けた甕の口縁部片で、口縁径は32.4cmを測る。器面は内外共になで仕上げである。色調は外面が暗茶褐色、内面が淡茶褐色を呈する。胎土に砂粒を多く含み、焼成はやや悪い。13・14は直口の口縁端とその下位に断面三角形の突帯を貼りてけ、口縁端のものには刻み目を施す甕の口縁部である。器面は14の両突帯の間に縫位のはけ目を施し、他と13の全体はなで仕上げである。色調は13の外面が暗茶褐色、内面は口唇部から胴部にかけて朱が塗られていて赤褐色を呈する。14は内外共茶褐色を呈する。胎土に砂粒を多く含み、焼成は13がやや悪く、14は良い。15・16は甕の底部片である。15は胴部へやや聞く平底のものである。底部径は10cmを測る。外面は継作のはけ目を施している。色調は、内外共茶褐色、胎土に石英砂粒を含んでおり、焼成は良い。16は充実した底部で、やや上位でいったんしまり、胴部へと聞く形である。底部径は6.9cmを測る。色調は外面が灰褐色、内面は黒褐色を呈する。胎土は小礫をも含んでいる。焼成はやや悪く、一部剥離がみられる。

(2) 石 器 (第12図、図版14)

第2トレンチのII層から出土したものである。17は安山岩製の凹石である。たて12.3cm、よこ10.6cm、厚さ4.5cmのもので重さが約1kgあり、やや重いものである。18は安山岩製の石皿の破片である。あまり使用されなかったのか、さほどの凹みはみられない。19は真岩製の扁平な抉入石斧である。たて14.5cm、よこ5.5cm、厚さ1.5cmのものである。

第3表 第1地点出土の石器

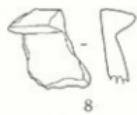
No.	トレンチ	層位	石 材	たて[cm]	よこ[cm]	厚さ[cm]	重さ(g)	石器名	備 考
17	2トレンチ	2 h	安山岩	12.3	10.6	4.5	1032.15	凹 石	
18	2トレンチ	2 h	安山岩	10.9	10.4	9.0	915.5	石 皿	
19	2トレンチ	2 h	真 岩	14.5	5.5	1.5	153.5	抉入石斧	



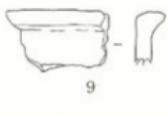
第10図 第1地点出土遺物土器実測図 (1)



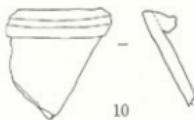
7



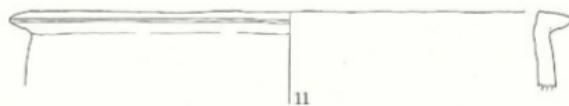
8



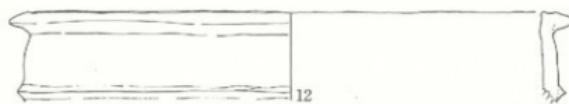
9



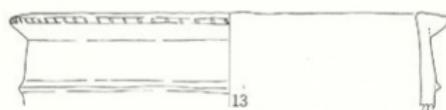
10



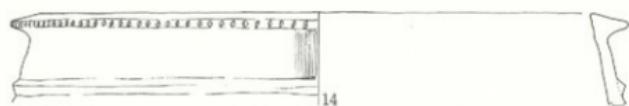
11



12



13



14



15

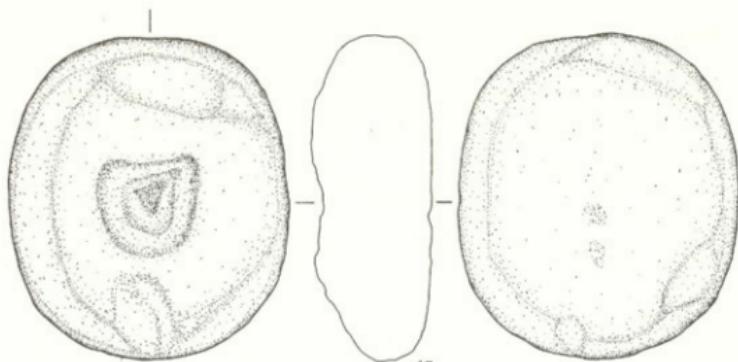


16

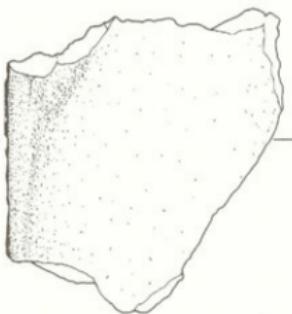
0

10cm

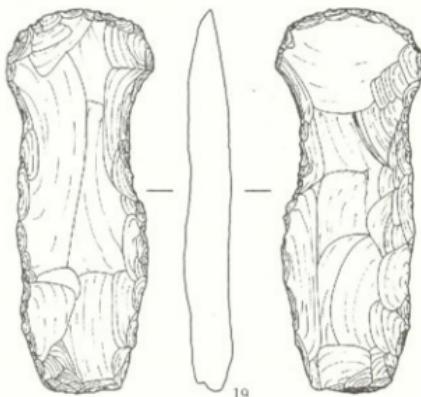
第11図 第1地点の出土遺物土器実測図 (2)



17



18



19



第12図 第1地点及び第2地点出土遺物、石器実測図

第2節 第2地点の調査

1. 調査の概要

第2地点は、道下工区内の南側の台地末端部の尾根状となった部分から裾部までの地域で、第1地点同様傾斜部は階段状に開墾されており、迫を挟んで対面している。標高は27~40mを測り、東へと傾斜していく。

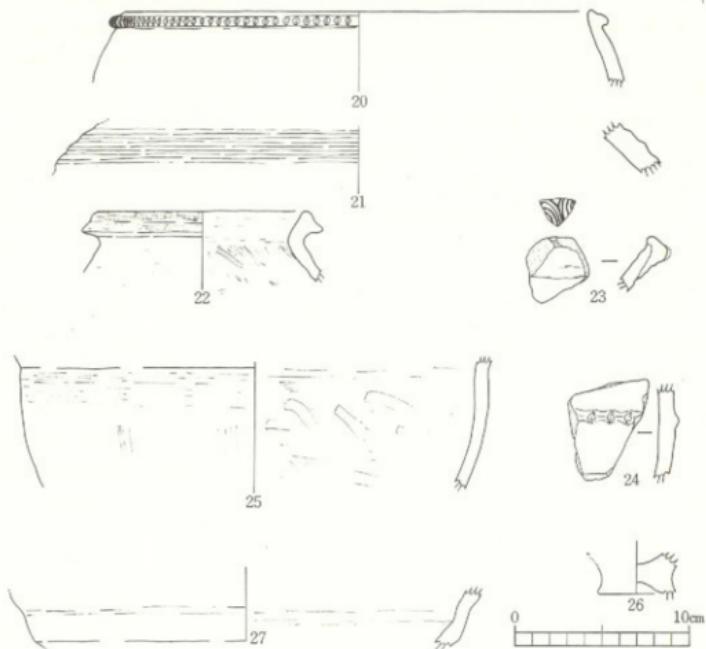
トレンチは、第1~4トレンチまで掘の区画等を考慮しながら認意に設定し、掘り下げを行なった。

遺構はどのトレンチからも検出されず、遺物が第3・4トレンチから散布状態で小破片のみ出土した。

2. 遺 物 (第13図、図版14)

遺物は、第3・4トレンチから出土したが、出土量にくらべ資料化できるものが少なかった。遺物は土器片のみで、石器は出土しなかった。

20は、やや内傾する口縁端に刻みを施した貼り付けの突帯を有する壺の口縁部片である。口縁径は28.8cmを測る。器面はなで仕上げで、外器面にはススが付着している。色調は外面が暗茶褐色、内面が茶褐色を呈する。胎土に砂粒を含み、焼成は良い。21は、3本の突帯を有する壺の肩部片である。色調は内外面共茶褐色を呈する。胎土に砂粒を多く含み、雲母片が多く観察される。焼成は良い。22は、外反する口縁端に貼り付けの突帯状のものを有する口縁片である。外面ははけ目調整を施している。色調は外面が灰褐色、内面が淡茶褐色を呈する。細砂粒を含み、焼成は良い。23は、外反する口縁部片で口唇部を粘土の貼り付けにより肥厚させたものである。肥厚した口唇部に同心円状の浅い沈線がみられるが、文様か製作時における擦痕であるかは破片が小さいために判断できない。色調は赤褐色を呈し、胎土に砂粒を含み、焼成は良い。24は、刻み目を有する突帯を貼り付けた壺の胴部片である。突帯は小さく刻みも浅いものである。色調は淡茶褐色を呈し、胎土に細砂粒を含み、焼成は良い。25は、頸部から胴部にかけての壺の破片である。整形は、外面の頭部近くでは横位の、胴部では縱位の、内面は斜位のヘラなどである。色調は、外面がススの付着のため黒褐色を、内面が暗茶褐色を呈する。胎土に砂粒を含み、焼成は良い。26は、口縁部へ外反する高环の环部片である。整形は丁寧なもので仕上げがなされ、色調は赤褐色を呈する。胎土は精製された土で、焼成は良い。27は、小形の壺の脚部である。てずくね土器の可能性もある。底部はやや浅いあげ底と考えられる。色調は内外面共茶褐色であるが、焼成がやや悪いためか、断面部は黒褐色を呈する。胎土は砂粒を多く含む。



第13図 第2地点の出土遺物、土器実測図

第3節 第3地点の概要

1. 調査の概要

第3地点は調査対象地域の中で中央の北端部にあたる。北側には湊川が蛇行し、対岸には宮ノ前遺跡がみられる。標高32mの舌状台地で高台には秋葉神社がある。試掘トレンチは7ヶ所入れた。秋葉神社の東側に第Ⅰトレンチは2m×20m、第Ⅱトレンチは神社の東北に2m×60m、第Ⅲトレンチは2m×30m、第Ⅳトレンチは2m×25m、第Ⅴトレンチは神社東側に2m×20m、第Ⅵトレンチは神社東南側に2m×10m、第Ⅶトレンチは2m×15mのトレンチを設定した。

第Ⅰトレンチは、開聞岳の火山灰と腐植土(Ⅱ層)を振り下げて行ったが、池田湖火山灰(Ⅲ層)までは円礫が出土しただけで、造構や人工遺物は出土しなかった。第Ⅱ・Ⅲ・ⅣトレンチはⅡ層中に縄文晩期から土師器まで包含されていた。造構は検出できなかった。またこの地点の旧地形は凹地になっていて、包含層は1m～2mの深さにみられた。第14図は土師器の出土状況である。

第ⅤトレントはⅡ層からⅢ層に掘り込んだ住居址がみられたために15m四方に拡張した。包含層はⅡe層とⅡf層で縄文晩期から弥生後期までみられたが主体は弥生後期の遺物であった。

第Ⅵトレントは弥生後期の包含層が2m近くでみられた。第Ⅶトレントは深さ1m位で弥生後期の遺物がみられた。

2. 遺構 (第15・16図、図版9~12)

遺構は、住居址が第5トレントとその拡張部分からすべて切り合った状態で12基検出された。

1号住居址

1号住居址は、西壁と床面の一部が検出されたのみであり、pitは確認できなかった。壁の高さは約15cmである。遺物はあまり出土しなかった。

2号住居址

2号住居址は、東壁が検出されなかつたが、4m×約4mのほぼ方形のものと考えられ、深さは約30cmである。pitは4個あり、1~3は二重pitである。1は上部の径が56cm、下部の径が19cm、深さが35cm、2は上部の径が50cm、下部の径が22cm、深さが29cm、3は上部の径が41cm、下部の径が18cm深さが29cm、4は径が52cm、深さが18cmを測る。中央には116cm×134cm、深さ20~24cmの長方形の掘り込みがあり台石(238)が置かれていた。南側の壁は7号ないしは9号の住居址に切られてはいるが上面での観察では一番新しい住居址である。遺物は他の住居址よりも多く種類も豊富である。変形土器、壺形土器片、長頸壺等が出土した。銅鏡片も埋土上部で出土している。

3号住居址

2及び4号住居址により切られて西側の隅が一部検出されたもので、深さは7~16cmある。pitは検出されなかつた。遺物は、変形土器片、壺形土器片等が出土しているが破片が少なく、量も少なかつた。

4号住居址

2、5、9、11、12号住居址に切られ、西・南の壁と径96cm、深さ17~35cmの掘り込みのみ検出されたものである。住居址の深さは6~28cmである。遺物は変形土器片が出土しているが実測できるものは変形土器1点であった。

5号住居址

西側の壁が一部検出されたもので、11号住居址に切られている。深さは20cmである。遺物は変形土器片・壺形土器片が出土したが少量であった。

6号住居址

西と南の壁の一部が検出され、北壁は9号住居址に切られているが、床面は同じレベルにある。深さは9~3cmである。pitは2個検出され、8は径が34cm、深さが50cmあり、10は径が20cm、深さが34cmある。8号住居址によって切られている。遺物は変形土器片等が出土している。

7号住居址

北壁の一部と床面が検出された。床面は6、9号住居址より若干高く、若干固いものであり、

南側の床面の下位には6号住居址の床面が存在する。6・9号住居址より新しいものと考えられる。深さは27cmである。*pit*はない。遺物は菱形土器片、壺形土器片等が出土している実測できるものはなかった。

8号住居址

北・西壁が一部検出され、全体は未調査のため不明である。深さは33cmである。*pit*は1個確認され、径が35cm、深さが10cmである。6、7号住居址を切っている。床面のレベルは住居址の中で一番低い。遺物は菱形土器、壺形土器等が出土したが破片で実測できるものは少なかった。

9号住居址

北の西壁の一部検出されたものである。深さは22cmである。床面は6号住居址のものと明瞭に線引きできなかった。*pit*は3個検出され、5は径が33cm、深さが24cm、6は径が30cm、深さが26cm、7は径は28cm、深さが40cmである。7号住居址を切っている。遺物は菱形土器片や壺形土器片が出土している。

10号住居址

西と南の壁の一部が検出され、1、2号住居址により切られている。深さは23cmである。*pit*は検出されなかった。遺物は菱形土器片や壺形土器片が出土している。

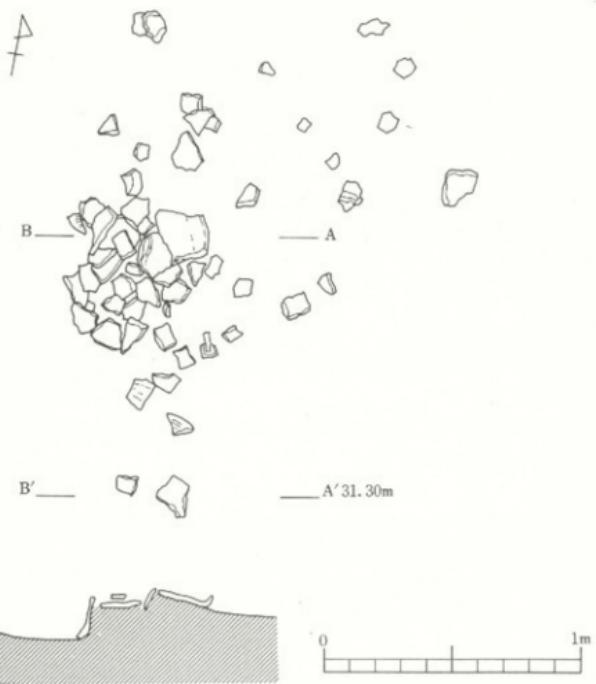
11号住居址

西の壁のみ一部検出され、12号住居址に切られている。*pit*は検出されなかった。遺物菱形土器片や壺形土器片が出土している。

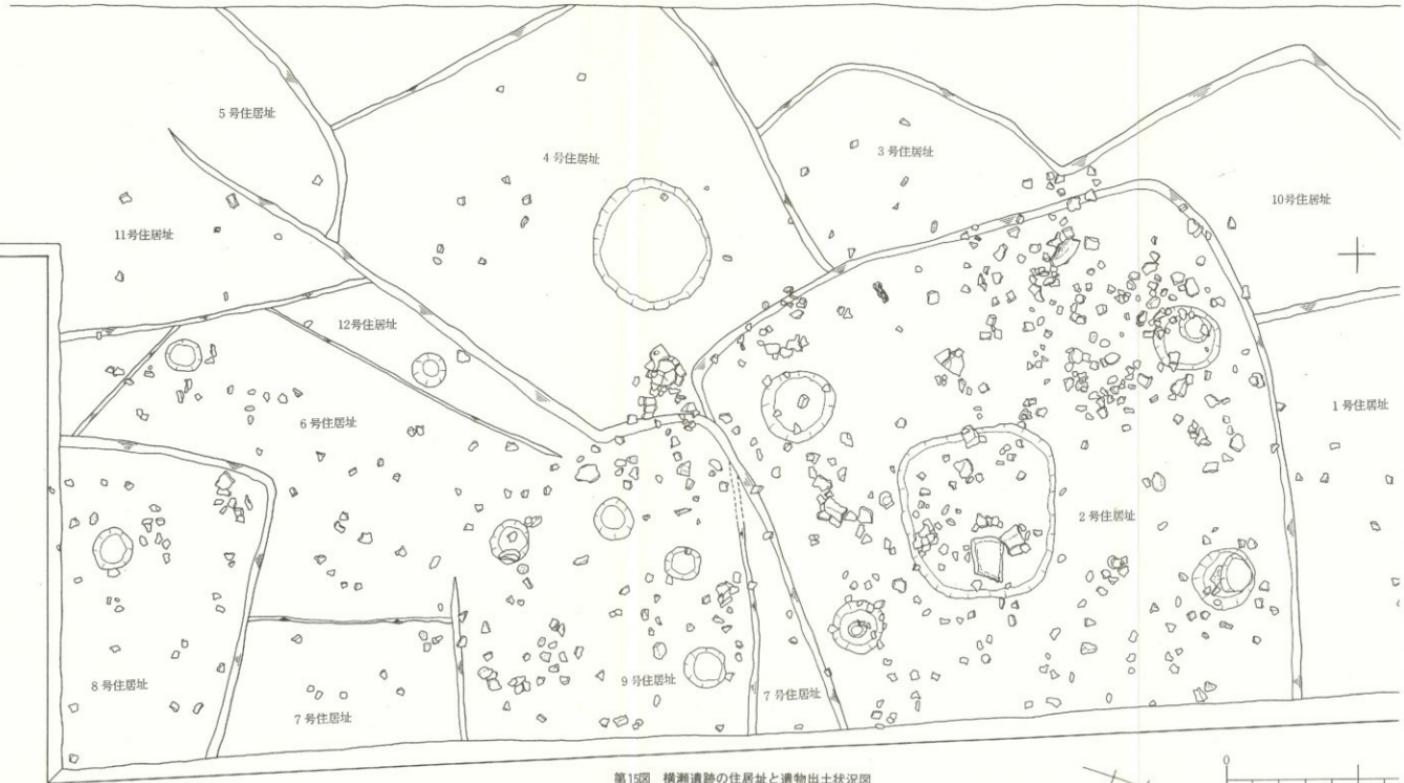
12号住居址

西壁の一部が検出され、6号住居址に切られている。深さは21cmである。*pit*は1個検出され、径が22cm、深さが28cmである。遺物は菱形土器片や壺形土器が出土している。

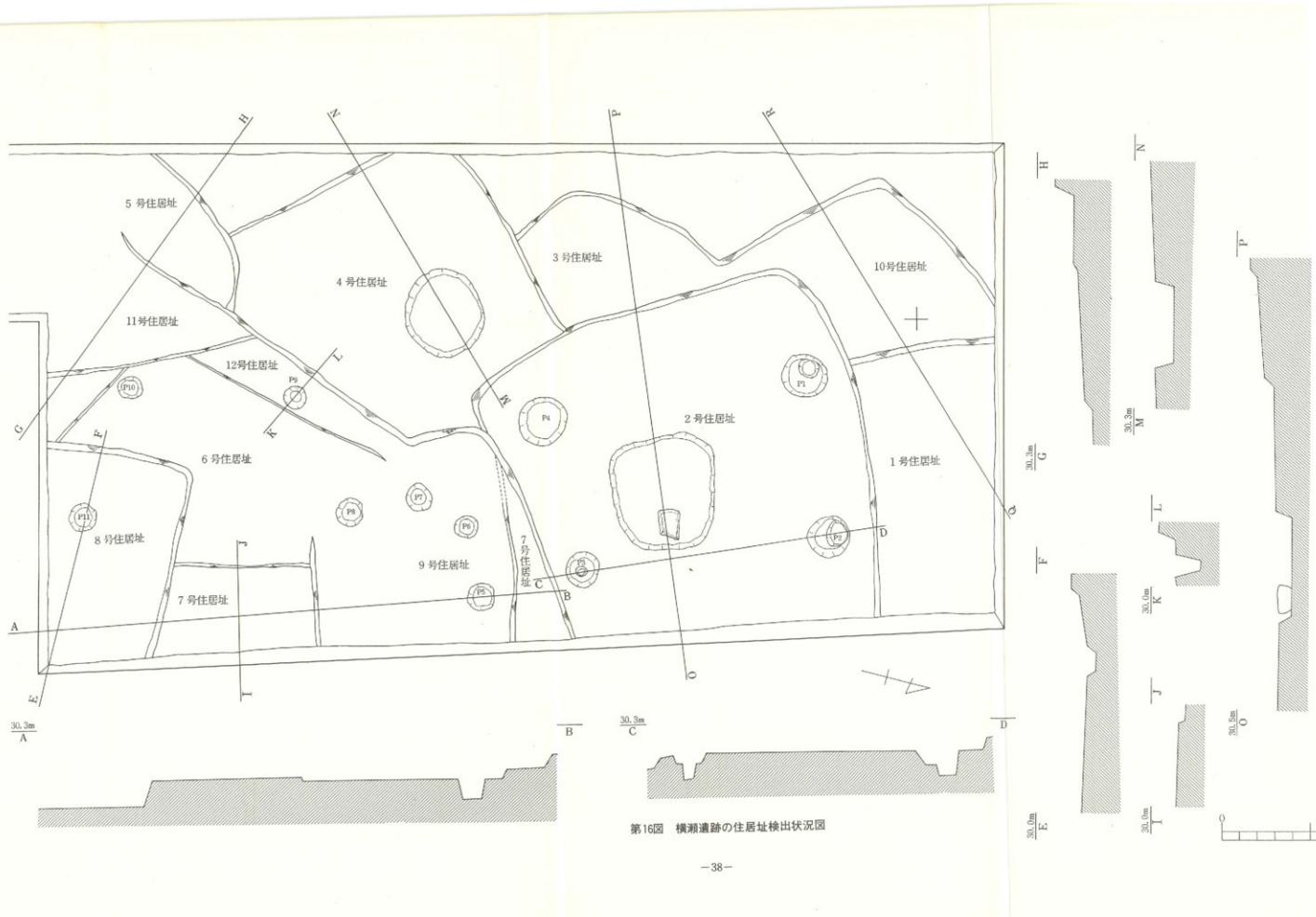
ここでみられる住居址は竪穴住居址であり、方形ないし角丸方形である。12基の切り合いをみれば $3 < 4 < 5 < 11 < 12 < 6 < 7 < 8 < 9 < 2$ 、 $10 < 1 < 2$ が考えられる。



第14図 第3地点第2トレンチ3区拡張区の土器出土状況図



第15図 横瀬遺跡の住居址と遺物出土状況図



3. 遺物

(1) 土器 (第17~27図、図版15~27)

3地点は、第Vトレーナーとそれ以外のトレーナーに分けた。第I・II・III・IV・VI・VIIトレーナーの遺物は、28~132までである。

28~34は、縄文晩期の遺物である。28は口縁部で大形の刻目突帯のある土器で夜白式土器に比定される。29は口唇部に刻目突帯、口縁部に数条の沈線を旋している土器である。30は蓋形土器の口縁部と思われ、リボン状の突起の部分である。器面は条痕が多くみられる。赤褐色を呈す。31は蓋形土器の口縁部でリボン状の突起の部分である。上面は条痕の調整があり、下面は施研磨調整である。32は底部で外器面は施研磨がみられる。33は、底部で円盤状貼り付けで平底を呈す。外器面は施研磨がみられる。34は甕の口縁部で刻目突帯がある。

35~55・65は、弥生式土器である。36は口縁部と肩部に三角断面突帯がある甕である。焼成は良くない。35は36と同じ形態であるが、器面に施調整痕が口脣部にみられる。37・38・42・43も蓋形土器の口縁部である。37は黄茶褐色を呈し、口縁部がく字形になっている。38はL字形口縁であるが、口脣部に連点が見られる。39は三角断面突帯に近い。42は茶褐色でし字形口縁の甕である。口縁部には刻目突帯があり、肩部には2本の沈線がみられる。43はく字形になる口縁部で、内側にとびだす変調T字形口縁の形態である。焼成は非常に良い。40は、T字形口縁に近い土器である。47~49・64は蓋形土器の底部である。47は平底である。48は筒状に高い底部で平底である。49は高い底部であるが上げ底である。64は上げ底である。4点とも茶褐色を呈し、焼成は良い。45~55は蓋形土器である。45~53までは口縁部である。44・45・46は口縁部が外反し、口脣部には櫛書きの波状文がみられる。櫛歯は3~4本である。口脣部は若干広い。焼成はそれぞれ良く、色調は45が若干赤みをおびているが茶褐色である。50~53は口脣部が外溝し、50・51が頭部に屈折線が若干みられる。また52は口脣部が丸みをおびているが他は角張っている。胎土・焼成はいづれも良いが色調は51が暗茶褐色を呈しているだけで、他は茶褐色を呈している。54・55は底部である。54は平底で55は丸底である。54は内側に施調整がみられる。色調は54が茶褐色で55は赤褐色である。

56~63は奈良時代以降の蓋形土器と思われる。口縁部が外反し、全体的に暗茶褐色である。内側には施けづりがあり、外側はナデ調整がみられる。57には施状施文具で沈線状の段がある。61は小型であり、口縁部の外反は浅い。62には雲母が多い。65~101は奈良・平安時代以降の土師器である。その中で蓋形土器ならびに鉢形土器の底部が65・66である。色調は明茶褐色で胎土が良い。器面は細いナデ調整痕がみられる。67~80・82~101は土師器の焼である。82・83・84は高台付ではなく、他は外開きの高台である。立ち上りは直線的で器面にはロクロ調整痕が細い線となってみられる。78は内面に丹塗りがみられる。77と79は器面に起状があり、胎土が非常に悪く小礫が混る。まさ79は回転施切底であり、口縁部は若干内向する。82・83は回転施切底で器面調整は良く、口縁部は若干外反する。81は坏である。胎土は悪く小礫が混る。また底部は回転施切底である。67~84の土師器の色調は明茶褐色であるが、77・79・81は暗茶褐

色を呈す。85・86は墨書き土器であるが文字の解説はむつかしい。85～101は内黒土師器である。たち上りは外反するものと外湾するものの二種類がある。底部は高台の高いもの(96や99)、低いもの(98・100)等がある。そして全体的に外反する。内黒土師の黒色部分は内面は全てであり、外面は口縁部から胴部にかけて波状にみられる。胎土・焼成は良い。94は墨書き土器で床の字が解説できる。

102は瓦器質の土器である。灰褐色の色調で回転糸切り底を呈している。

103～117は須恵器である。103は變形土器の口縁部で灰褐色を呈している。104は口縁部で灰褐色を呈し、胎土・焼成は良い。105・107は底部で平底を呈す。内側は範調整痕がみられ、107には外面にタキ目を窓で消した調整痕もある。色調は暗灰褐色を呈す。106・108～117は外面と内面の種類を上げてみた。とくに内面の特徴は106・108・109はまさ目文で110・111・112・113は同心円文、114～117は手なで痕の三種類に分けられた。色調は106・108・109・113・117は茶褐色で他は灰褐色である。

118以降は第Vトレチのみの遺物である。118～163は住居址外の包含層より出土した遺物である。

118～120は縄文時代の遺物で晚期にある。118は浅鉢で黒色研磨土器である。口縁部は「く」字状に屈折し、内側と口唇部は丸く出張る。器面の研磨は若干良い。119・120は變形土器の口縁部である。2つとも研磨土器で119が茶褐色、120が灰茶褐色の色調を呈する。

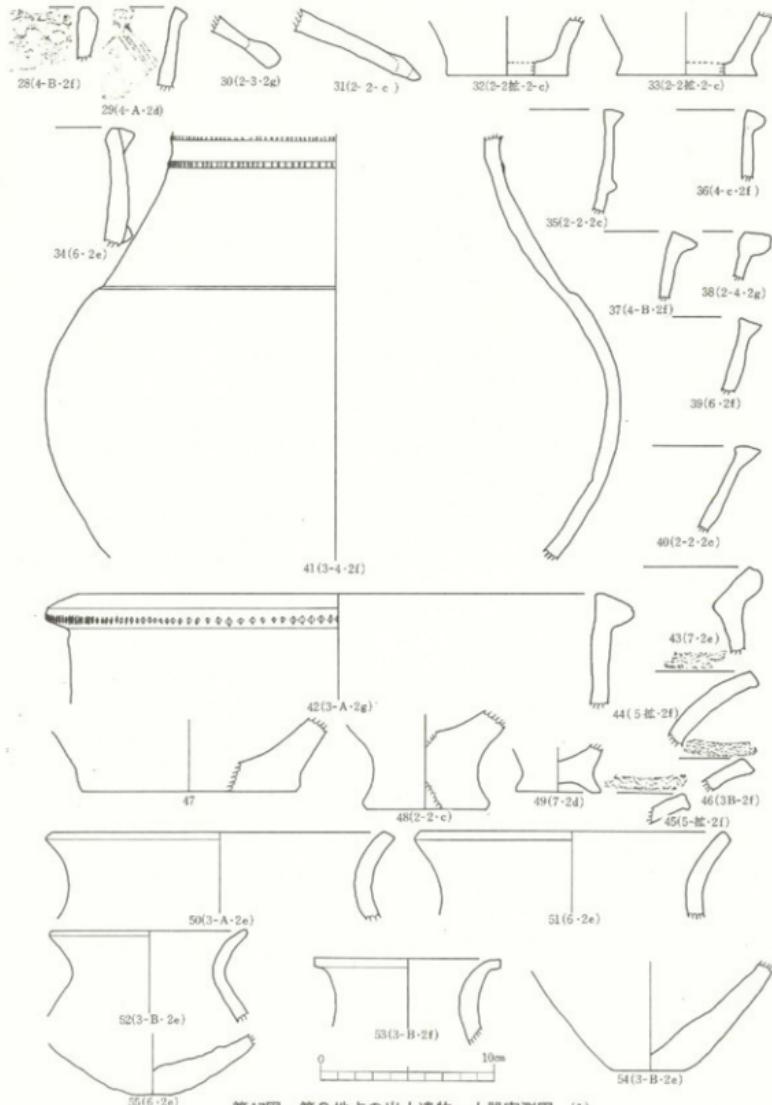
121～163は弥生式土器である。弥生式土器には變形土器・鉢形土器・壺形土器・小形の壺・鉢が出土した。121～139は變形土器である。121・122は中期の土器である。121は外反する口縁部で2～3条の断面三角突帯をもつ。茶褐色の色調を呈し、胎土・焼成は良い。122は大形壺の突帯である。茶褐色を呈し、焼成も良い。

123～139は後期の土器である。123は頸部に断面三角突帯が一条あり、明茶褐色の色調である。124～136は頸部が「く」字状に屈折する口縁部で屈折部がはっきり線になるものから湾曲するものまでみられる。また内側も同様である。124は内面に範調整痕がみられ外面はなで調整である。126以外は黒茶褐色で126は赤茶褐色の色調である。胎土・焼成は良い。

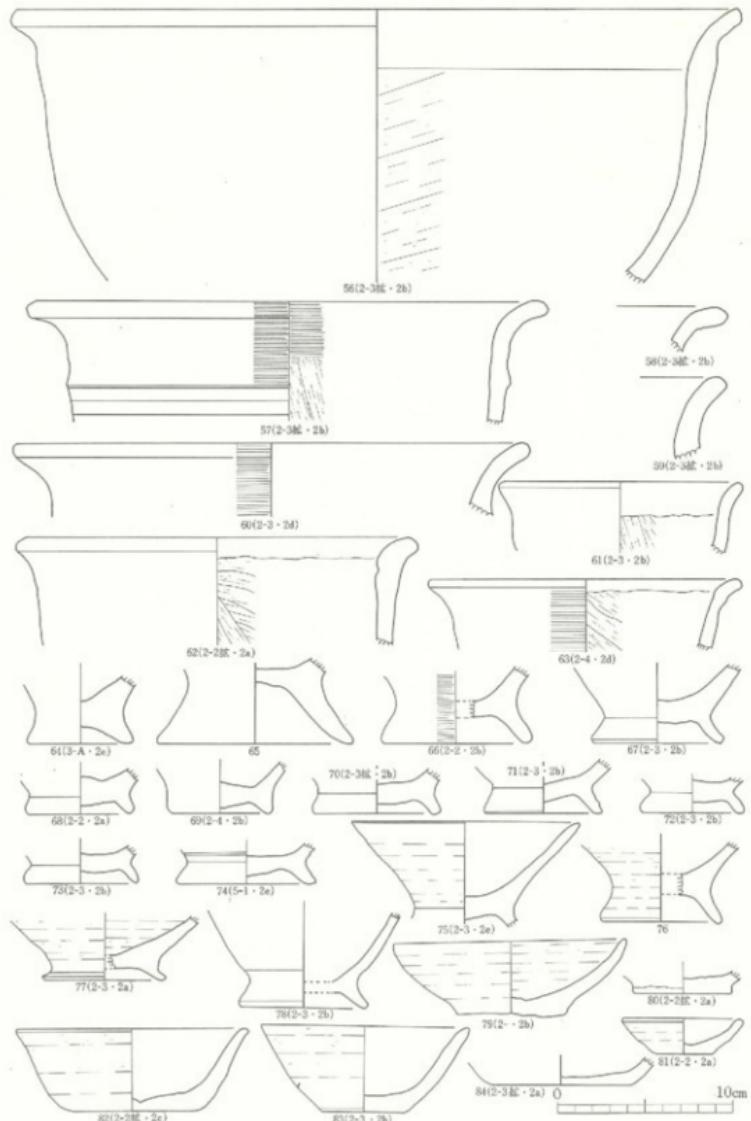
137～139は底部である。137は外反する脚台で明赤茶色の色調である。138は厚手の脚台で黄茶褐色の色調の土器である。なで調整痕が器面にはみられる。139の脚部は筒状から急に開き末端部は丸味をおびる。茶褐色の色調で胎土・焼成は良い。器面調整はなで調整をしていないに行なっている。内側は黒褐色で窓痕がみられる。

140～143は鉢形土器である。140は小形のもので内湾し、器面は範調整で、色調は赤褐色を呈す。141は外反するもので色調は灰茶褐色を呈し、器面は範調整である。142は小型の鉢で明茶褐色を呈す。143は脚台付きの鉢で脚台部の開きは大きい。色調は茶褐色を呈す。焼成・胎土とも良い。

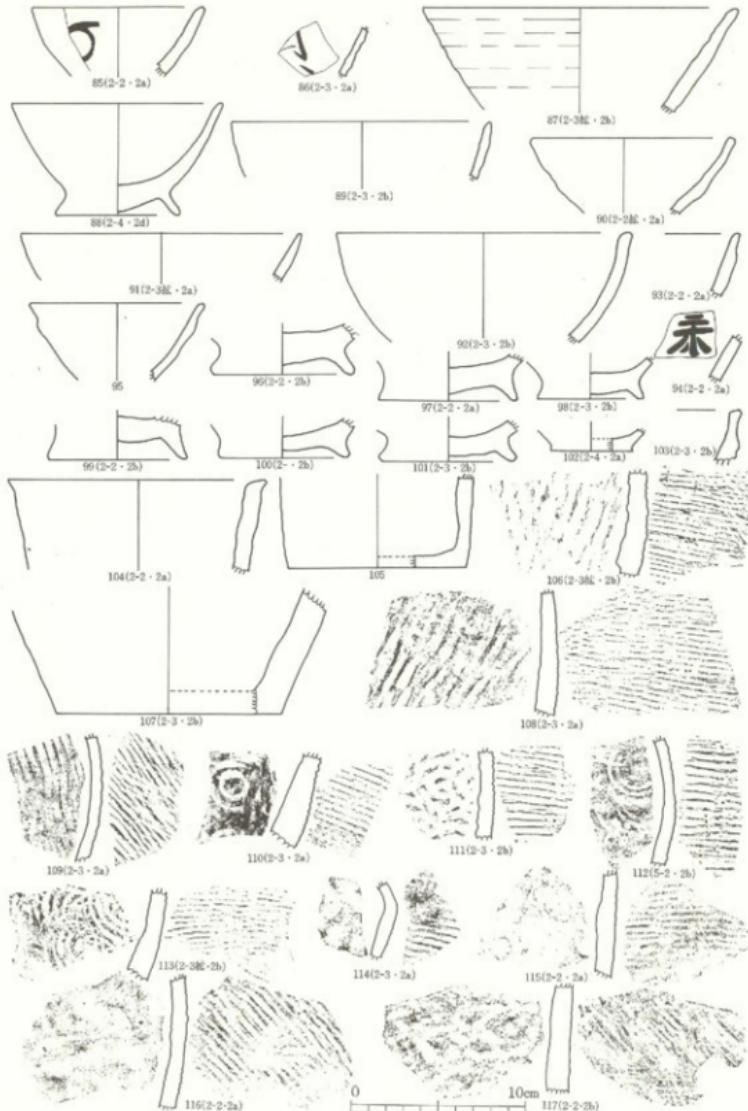
144～163は壺形土器ないし、小型の壺である。中期末が一部あるが全体として後期の壺である。144は口唇部が垂れて幅の広い口縁部になっている。胎土は良くななく、小礫が混る。器面



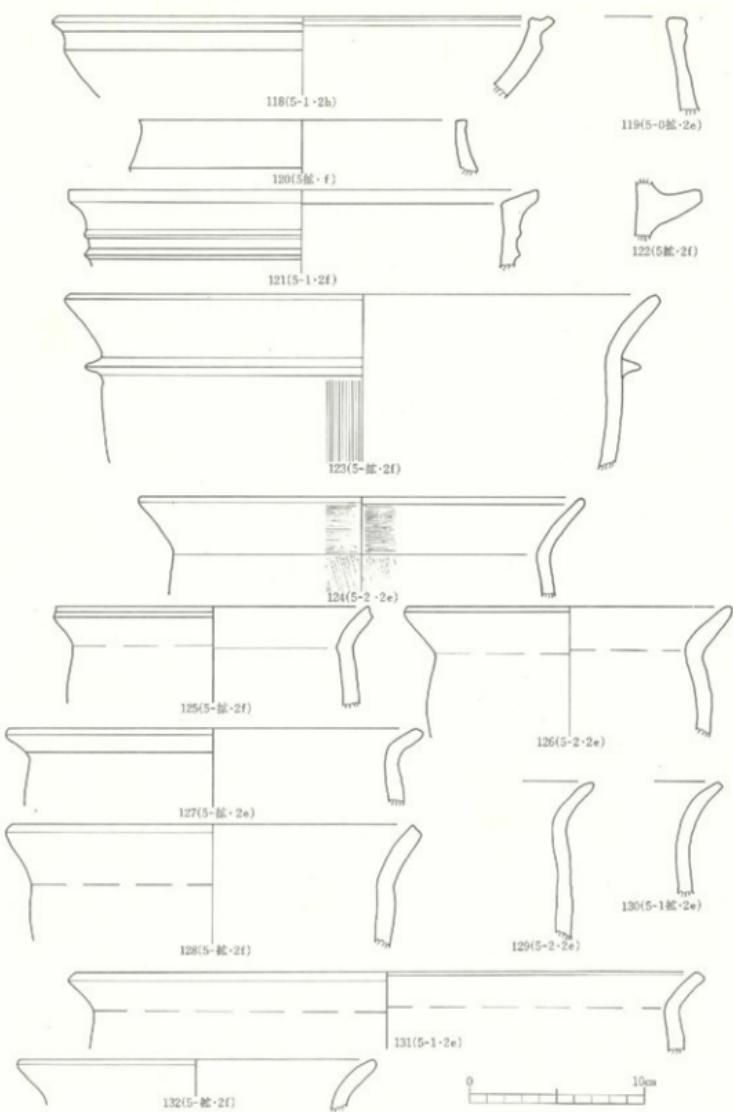
第17図 第3地点の出土遺物・土器実測図 (1)



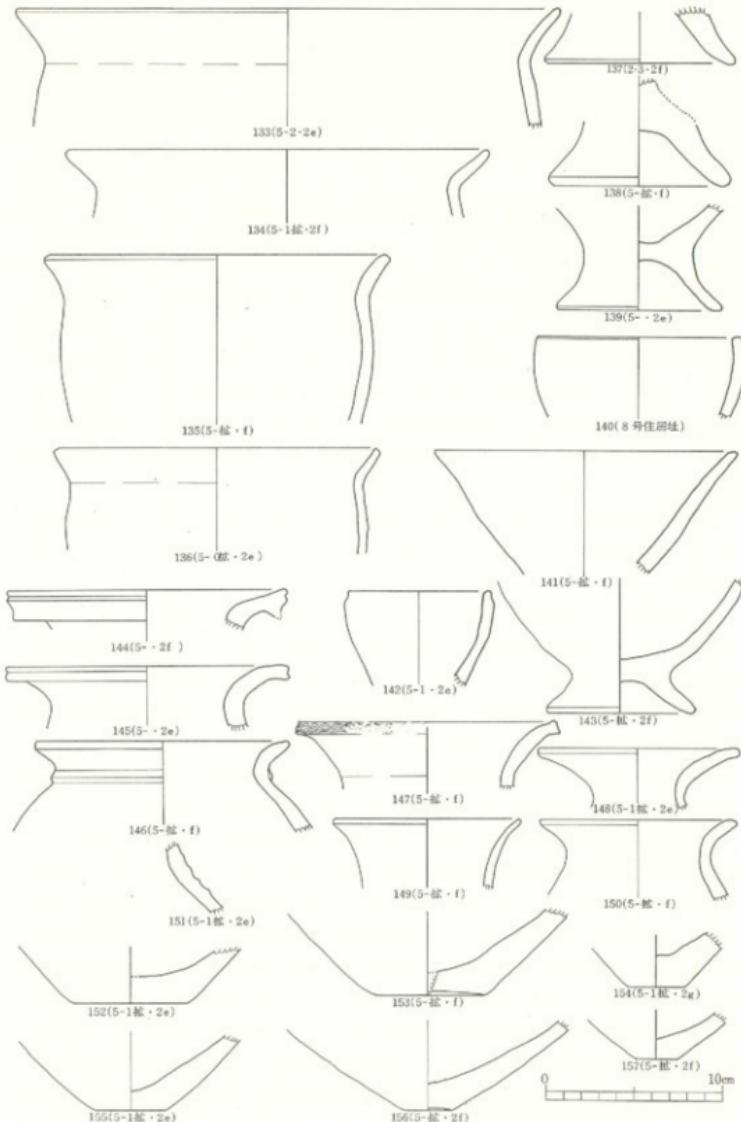
第18図 第3地点の出土遺物・土器実測図 (2)



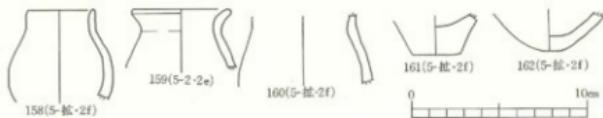
第19図 第3地点の出土遺物・土器実測図 (3)



第20図 第3地点第5トレンチ出土遺物・土器実測図 (1)



第21図 第3地点第5トレンチの出土遺物・土器実測図 (2)



第22図 第3地点第5トレンチの出土遺物土器実測図 (3)

の調整は良い。147は口縁部が外湾し、口唇部には沈線がはいる。器面の調査は良い。149は頸部に三角断面突帯があり湾曲する。器面調整は良い。胎土・焼成とともに良い。147は口唇部に櫛書き波状文がみられ、口縁端部が延びる口縁部である。胎土・焼成とともに良い。148は大きく外反する口縁部である。黄茶褐色を呈し、胎土・焼成はともに良い。149は薄手の口縁部である。外反し、口縁端部で外曲する。器面は外面では継位の窓調整痕があり、内面では横位の調整である。茶褐色を呈す。胎土・焼成共に良い。150は胎土・焼成が悪く、器面は剥げ落ち胎土には雲母が混入されている。暗黄茶褐色の色調である。151は頸部で3条の断面三角突帯がみられる。この土器は中期の土器と思われる。調整は良い。

152～156は底部であり、平底ないし若干上げ底である。152・153は広い平底で他は狭い平底である。色調は茶褐色を呈する。胎土・焼成すべて良い。156は若干上げ底で狭く長頸壺の底部に類似している。153も上げ底である。

158～162は小型の壺である。158は口縁部が直立し胴部は張る。黄茶褐色で部分的に黒褐色の所がみられる。159は口縁部が外反し胴部が張る。茶褐色の色調である。160は頸部から胴部にかけてである。頸部は湾曲する。161は一応壺に入れたが、器形が不明である。平底であり茶褐色を呈し、胎土・焼成は良い。内面は窓を回転させた跡がある。162は平底気味である。色調は灰茶褐色で窓調整である。158・159・160・161は調整が良い。

163～221までは住居址内の出土遺物である。163～201は2号住居址、202は4号住居址、203～207は6号住居址、208～211は8号住居址、212～220は9号住居址の遺物である。

163～184は變形土器と鉢形土器である。163・146は口縁部が外反し、断面三角突帯が2～3条みられる土器で弥生中期に比定される。163は内側に大きく張り出し稜線がつく。102は若干稜線がつく程度である。ともに焼成・胎土は良い。166～167は頸部の内側に稜線があるもので「く」字状に外反する變形土器である。166は薄手の土器で稜がはっきりし、板目状の調整痕が器面にみられる。胎土・焼成は良い。167は「く」字状口頸部の變形土器である。頸部は湾曲し、胴部が張る。色調は黒茶褐色を呈し、胎土・焼成も良い。器面は窓ナデの調整である。168も167と同様で頸部の外面は湾曲し、内面は稜線がつく。169は167と同じで「く」字状に折れる。170～173は變形土器の底部である。170は脚台の底部であるが小型で粗雑で脚部は浅い。171は底部の作製方法がかるもので中心に筒状なものを受け、その周囲に粘土を巻きながら脚部をつくる方法である。脚部は浅く端部は角型に切っている。胎土・焼成は良い。172は脚

部の深い底部で端部は若干丸味をもつ。器面は箒研磨の調整がみられる。茶褐色を呈し、胎土・焼成共に良い。173は脚台が高く深い脚である。器面はナデ調整で端部は丸味をもつ。胎土・焼成共に良く、黄茶褐色を呈する。174～178は頸部内側に若干稜線があるもの、無いもので「く」字状口縁の変形土器である。174は完形品である。口縁部は外反し、頸部は内側に稜線が若干みられ、外側は湾曲している。肩部から胴部の張りが弱く、底部近くでは直線的に下る。底部は低い脚台で脚部は浅く、広がりが大きい。脚部末端は丸味をもつ。器面調整は口縁部にナデ調整が横位にみられる。色調は暗茶褐色で胎土・焼成ともに良い。175は174と同様な口頸部で黒茶褐色を呈す。176は小型で口頸部は174と同じであるが、器面調整は外面に斜位の箒ナデ調整が見られる。177は174と同じであるが、内側の稜線が消えかけている。若干薄手である。黒褐色の色調を呈し、胎土・焼成共に良い。器面は箒ナデ調整がみられる。178は頸部から口唇部までの間が短く、胴張りがない變型である。胎土・焼成共に良く色調は灰黒褐色を呈す。頸部は外側の折れ線がみられ、内側は若干みられる。179は頸部の折れ線がない變形土器である。色調は明茶褐色で胎土は小疊が混入し、焼成は良い。

180～184は變形土器・鉢形土器の底部である。180は若干上げ底で大型である。181～184は小型である。胎土・焼成はそれぞれ良い。色調は茶褐色を呈す。

185は高さ16cm、最大幅25cmの高環形土器である。环部の口縁部は外湾し中心部は凹んでいる。肩部より脚部へは直線的につくられ、环部と脚部の接着部は5cmと幅が広い。脚部は环部より短かく7cmである。脚部の広がりは下位で大きく外湾し、端部は角張る。また脚部の外湾する上部には2個の円孔透しが3組みられる。(計6個)。色調は暗茶褐色で器面調整は良い。胎土・焼成も良い。

186～201は壺形土器である。186は小型の壺である。頸部は外湾し胴部は大きく張る土器で薄手である。明茶褐色の色調を呈する。187も小型の壺である。薄手で頸部は外湾し、胴部は大きく張る。186と比較すると口縁部は小さい。色調は茶褐色を呈し、器面は外面がていねいな箒磨きで内面は雑である。186・187ともに胎土・焼成は良い。188は長頸壺である。長頸部は8cm、壺部は高さ12cm・直径18cmの土器である。長頸部は外反し、口縁部は横位に頸部は縦位に調整痕がみられる。壺部の肩部には7条の断面三角突帯が廻る。胴部の最大幅部には平面部をつくった状況が若干みられる。底部は小さく上げ底である。胴部から底部まで箒調整痕がみられる。色調は茶褐色で、胎土・焼成は良い。189は壺の肩部である。胎土・焼成が悪く、器面がザラザラしている。明茶褐色の色調である。190は小型の壺である。赤茶褐色を呈し、胎土・焼成は良い。191は壺の肩部で断面三角突帯が数条みられる。茶褐色を呈し、厚手の土器である。胎土・焼成は良い。192は明茶褐色を呈した壺の突帯部である。断面三角突帯に箒で斜に刻み目を入れている。先は2cmで厚味は約1.5mmであり、先は尖り、板目痕がみえる。193も刻目突帯である。茶褐色を呈し胎土・焼成ともに良い。194は連点のある土器である。195は土括部の下面に出土したものである。暗茶褐色を呈し、器面は箒研磨調整がみられる。一条の刻目突帯は胴部の上部に廻り、刻目は広く若干斜状になる。胎土・焼成は良く、内面調

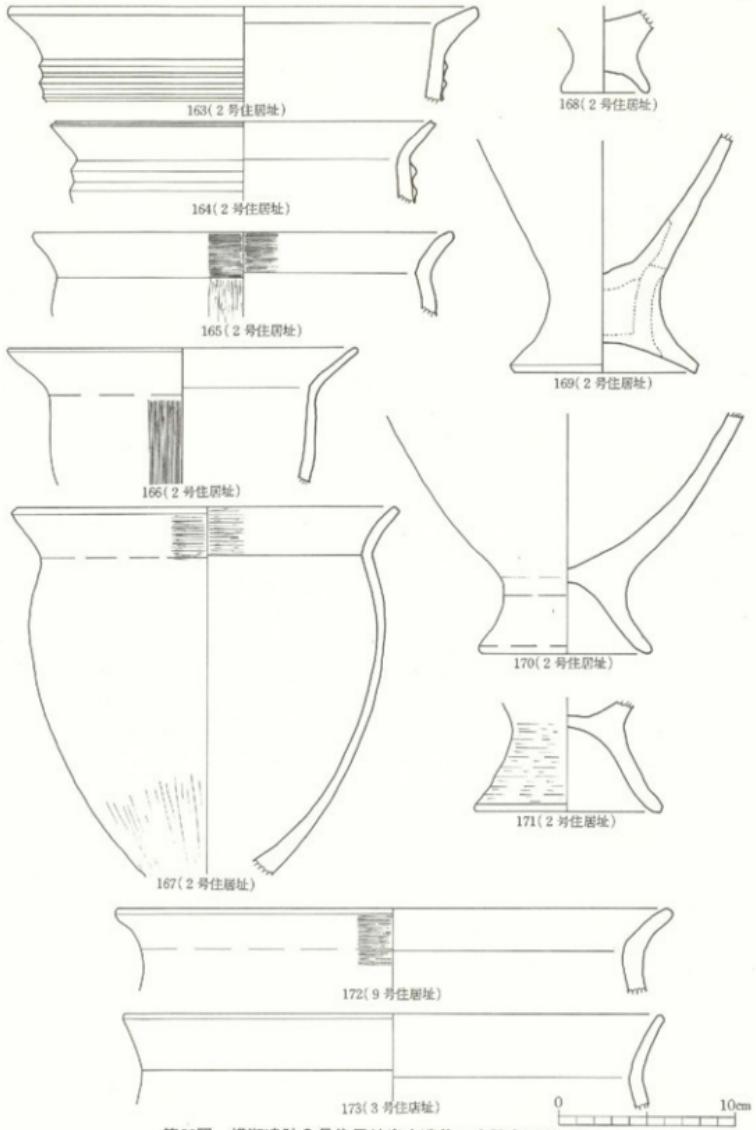
整も良い。196～201は壺形土器の底部であり、全体的に平底である。196は平底で小型である。灰茶褐色で胎土・焼成は良い。197は大型の底部で茶褐色を呈し平底である。器面は箆調整痕がみられる。198は黒褐色の土器で平底である。大形の壺の底部と思われる。199は胴部から平底の底部までの土器である。胴部は張り、底部は小さく、底部内面は持ち上るほど厚味がある。器面は箆研磨調整で、茶褐色の色調をもつ土器である。200は平底で茶褐色を呈している土器である。201は平底で若干丸味がみられる。黒褐色の色調で胎土・焼成共に良い。

202は4号住居址より出土した壺形土器である。口頸部は「く」字形になり口縁部は外反する。頸部は内外面とも折れ線があり、胴部は若干張る。底部は脚台で脚台部の先端は丸味をもっている。器面は内外面とも荒い箆調整痕がみられる。胎土・焼成は良い。色調は上部が黒色を呈し下部は茶褐色を呈する。

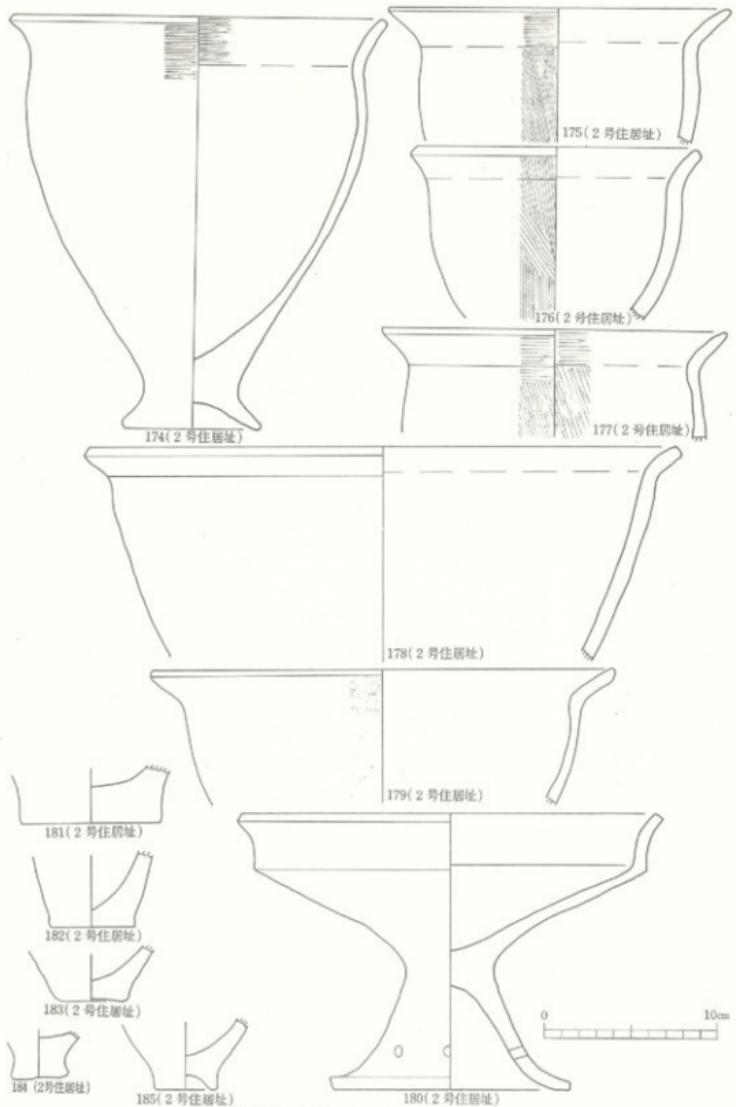
203～207は6号住居址の遺物である。203は小型の壺形土器である。「く」字状に口頸部は折れ、口縁部は外反する。明茶褐色を呈し、胎土・焼成とともに良い。205～207は壺形土器である。204は口縁部に垂れ下り突帯を貼り付けている土器である。口唇部は沈線がみられ、口頸部は外湾する。色調は茶褐色を呈す。205は口頸部が外湾し、肩部は張りがない器形の壺形土器である。暗茶褐色を呈し、器面調整は良く、胎土・焼成も良い。206も205と同様な土器で明茶褐色を呈する。207は小型の壺形土器である。器面調整は荒い。明茶褐色であり、胎土・焼成は若干良くない。口頸部は外反し、底部は底尖気味の丸底である。

208～211は8号住居址の遺物である。208は口頸部が外湾し、胴部は若干張る壺形土器である。口頸部の外面は横ナデ調整がみられる。暗茶褐色の土器で胎土・焼成は共に良い。211は底部である。平底で色調は茶褐色を呈する壺形土器である。210は壺形土器の口縁部である。口頸部は外湾し、口唇部は丸味をもつ。茶褐色を呈し、胎土・焼成共に良い。209は高环形土器である。口縁部は水平に、頸部は「く」字状に外反し、胴部は若干内湾する环部である。頸部下に三角断面突帯を施こし外器面には箆調整痕がみられる。色調は暗茶褐色を呈する。胎土・焼成は良い。

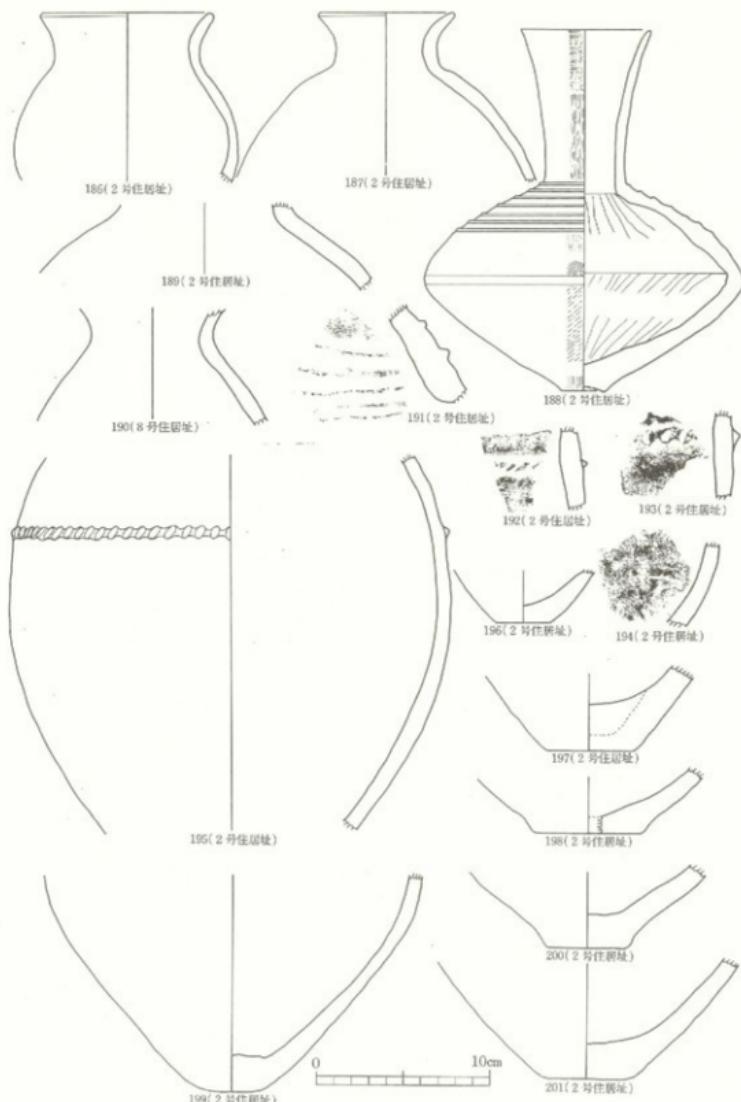
212～221は9号住居址の遺物である。212～217は壺形土器で218～221は壺形土器である。212は「く」字状に折れる口頸部である。内側に舌状の張り出しがみられるもので、中期の様相がある。胎土・焼成は良い。213～215は「く」字状に折れる口頸部で暗茶褐色を呈し、胎土・焼成も良い。216・217は底部で脚台部である。216は荒い調整であるが217は箆研磨の調整である。217は胎土・焼成と良いが216は悪い。218は口縁部が外湾し、頸部は「く」字状に屈折する土器で頸部は内外面とも折れ線が出る。器面調整は良く、胎土・焼成も良い。色調は暗茶褐色を呈す。219も218と同様な器形であり、調整も良い。6号住居址の205・206と比べると若干肩が張る器形と思われる。220は赤茶褐色を呈し、口頸部は「く」字状になり若干折れ線がみられる。胎土・焼成共に良い。221は外湾する口縁部である。明茶褐色を呈し、器面調整は箆研磨で良い。胎土・焼成は良い。



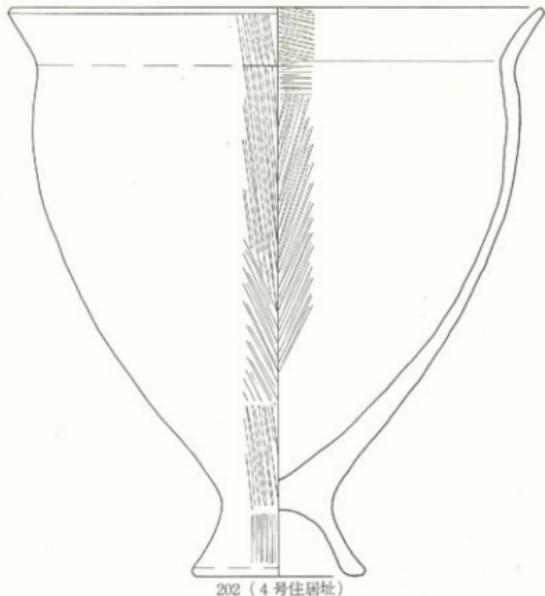
第23図 横瀬遺跡2号住居跡出土遺物・土器実測図(1)



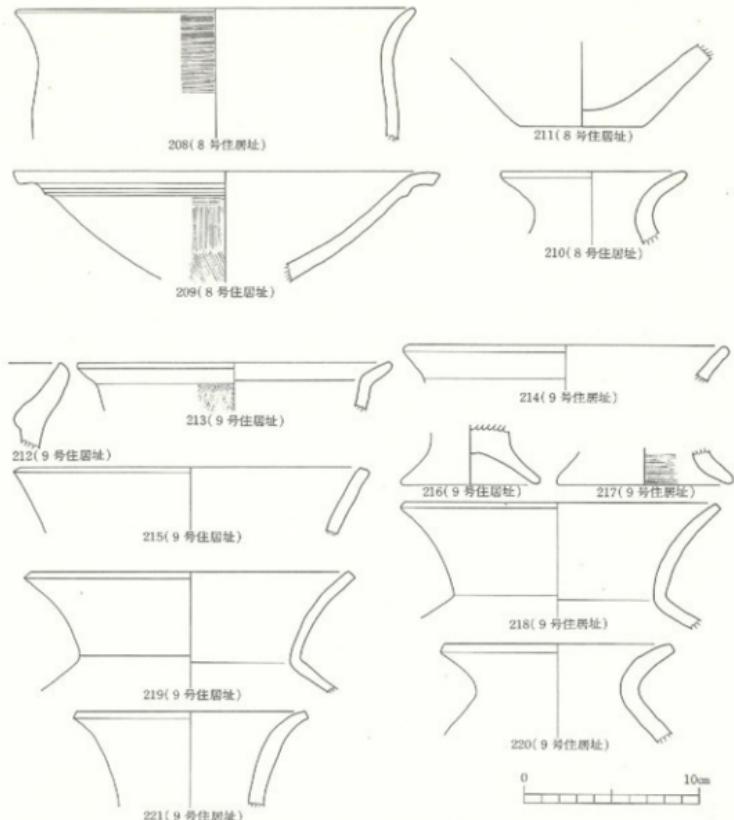
第24図 横瀬遺跡2号住居跡の出土遺物・土器実測図 (2)



第25図 横瀬遺跡2号住居址の出土遺物・土器実測図 (3)



第26図 横瀬遺跡の4、6号住居址の出土遺物・土器実測図



第27図 横瀬遺跡の8、9号住居址の出土遺跡 遺物・土器実測図

(2) 土製品 (第28図, 図版33)

222が第3地点第Vトレンチから出土した土製品である。長さ 3.3cm, 径1.35cmの円柱形のものに、径2mmの穴が中心よりややずれたところに貫通している。色調は茶褐色を呈する。胎土に砂粒を含み、焼成は良い。

(3) 石器 (第28~32図, 図版28~30)

第3地点より出土した石器は第II f層から垂飾品、石鏃・砥石・敲石・凹石・台石等が出土している。

223は、垂飾品と考えられる破片である。粘板岩製の扁平なものである。片面は平坦に研磨されているが、他面は一部研磨されているのみで剝離面ないしは自然面を残す。径7mmの円孔を両側から穿孔している。

224は、砂岩製の打製石鏃である。無茎石鏃の凹基のもので、側辺はやや内湾している。

225~227は、粘板岩製の磨製石鏃である。225は先端部片で、やや細身で断面は菱形に近いものである。226は、やや大形のもので、無茎鏃で基部にえぐりを有する。鎮は基部まである。227は、無茎鏃で基部にえぐりをもち、表裏に縱位の溝を有している。細い鎬が基部まである。

228は、砂岩製の扁平なもので、一端に刃部を有している。完形のものか、破片であるかは不明である。

229~232は、砂岩製のもので研磨痕を有し、砥石としての利用が考えられる。中央部はやや凹んだ状況を呈し、4点とも破片である。

233~235は、砂岩製の敲石である。233は側面全体を、235はやや大形で、頂部を使用している。233は火を受けたのが赤褐色を呈している。

234~236~237は、安山岩製の凹石である。234~236は敲石としても利用している。237は大形のもので、掃えて利用されたことも考えられ、台石としての性格をもつ。

238は、安山岩製の台石である。第2号住居址内中央の落ち込みにおかれていたものであり、たて38.4cm、よこ28.5cm、厚さ20cmを測るものである。

第4表 第3地点出土の石器計測表

() 内は残存部計測値

No.	トレンチ	層位	石器名	石 材	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備 考
223	5一括	II f	垂飾品	粘板岩	4.1	3.0	0.5	8.45	
224	々	々	石 鏃	砂 岩	2.1	1.7	0.3	0.95	2号住居址
225	々	々	々	粘板岩	(3.2)	(1.3)	(0.5)	(2.02)	
226	々	々	々	々	5.1	3.3	0.5	12.02	
227	7	II e	々	々	(3.7)	2.4	0.5	(21.04)	
228	5一括	II f	々	砂 岩	10.7	3.7	0.7	39.55	9号住居址
229	々	々	砥 石	々	(7.3)	(4.3)	(2.75)	(110)	6号住居址
230	々	々	々	々	(3.9)	(4.9)	(0.9)	(24.2)	

231	5一鉢	II f	砾石	砂岩	(4.7)	(7.7)	(1.3)	(49.5)	8号住居址
232	タ	タ	タ	タ	(5.9)	(6.0)	(1.65)	(139.9)	
233	タ	タ	敲石	タ	4.6	6.1	0.4	16.05	
234	タ	タ	凹石	安山石	11.3	7.7	6.3	665.2	2号住居址
235	タ	タ	敲石	砂岩	15.75	11.2	8.9	2300.8	2号住居址
236	タ	タ	凹石	安山岩	10.5	7.7	6.5	700.0	
237	タ	タ	タ	タ	24.0	14.0	9.1	4650.0	
238	タ	タ	台石	タ	38.4	28.5	20.0		2号住居址

(4) 軽石加工品 (第33~41図、図版31~33)

軽石を素材として加工した製品が多く出土した。全体を磨ったもので横円状を呈するもの、沈線や孔を有するもの、平坦面をもつもの、凹線を有するも、皿状ないし凹みをもつもの等がある。

239は、径4.3cm、厚さ2.2cmの円盤状のもので、深さ2mmの「V」字状の沈線をめぐらしたものであるが、一面はやや凹んでいるため完全な沈線とはなっていない。

240~269は、横円形に近いもので、全体が磨かれているものである。大形のものは240のように長さ15.2cm、幅10.25cm、厚さ3.4cmのものから、小形のものは242のように長さ4.3cm、幅3.1cm、厚さ1.85cmのものまで大小各種ある。261~266は浅く細い沈線状のものを、262・263は穿孔状のものを施している。

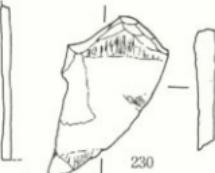
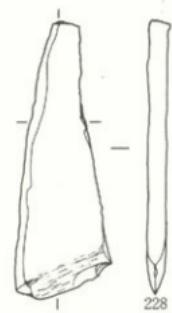
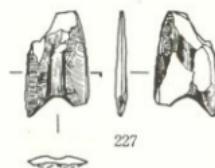
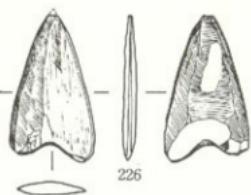
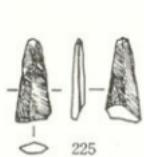
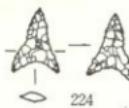
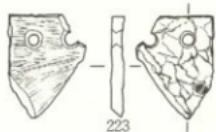
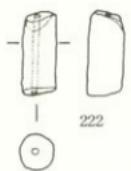
270~276は、全体ないしは一部を磨った痕跡がうかがえるものである。276~276はやや不定形である。短い「U」字状の凹線に近いものが不規則に施してある。

277~279は、中央が凹んでいるものであり、278・279は大形のものである。278は中央に、3.8cm×3.2cmの凹みをもつが、279は全体が凹んでおり、皿状を呈している。277は風化のためか、加工のためか不明であるが、やや複雑な形を呈する。

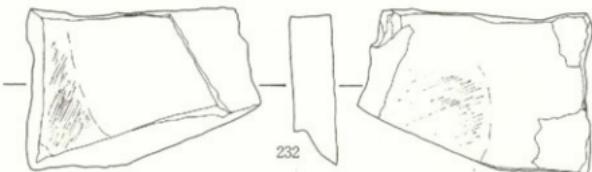
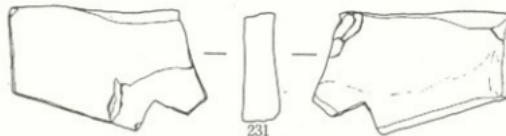
第5表 軽石加工品計測表

No.	トレンチ	層位	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
239	5一鉢	II f	軽石	4.4	4.1	2.5	25.05	2号住居址
240	3	タ	タ	15.2	10.25	3.4	227.5	
241	5一鉢	タ	タ	5.2	4.2	1.6	12.7	
242	タ	タ	タ	4.3	3.1	1.85	12.05	
243	タ	タ	タ	(8.0)	(5.1)	(1.7)	(13.25)	
244	タ	タ	タ	7.0	3.2	1.7	8.75	
245	5	タ	タ	5.7	5.5	2.4	21.25	
246	5一鉢	II e	タ	5.6	4.1	2.2	11.25	
247	タ	II f	タ	7.3	5.4	2.0	25.4	

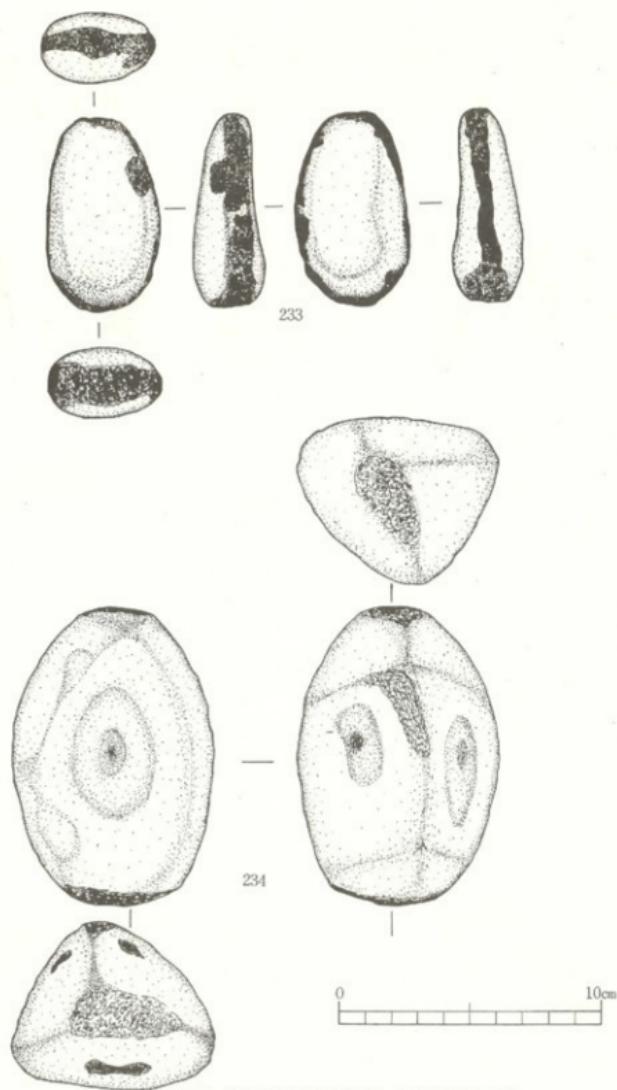
248	5—摭	II f	鞋石	6.3	6.5	2.0	23.55	
249	+	+	+	7.4	5.5	1.9	24.25	
250	+	+	+	6.1	3.85	1.75	13.4	2号住居址
251	+	+	+	6.55	4.5	2.3	16.55	+
252	+	+	+	5.4	3.6	2.7	10.7	+
253	+	+	+	6.8	4.5	2.8	25.4	+
254	+	+	+	5.5	3.3	1.25	6.4	8号住居址
255	+	+	+	7.6	4.6	3.4	40.4	2号住居址
256	+	+	+	8.1	4.5	2.6	27.4	+
257	+	+	+	9.7	4.8	3.7	47.4	+
258	+	+	+	8.4	7.0	3.6	43.9	7号住居址
259	+	+	+	7.1	3.3	1.8	17.75	6号住居址
260	+	+	+	9.5	7.6	2.0	41.45	9号住居址
261	+	+	+	(10.4)	10.6	3.2	(67.55)	+
262	+	+	+	(5.1)	(6.4)	(3.3)	(29.25)	2号住居址
263	+	+	+	11.4	6.2	3.4	51.5	
264	+	+	+	4.6	4.4	1.4	7.55	
265	2	+	+	10.6	4.9	3.8	52.05	
266	5—摭	+	+	6.7	5.0	1.65	14.05	
267	+	II e	+	6.4	5.9	3.5	34.2	
268	+	II f	+	8.7	4.9	2.6	24.7	
269	+	+	+	6.2	6.9	3.5	43.9	2号住居址
270	+	+	+	6.05	4.05	2.9	14.45	6号住居址
271	+	+	+	5.9	3.6	1.85	10.9	2号住居址
272	+	+	+	7.8	5.1	2.65	35.9	6号住居址
273	+	+	+	4.0	5.7	2.5	8.55	
274	+	+	+	6.3	4.6	1.75	13.2	
275	+	+	+	4.6	3.7	1.7	7.25	8号住居址
276	+	+	+	6.3	4.9	4.1	22.7	9号住居址
277	+	+	+	(4.7)	7.1	4.6		
278	+	+	+	15.0	11.5	4.4		
279	+	+	+	(18.4)	15.3	5.5		
280	+	+	+					



0 10cm

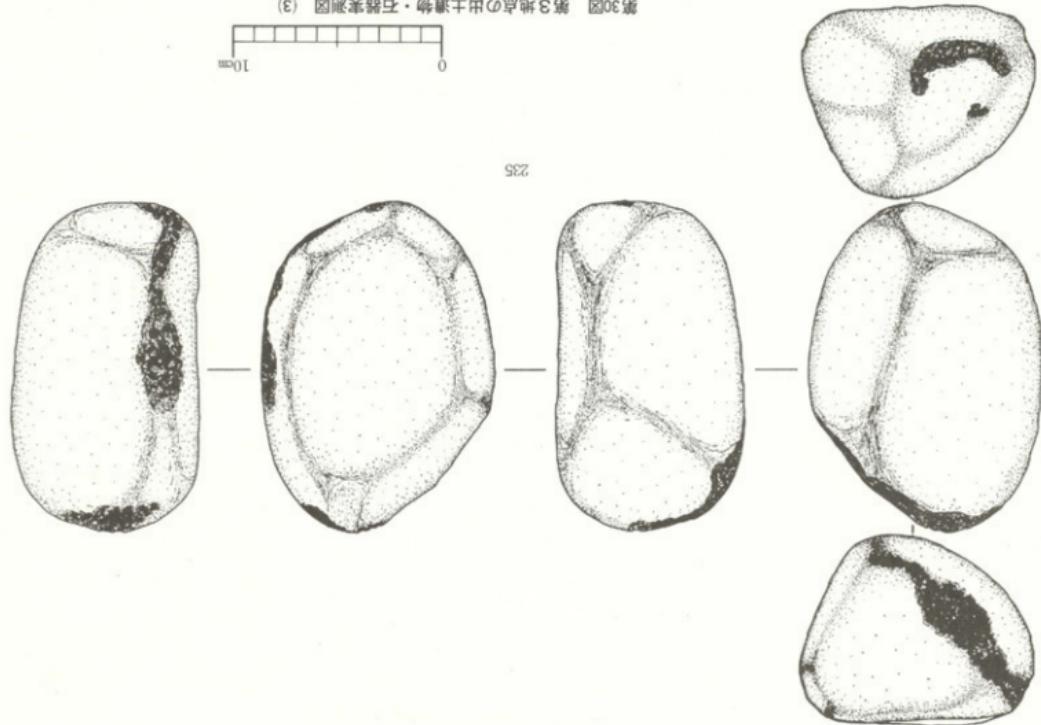


第28図 第3地点の出土遺物・石器実測図(1)及び土製器

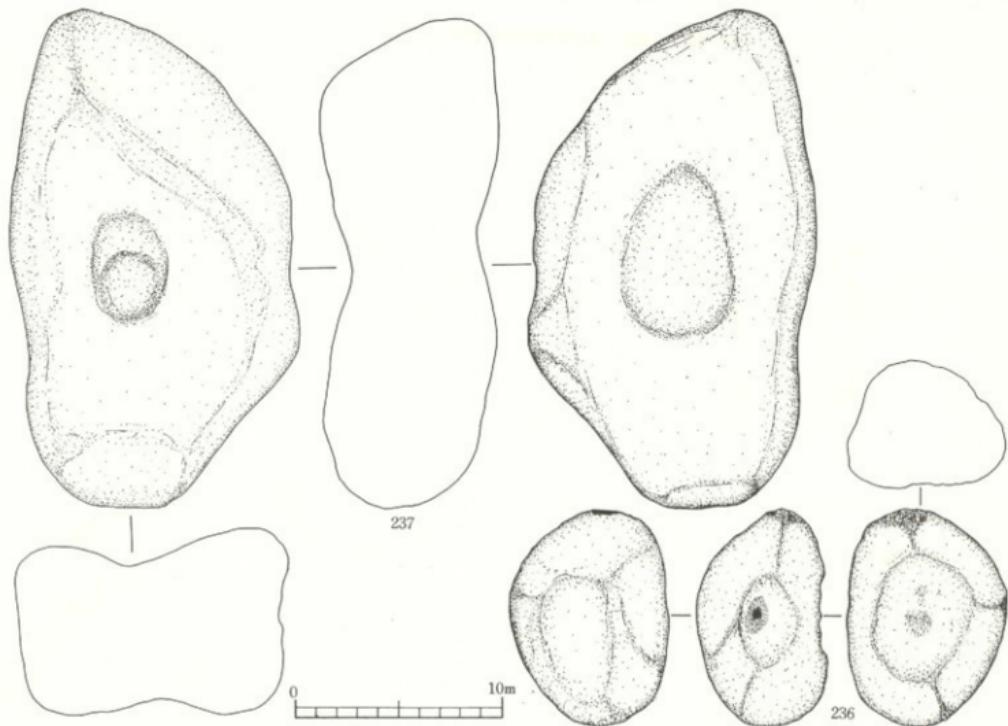


第29図 第3地点の出土遺物・石器実測図 (2)

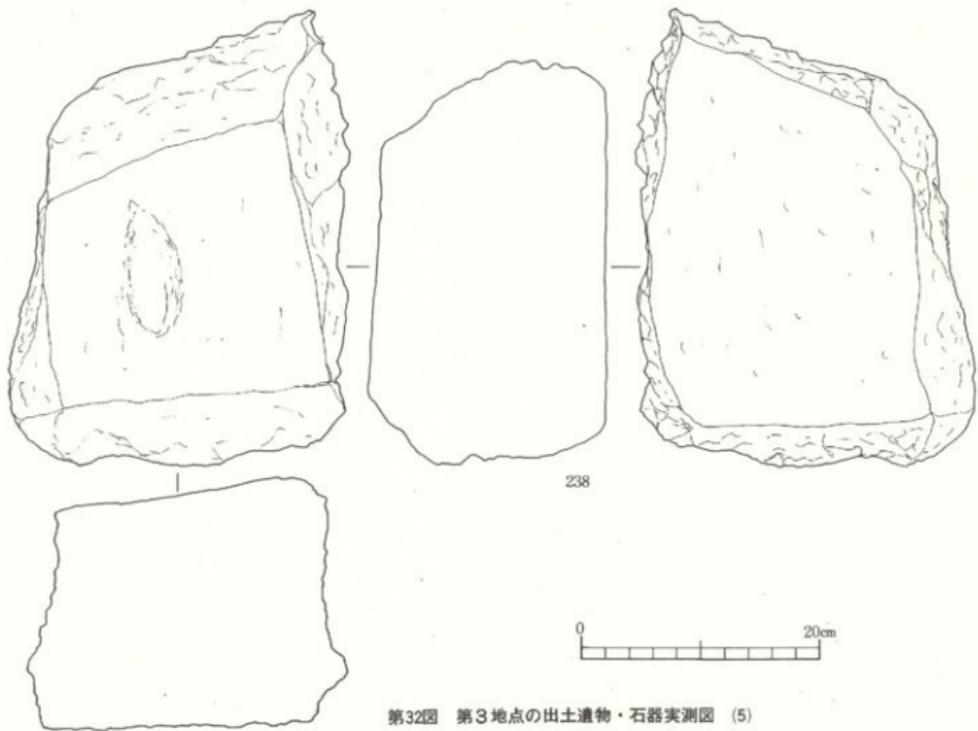
第30図 第3地点の出土遺物・石器実測図 (3)



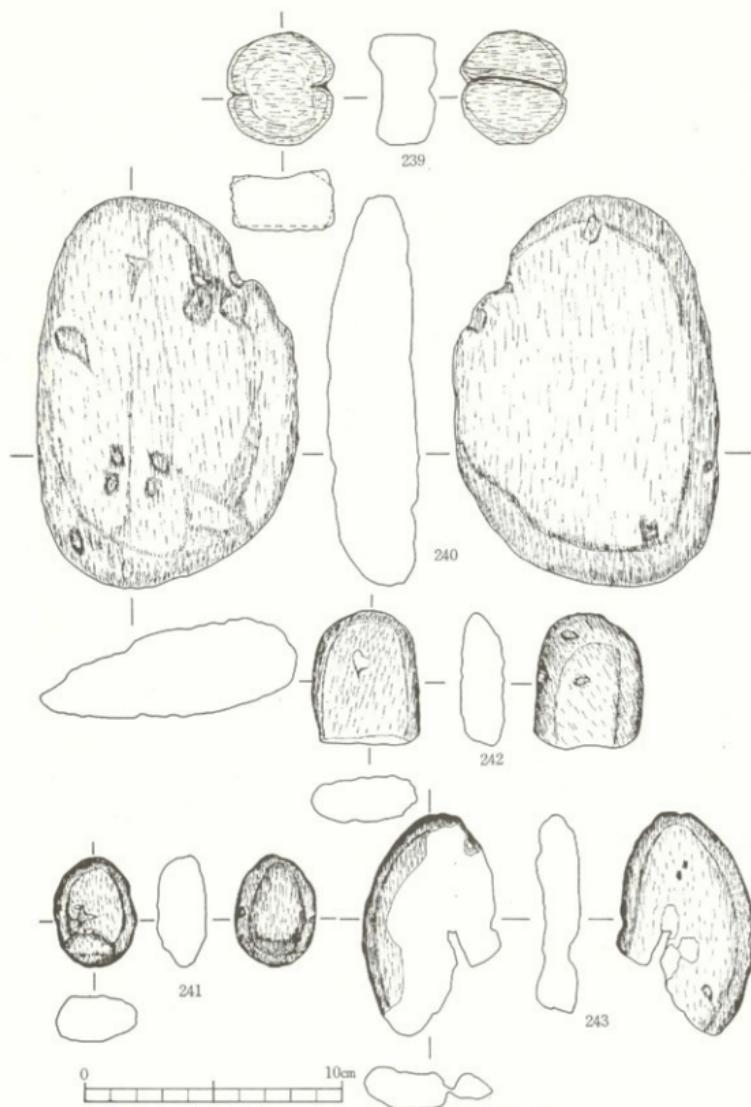
—60—



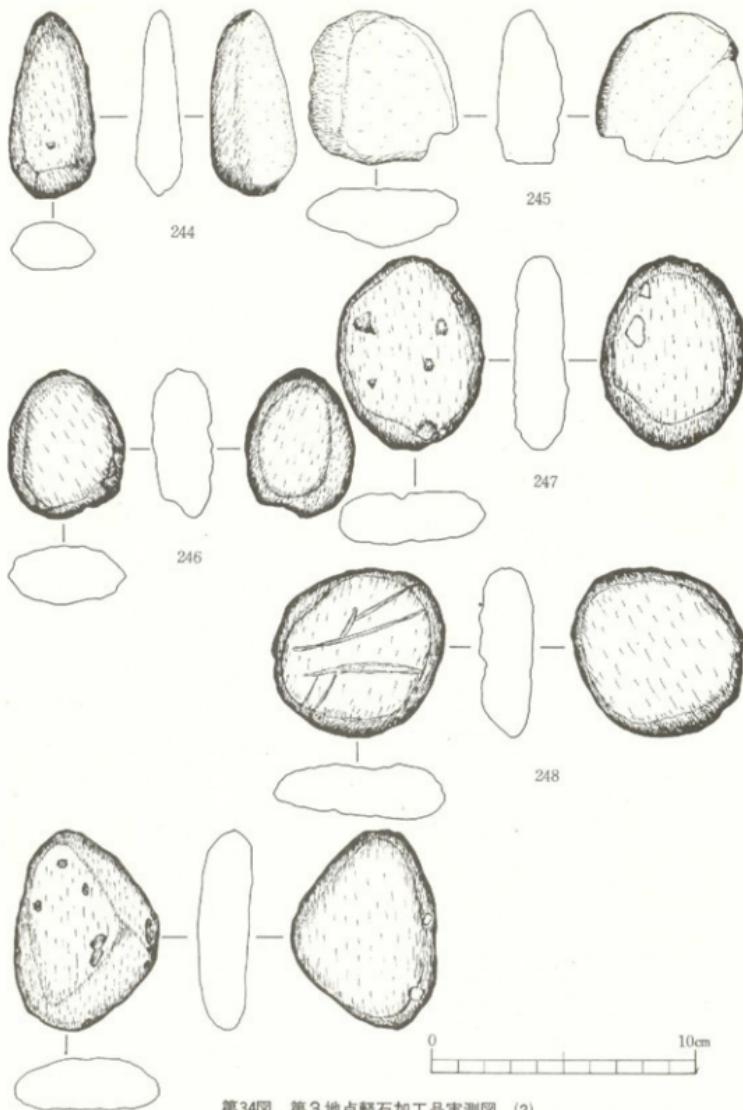
第31図 第3地点の出土遺物石器実測図 (4)



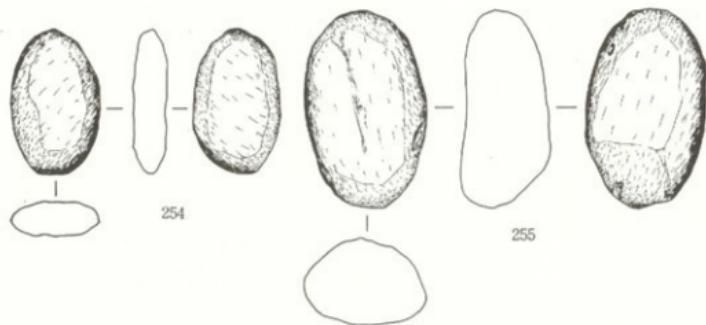
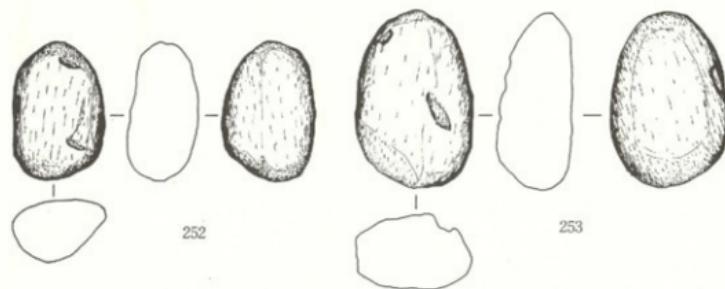
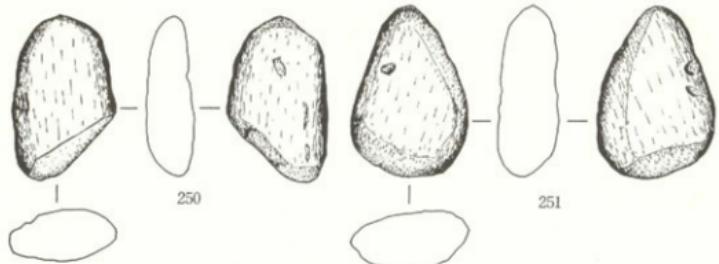
第32図 第3地点の出土遺物・石器実測図 (5)



第33図 第3地点軽石加工品実測図 (1)

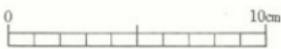
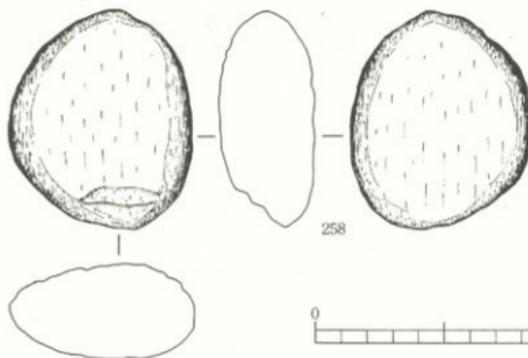
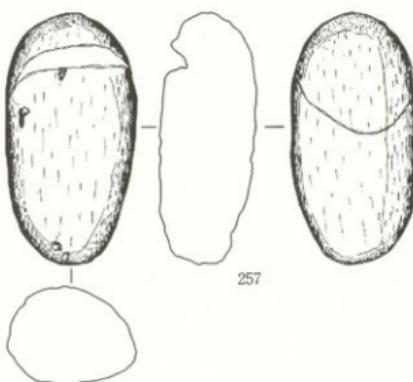
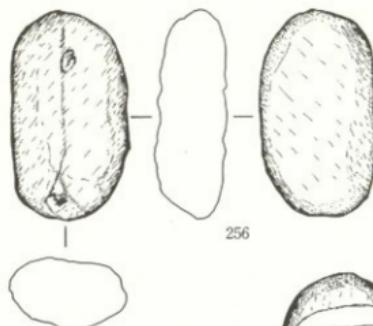


第34図 第3地点軽石加工品実測図 (2)

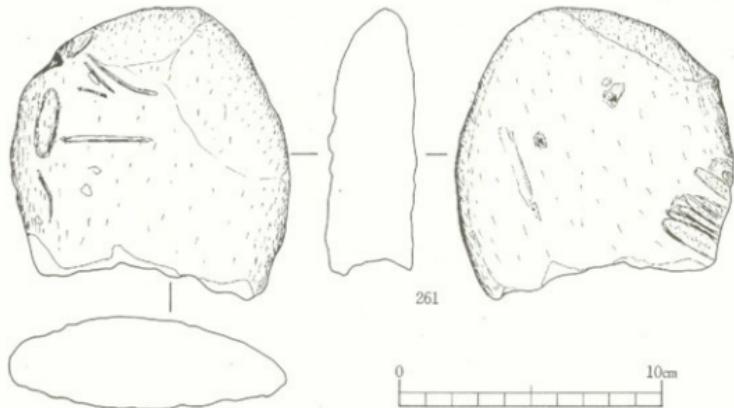
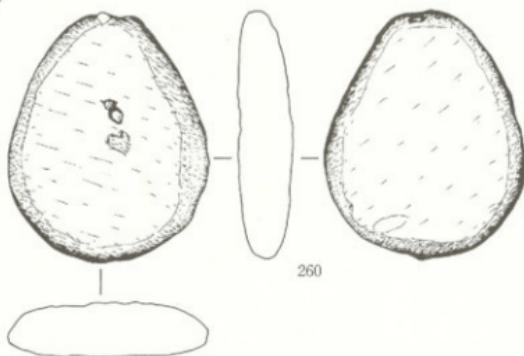
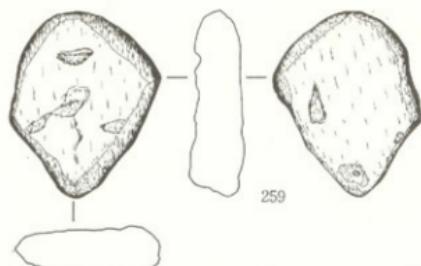


0 10cm

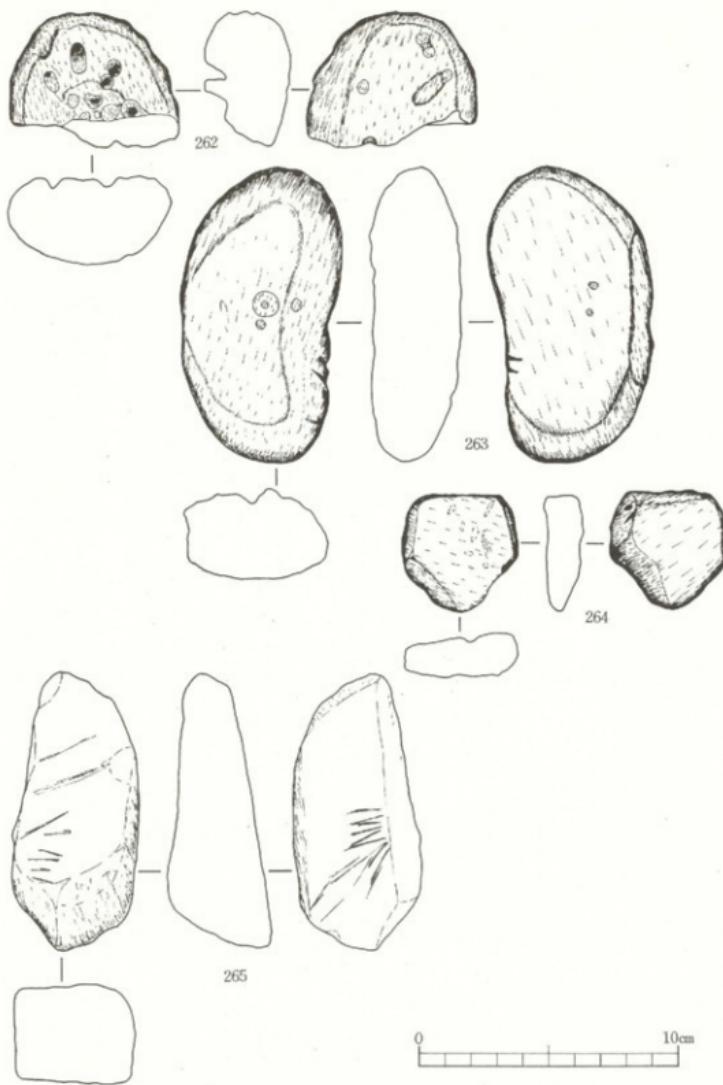
第35図 第3地点軽石加工品実測図 (3)



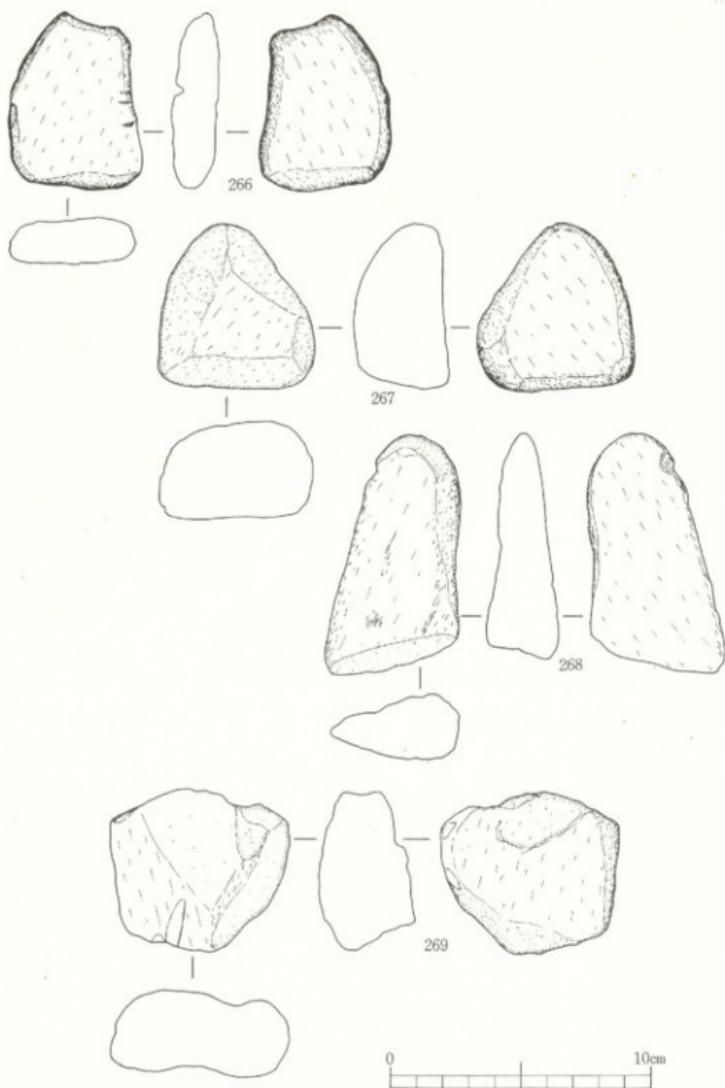
第36図 第3地点軽石加工品実測図 (4)



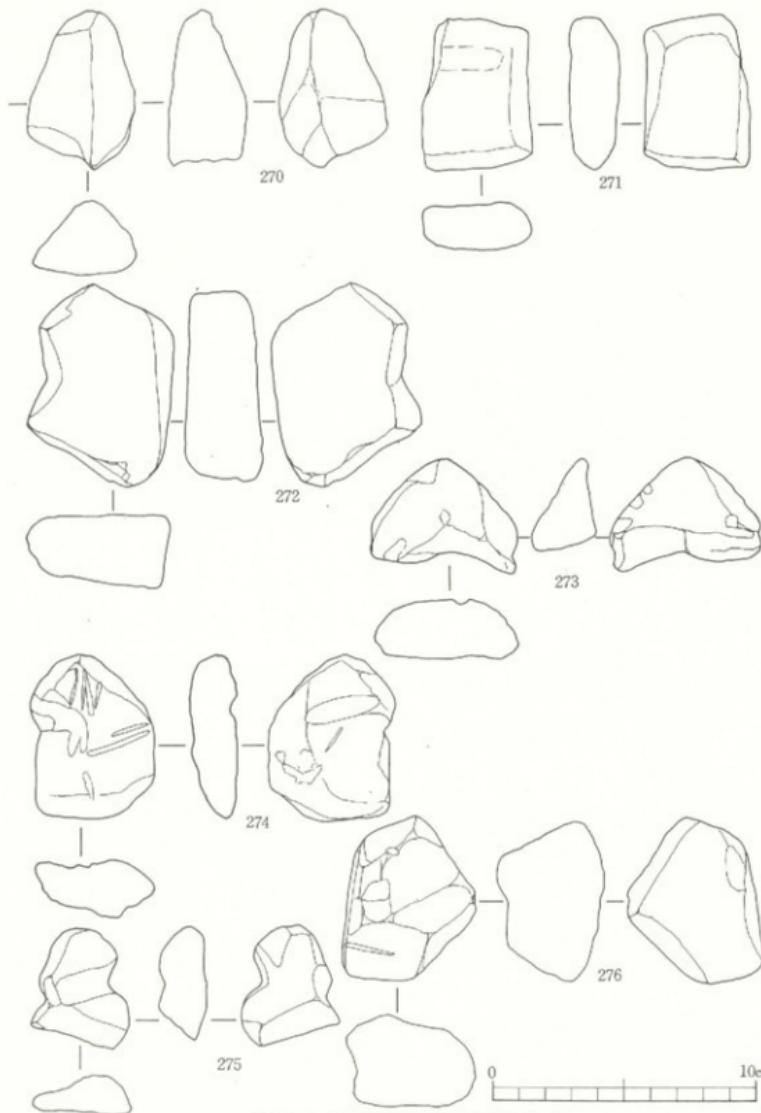
第37図 第3地点軽石加工品実測図 (5)



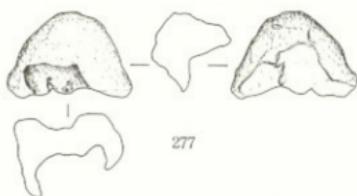
第38図 第3地点石製品実測図 (6)



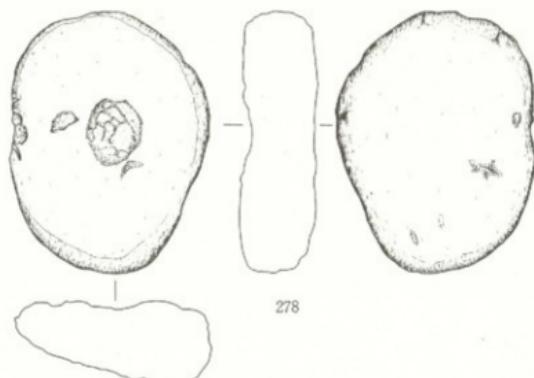
第39図 第3地点軽石加工品実測図 (7)



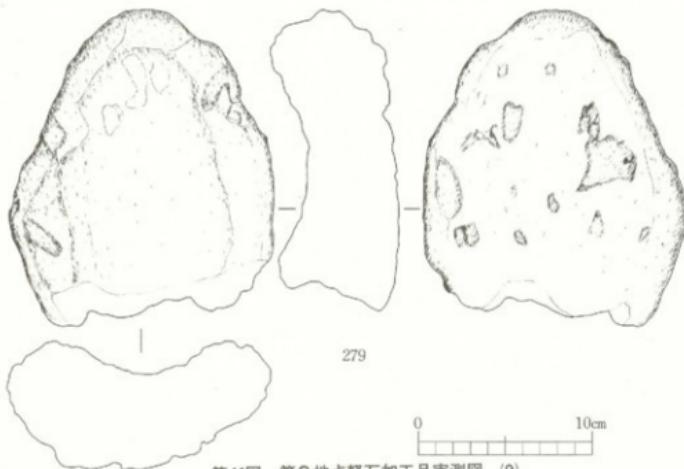
第40図 第3地点軽石加工品実測図 (8)



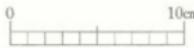
277



278



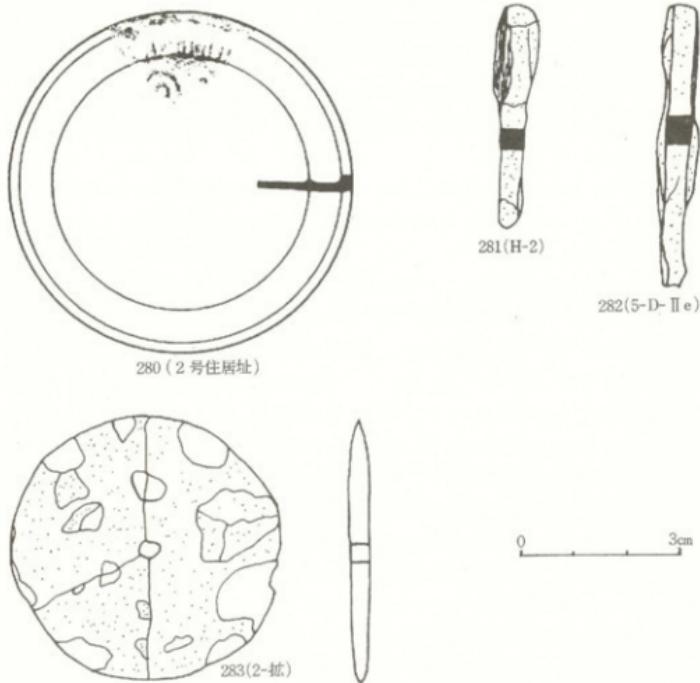
279



第41図 第3地点軽石加工品実測図 (9)

(5) 金属器（第42図、図版34）

金属器は銅製品と鉄器が出土した。銅製品（280）は質の良い白銅質の小型彷製鏡である。丸縁で垂直櫛齒文を外区に施こし、内区には渦文がみられる。直径は6.5cmで厚味は1.5~1.8mmである。これと類似しているものは韓国の漁隱洞遺跡の彷製鏡がある。小田富士男氏の教示では漁隱洞の小型彷製鏡をはじめ他の韓国的小型彷製鏡と照合を行なったが同範鏡はなくまた国内にもなく新例であろうとのことである。新例であるため「変形渦文鏡」の名がついた。鉄器は281が2号住居址の埋土中より、282が包含層に出土した。281は断面が四角形で木質部が残っている。282は断面が四角形である。284は土師器の包含層より出土したもので中央に孔がある。縁辺部は尖っている。



第42図 銅鏡および鉄製品

第V章 まとめにかえて

道下工区(70ha)分布調査、試掘調査を行なった結果2ヶ所の散布地と、1ヶ所の遺跡を確認することができた。

第1地点の第1、2トレンチ附近と、第2地点の第3、4トレンチ附近が散布地で、第3地点は横瀬遺跡を含む散布地であった。

第1地点では、II f層から縄文時代晚期から弥生時代に属するものが、II h~i層から縄文時代後期に属するものが散布状態で出土した。

1は縄文時代後期の岩崎系統の土器である。2は縄文時代晚期の入佐式系統の土器である。

3は深鉢形土器の破片で縄文時代晚期の「中岳遺跡」のものに類似があるという。4・5は縄文時代晚期の底部と考えられ、5は黒川洞穴出土の土器を標式とした黒川式系統のものである。

6は縄文時代晚期の「夜臼遺跡」出土の土器を標式とする夜臼式系統のものである。

7~16は、弥生時代前期末~中期中葉にかけての「入来遺跡」出土のものに類似している。

石器のうち19は、縄文時代晚期南九州においてよくみられるものである。

遺跡は、散布地としての性格であり、地形が開墾等により階段状となっており、保存状況は必ずしも良好とはいえない。

第2地点では、弥生時代から古墳時代にかけてこの遺物が散布状態で出土し、資料化できるものは少なかった。第1、2トレンチ附近的地形は開墾等のため階段状になっており、保存状態が悪く遺物は出土しなかった。第3、4トレンチでは台地の末端部であり、遺物の出土状況からみて流れ込みの可能性が強い。20・21は弥生中期の土器で22・23・24は後期のものであろう。25~27は3地点にみられる平安期の土器と思われる。住居址は切り合いが多く、また埋土状況も上面では不明瞭であり下部で分けた。住居址は12基みられ、全部が方形竪穴住居址で、2号住居址には中央に方形の堀り込みがあり、4号住居址には角部に円形の堀り込みがあった。切り合い関係では2号住居址が最も新しい状況で検出された。

第3地点では第2・3・4トレンチに平安時代、弥生時代後期、縄文晚期の遺跡が散布していた。石器も抉り入りの打製石斧やタタキ石等が出土している。第5~7トレンチは竪穴住居址や土器・磨製石鎌・軽石加工品・鉄器・石製品・銅鏡等が検出・出土している。2号住居址の土器群は弥生中期末からみられるが大半は弥生後期後半の時期に位置すると考えられる。斐形土器は口縁部が外反するし頸部の外面は渦曲が多くみられ、内面は若干稜線がある。底部は浅い脚台が多い。胴の張りは少なくスリムな器形である。臺形土器は口縁部が短く渦曲し、底部は平底を呈す。また長頸壺は山ノ口遺跡より出土した長頸壺の系統と思われる。山ノ口遺跡の出土のものは頸部がより長く、胴部に突帯があり、底部が平底でより広い。本遺跡のものは胴部が球状で底部が小さく上げ底を呈す。4号・6号・8号・9号住居址の斐形土器・臺形土器も2号住居址と大きな時期差はない器形と思われる。本遺跡と時期的に近い遺跡は金峰町の松木

圓遺跡^{ムカシ}や加世田市の桙ノ原遺跡^{ムカシ}等があるがこれらの遺跡より新しいと考えられる。また成川式土器との関係は弥生後期の遺跡が少なく、今後資料の統出をまたねばならない。

本遺跡では軽石加工品が多量に出土した。いろいろ考え方があると思うが凹ましたものは呪術的なものに使われた可能性もある。穴を開けたものは山ノ口遺跡の穴を開けた勾玉のように呪術的なものに使用したものと考えられる。2号住居址の大きな石は台石に使用したと考えられる。磨製石鎌は四のあるものとないものが出土した。前者は朝韓系のもので一の宮遺跡にも出土している。2つの孔のある垂飾品も出土した。

金属器は鉄器と銅製品が出土している。鉄器は2号住居址内に鎌の茎と思われるものが出土しているが埋土中上部である。また別のものは包含層より出土している。銅鏡は2号住居址中の埋土上部であるため住居址と同一性は薄い。

放射性炭素測定結果は1980±15Y B. P. となり、考古学的な時期と合致しなかった。この時期のものは本遺跡が南九州では初めて測定したためどちらが良いかまた多くの遺跡の資料がないと判断はむつかしいと思われる。以上が道下調査区のまとめである。住居址や銅鏡の検出、確認は考古学上でも貴重な発見をした。また横瀬遺跡の部分は工事変更をお願いし、遺跡が残るよう要請した。

- (1) 中岳遺跡
- (2) 河口貞徳氏御教示
- (3) 黒川洞穴
- (4) 夜臼遺跡
- (5) 入来遺跡
- (6) 弥生土器集成
- (7) 松木園遺跡
- (8) 桙ノ原遺跡

指宿市横瀬住居跡の年代（付録）

京都産業大学 山 田 治

1. ^{14}C 年代結果

指宿市横瀬住居跡から出た炭の ^{14}C 年代は、下記のごとき結果になった。

測定試料番号 KS U-445

測 定 値 1980±15 Y.B.P.

ただし、BP=Before Present の意味で、AD 1950を0として、それ以前の年数を示すという国際的表現法である。これを単純に暦の年代に直すと $1980 - 1950 = 30$ すなわち、BC30 ということになるが、現在ではもう少し精密な表わし方が行なわれつつある。それが年輪年代 (Dendro-Date) と呼ばれるものである。

しかし、国際的にはまだ上記の ^{14}C 年代表記（半減期5568年を用いるもの）が正式の表現であるので、公式にはこちらの値を用い、参考として年輪年代を付記するものが普通である。

2. 年輪年代表記法

E. K. Ralphetal によってまとめられた年輪年代と ^{14}C 年代との対照の膨大な表とグラフは、今までのところ最もよく真の年代を表わすものと考えられている。これは年数の判明している木の年輪を薄くはぎとて（10年位ずつ）その ^{14}C 年代を求め、年輪の年数と比べてそれをY軸、X軸にプロットしたグラフと、このグラフから得た ^{14}C 年代対年輪年代の表の両方である。これが今から7000年前までの年代まで得られている。これを見ると、 ^{14}C 年代と年輪年代とは割合よく合っているので、大まかには ^{14}C 年代で足りる場合も多い。

しかし、たとえば横瀬住居跡のように、1980BPと出た ^{14}C 年代を年輪年代で表わすと、AD 20となり、一世紀の前半に位置することになる。これに誤差範囲を考慮すると、信頼度68%（1シグマ）で、AD40～AD10、もう少し幅を見て信頼度95%（2シグマ）でAD50～60BCとなる。この年代は日本では弥生時代の中後末くらいに位置するものであろう。

尚、年輪年代の対照表は日本語版では、

東村武信著 考古学と物理化学（学生社）

にくわしい説明がのっているので参照されたい。

3. 結果の考察

横瀬住居跡から弥生時代の鏡が出土しているというので、筆者もできるだけ慎重に時間も充分にかけて前記の測定値に到達したわけであるが、測定誤差は試料の炭の量が十分にはないのでこれ以上の値を得るのは困難であった。しかし、もう一つ考慮すべき点について注意しておきたい。それは試料に用いた炭の年輪の数が不明であったことである。この炭がもししふつうに用いられる燃料の薪のようなものなら年輪数は10~30年くらいで、平均として10年ほど古めに出ていているだけであろう。しかし、家の柱であったとすると、30~50年くらいの数があったかも知れない。この場合平均として15~25年くらい古めに出てている可能性がある。従って、AD40~AD10という炭の年代からそこに住んでいた人の年代を考えるとAD60~AD20くらいが妥当な年代であるといえよう。これは自然科学的な方法だけでの結論であるから、考古学的遺物からの年代の推定値と突き合わせて、より妥当な結論が導き出されることを期待する。

測定の方法について

本測定結果は、京都産業大学の液体シンチレーション測定装置を用いて行なわれたものである。液体シンチレーション法は放射性元素の測定法としては完全なものである。従来の比例計数管方式での¹⁴C測定では、放射性元素からなる放射線を計数するのみであったが、液体シンチレーション方式では、放射線の計数だけでなく、放射線の放出された数と観測される数の比率まで正確に求めることができる。ふつう放射線測定器というものは、測定器で観測される数しかわからない。つまり100個放出された放射線(¹⁴Cではベータ線すなわち電子)のうち80だけ数えたとする。しかし時には85数えることもあり、70しか数えないこともある。計数の割合は中に入れられた試料の純度や電源電圧などでかなり変ることもある。液体シンチレーション測定装置の秀れた点は、このようなとき計数している割合が80%であるとか85%であるということを正確に知らせてくれるのである。この計数の割合を計数効率というが、計数効率の1%のちがいは100年くらいに相当するので決しておろそかにできないものである。

次に液体シンチレーション測定装置の長所としてあげられるものは、大量の試料を用いることができ、またいつでもくりかえし再測定ができるということである。今回の測定も何回もくりかえしてこれだけの精度を得ている。それでもまだ弥生時代の中期か後期かという問題には今一歩といわねばならないのである。自然科学の方法で歴史的な年代を確実に求めるということが非常に困難なことは多少理解して頂けるであろう。



調査地域全景



横瀬遺跡遠景

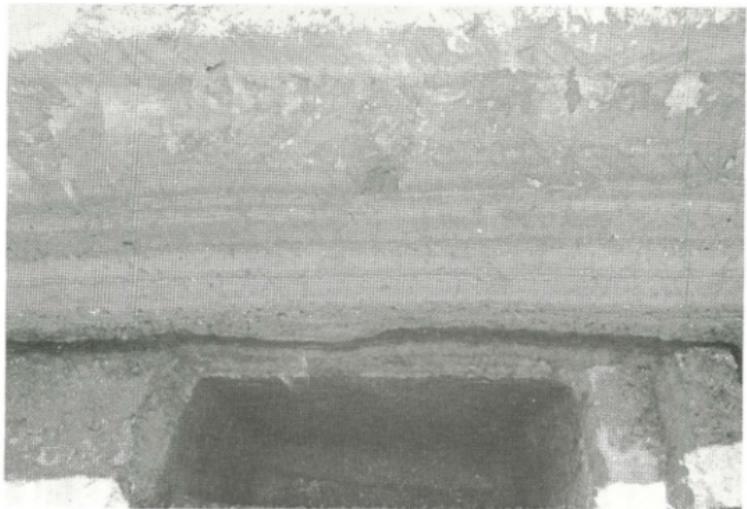
図版 2



横瀬遺跡の近景



横瀬遺跡の調査風景



第1地点 第1トレンチ深堀土層断面



第1地点 第2トレンチ遺物出土状況

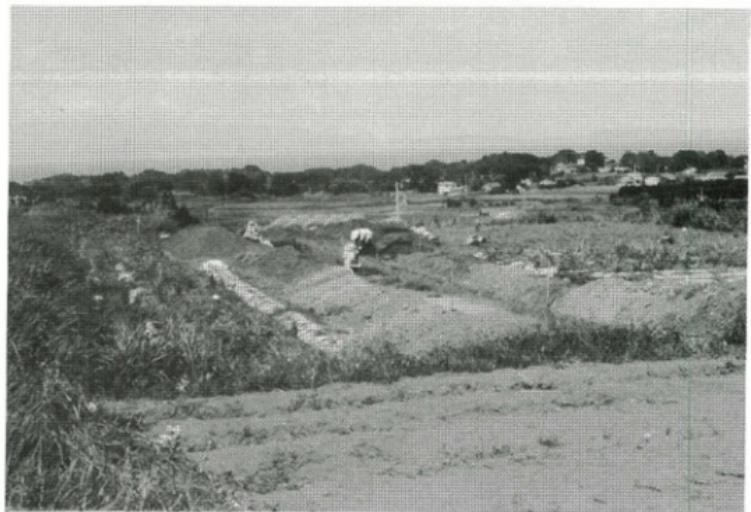
図版 4



第2地点 第1トレンチ調査状況



第2地点 第1トレンチの池田火山灰堆積状況



第2地点 第2トレンチ調査状況



第2地点 第4トレンチ遺物出土状況

図版 6



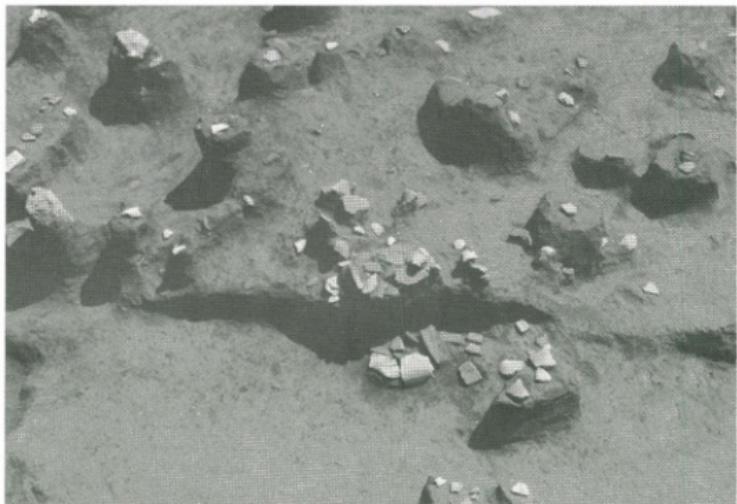
第3地点 第1トレンチ調査状況



第3地点 第2・3トレンチ調査状況



第3地点 第2トレンチ第1拡張区出土状況

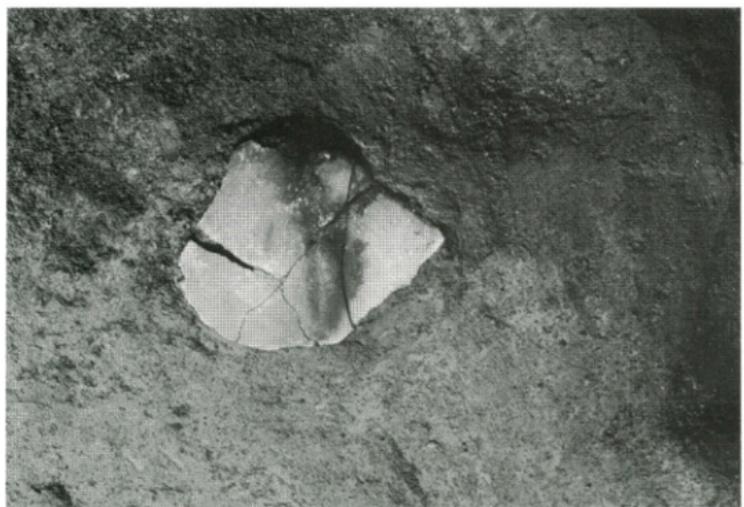


第3地点 第2トレンチ第2拡張区出土状況

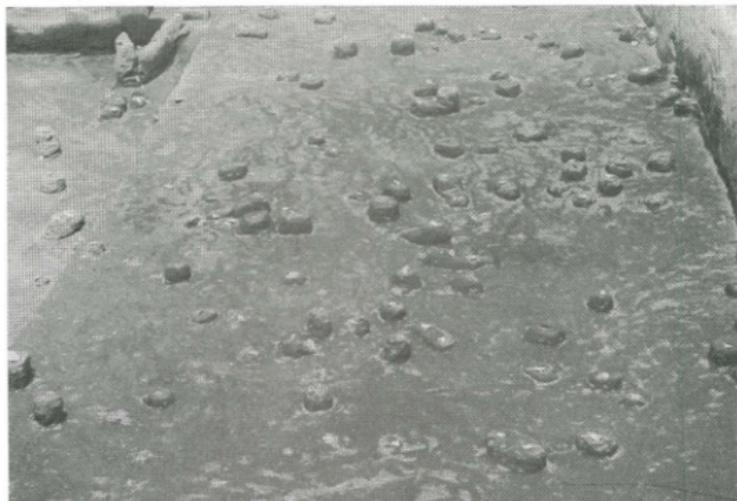
図版 8



第3地点 第2トレンチ塹出土状況



第3地点 第4トレンチ壺形土器出土状況



第3地点 横瀬遺跡の遺物出土状況



第3地点 横瀬遺跡の住居址および遺物出土状況

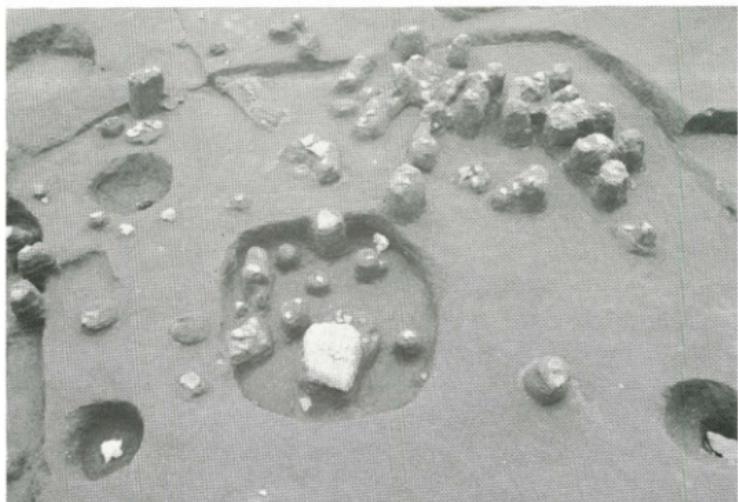
図版10



第3地点 横瀬遺跡の住居址検出状況



第3地点 横瀬遺跡の住居址検出状況



第3地点 横瀬遺跡の2号住居址



第3地点 横瀬遺跡の2号住居址の高坏出土状况

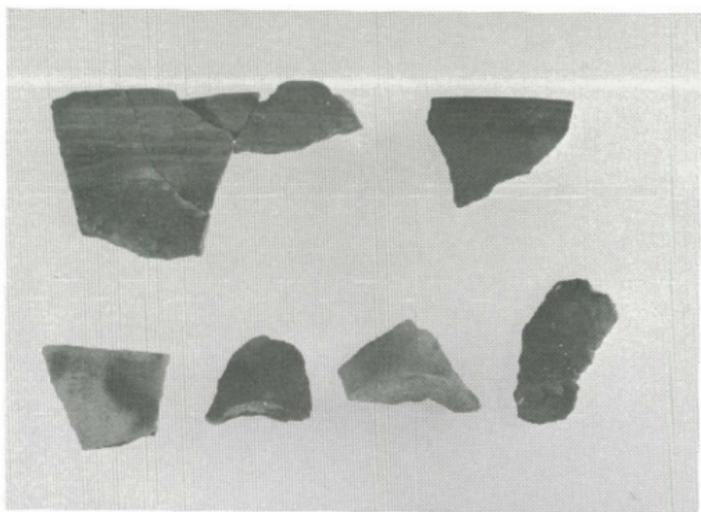
図版12



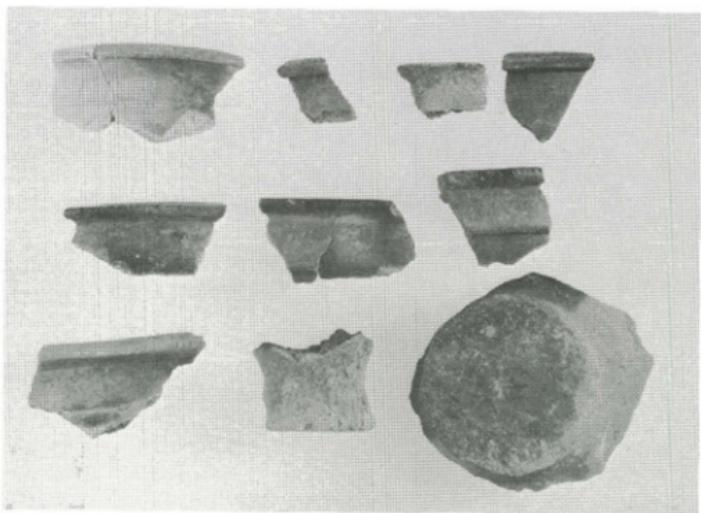
第3地点 横瀬遺跡の2号住居址の木炭出土状況



第3地点 横瀬遺跡の4号住居址の出土状況

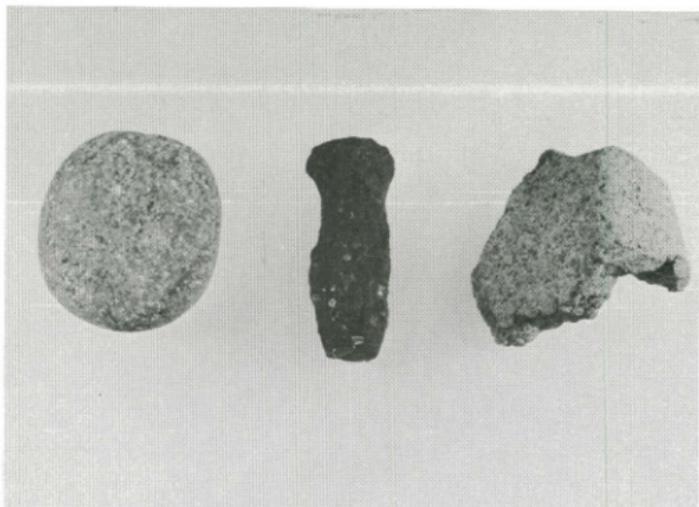


第1地点 第1トレンチ出土遺物 土器

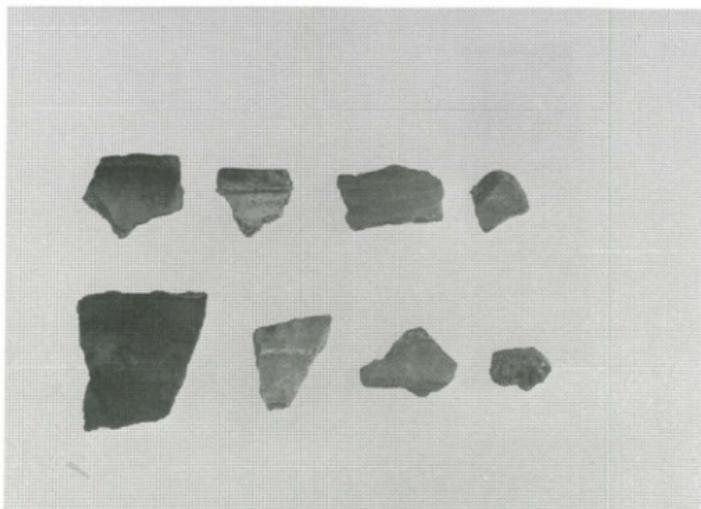


第1地点 第2トレンチ出土遺物 土器

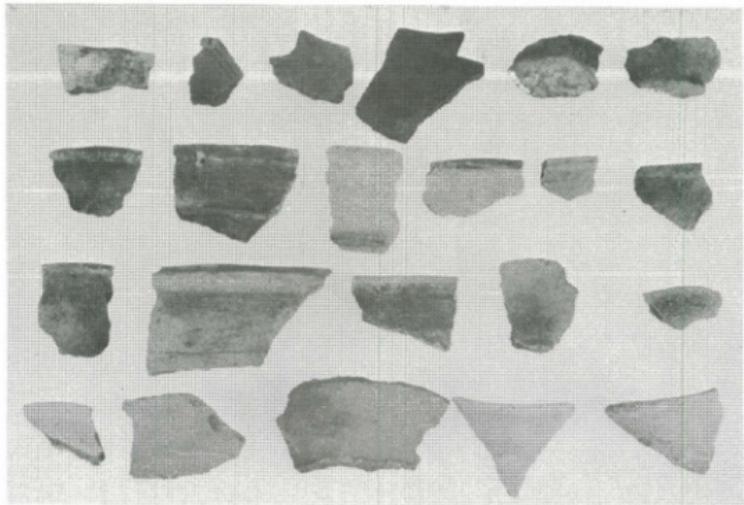
图版14



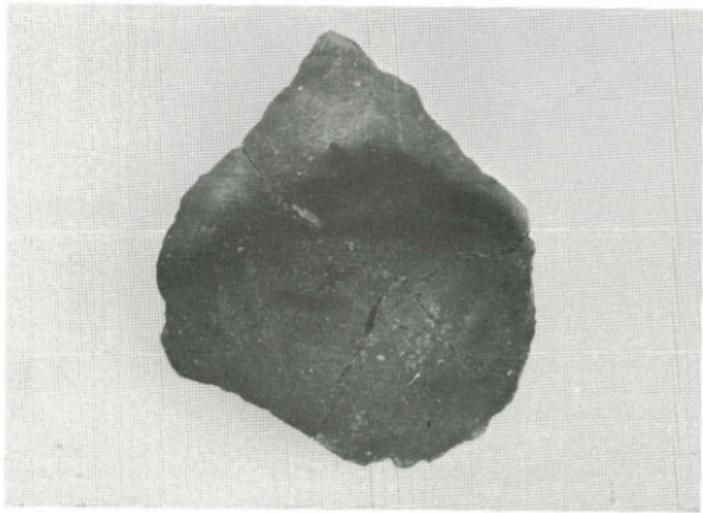
第1·2地点出土遗物 石器



第2地点出土遗物 石器

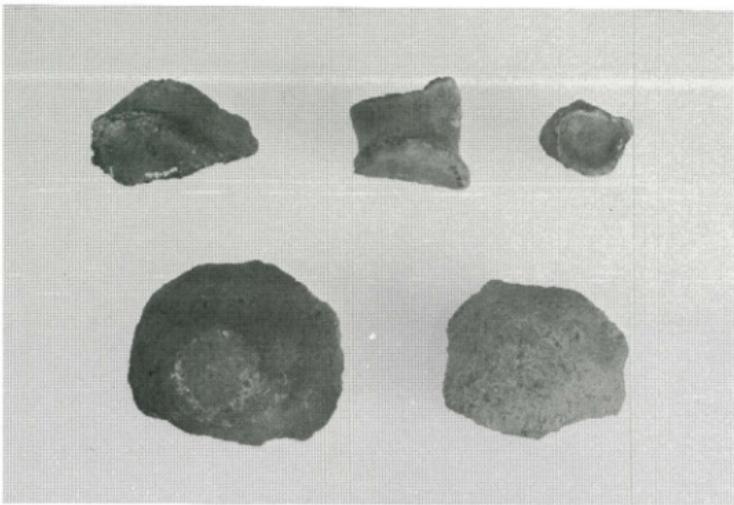


第3地点出土遗物 土器



第3地点出土遗物 土器

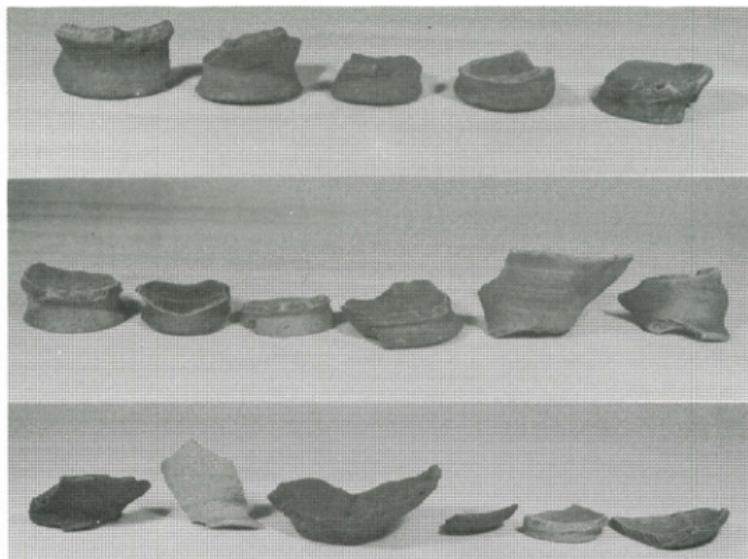
图版16



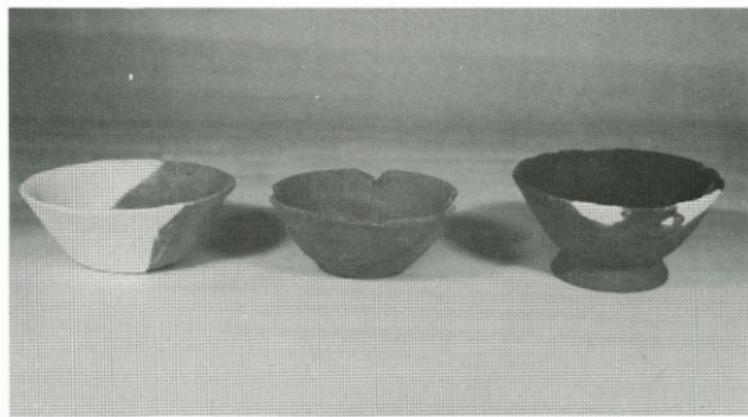
第3地点出土遗物 土器



第3地点出土遗物 土器

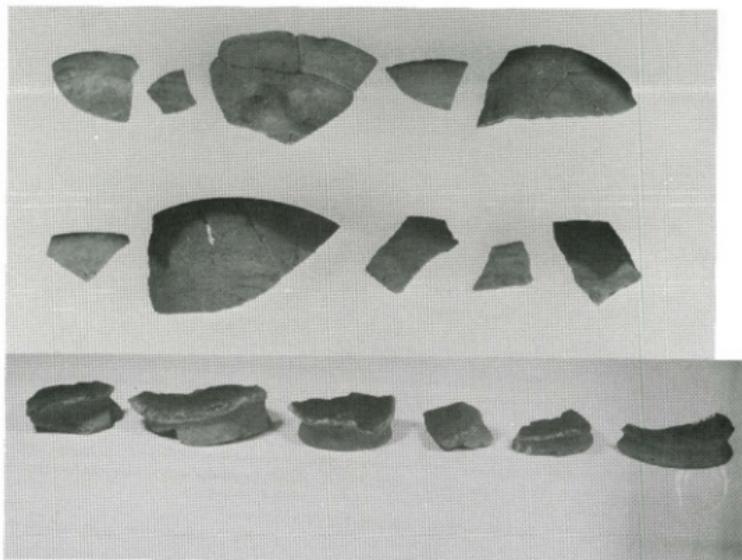


第3地点出土遺物 土器（土師器）

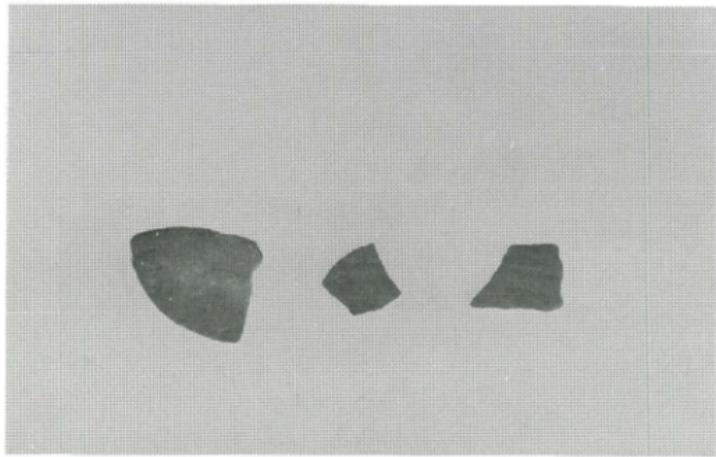


第3地点出土遺物 土器（土師器）

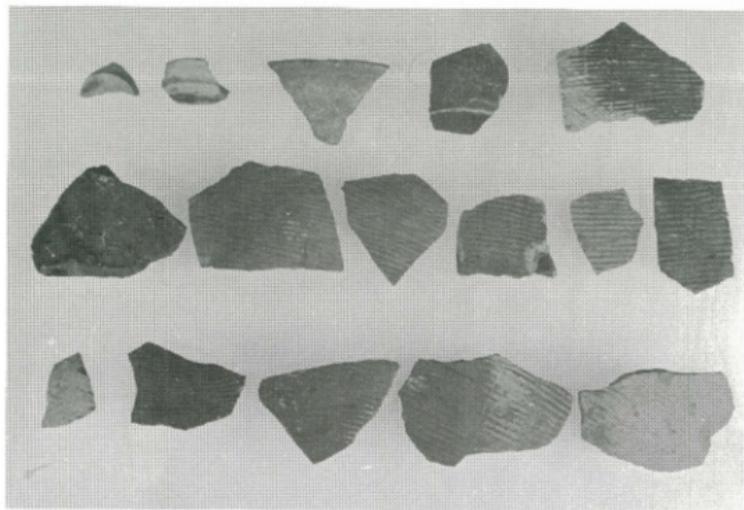
图版18



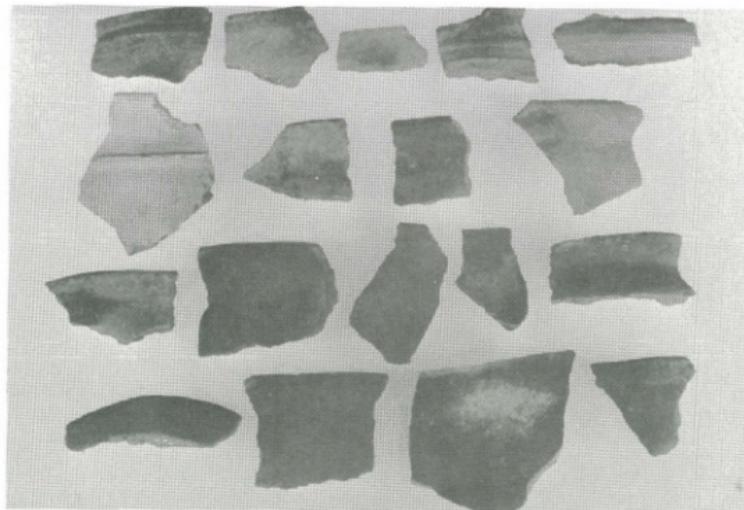
第3地点出土遗物 土器



第3地点出土遗物 墨书土器

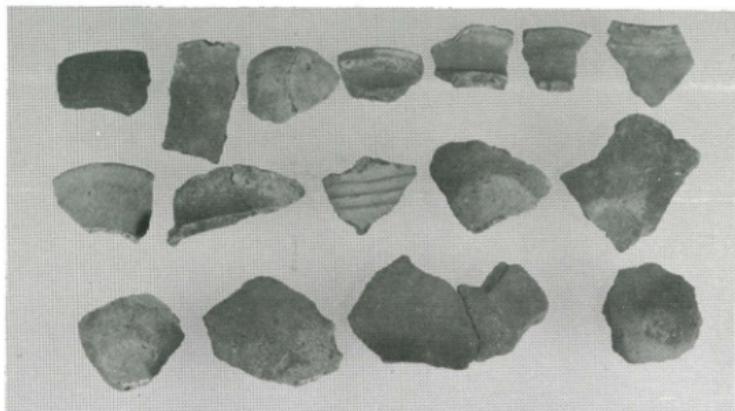


第3地点出土遺物 須恵器

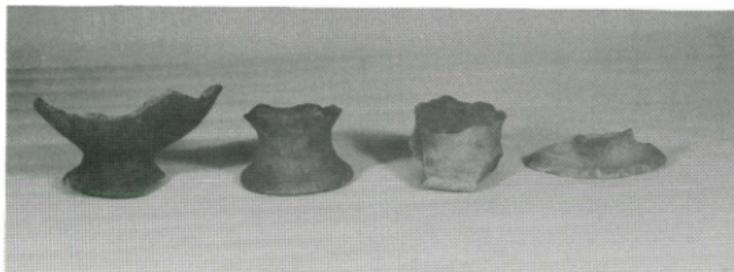


第3地点横瀬遺跡の出土遺物 土器

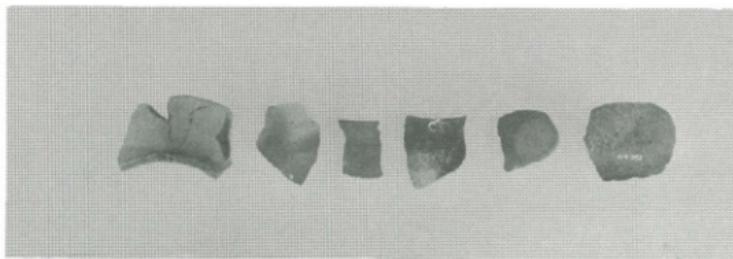
図版20



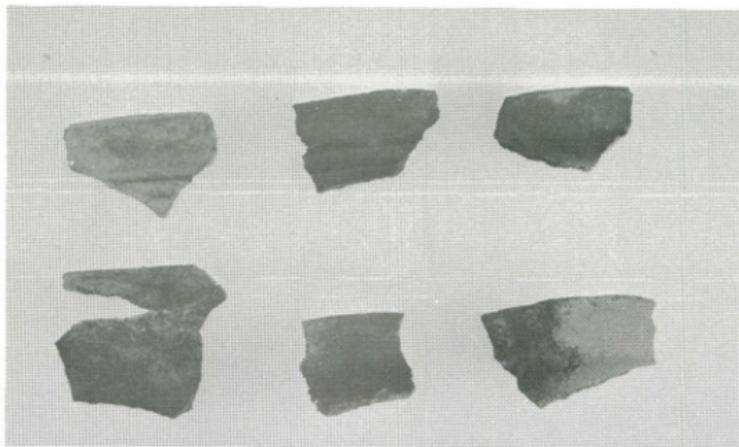
第3地点 横瀬遺跡の出土遺物 土器



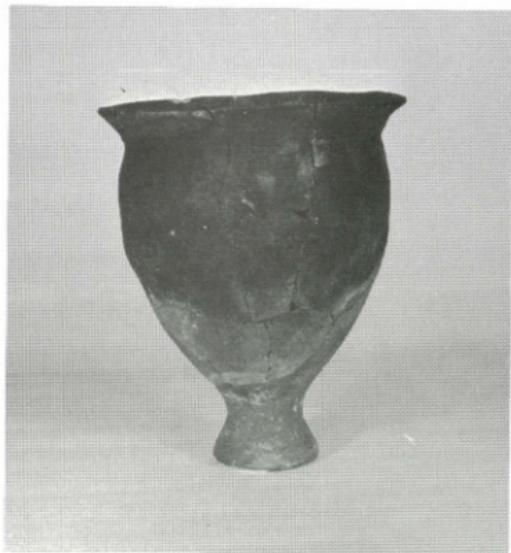
第3地点 横瀬遺跡の出土遺物 土器



第3地点 横瀬遺跡の出土遺物 土器

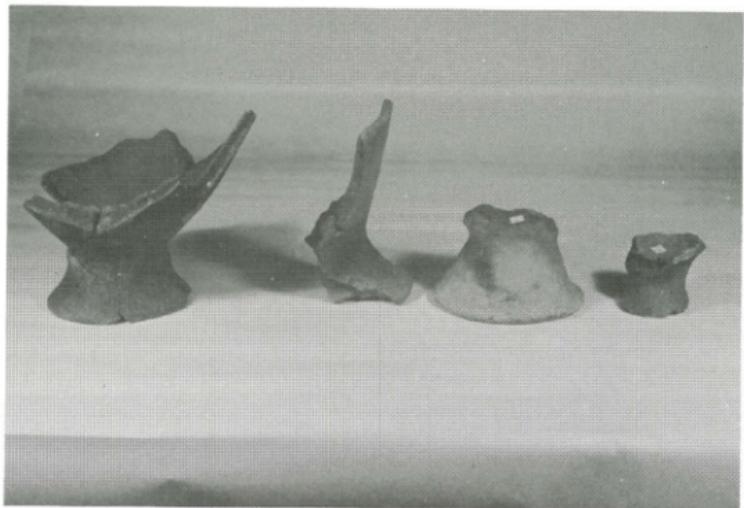


第3地点 横瀬遺跡2号住居址の遺物 土器

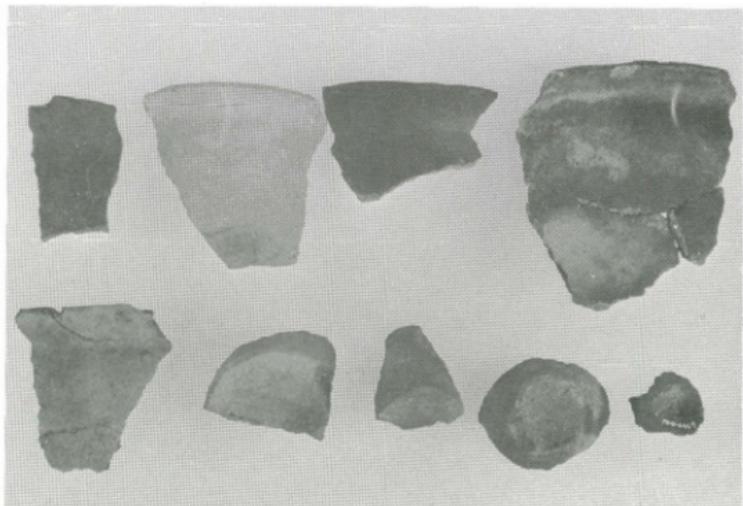


第3地点 横瀬遺跡2号住居址の遺物 土器

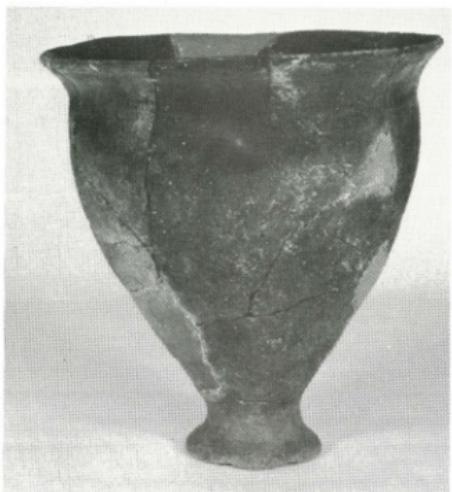
図版22



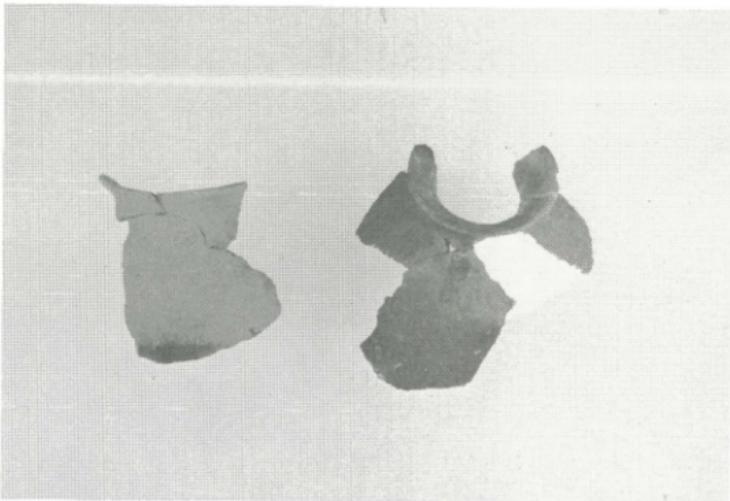
第3地点 横瀬遺跡の2号住居址の出土遺物 土器



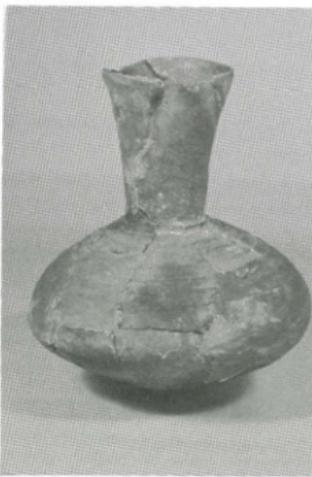
第3地点 横瀬遺跡の2号住居址の出土遺物 土器



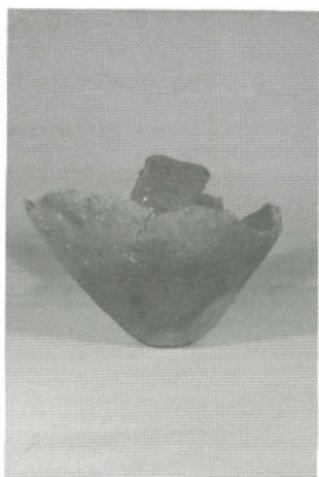
第3地点 横瀬遺跡 2号住居址の出土遺物 土器



第3地点 横瀬遺跡2号住居址の出土遺物 土器



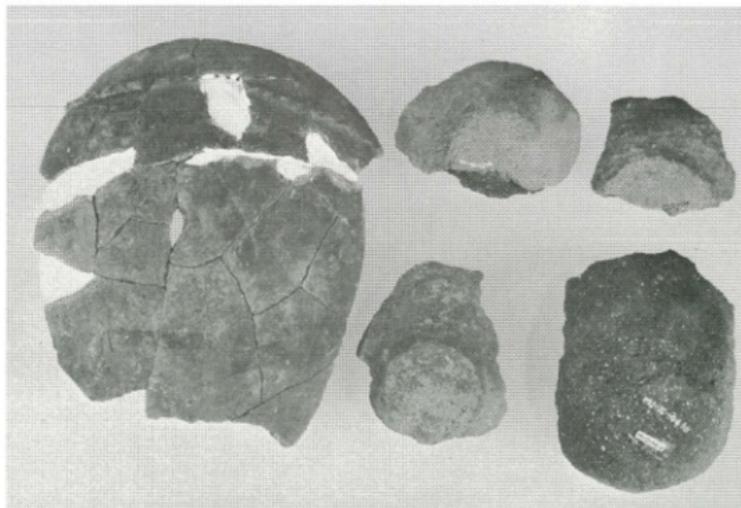
第3地点 横瀬遺跡2号住居址の出土遺物
土器



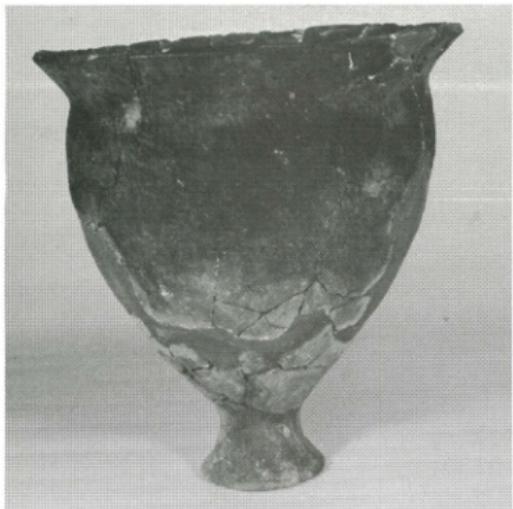
第3地点 横瀬遺跡2号住居址の出土遺物
土器



第3地点 横瀬遺跡2号住居址の出土遺物 土器



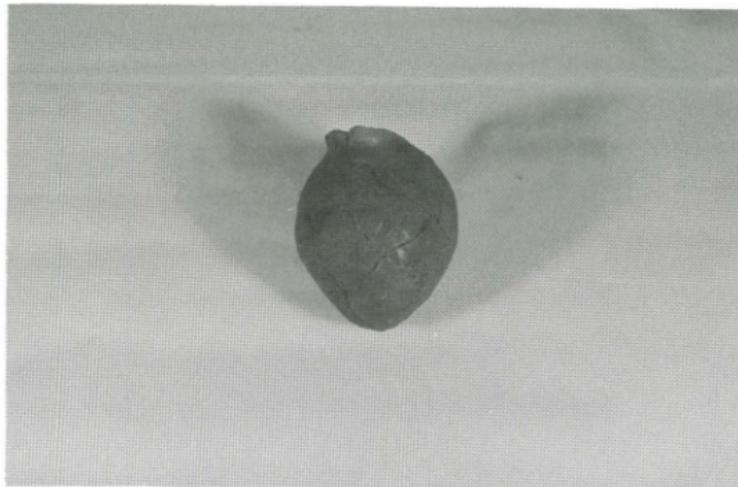
第3地点 横瀬遺跡2号住居址の出土遺物 土器



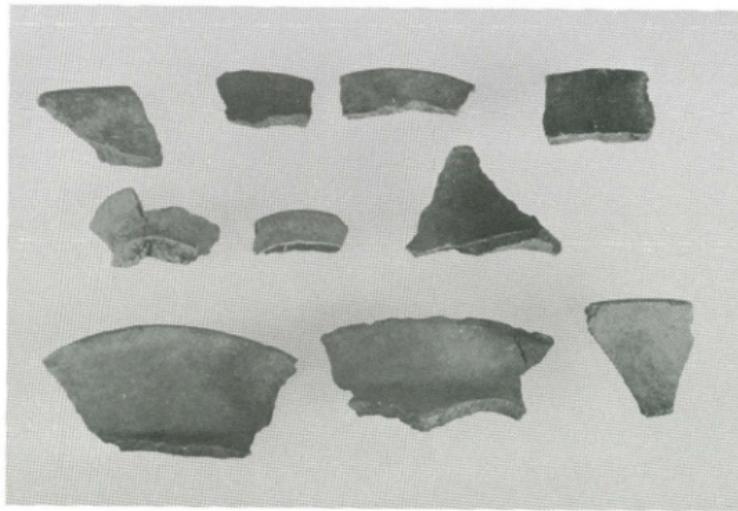
第3地点 横瀬遺跡4号住居址の出土遺物 土器



第3地点 横瀬遺跡6・8号住居址の出土遺物 土器

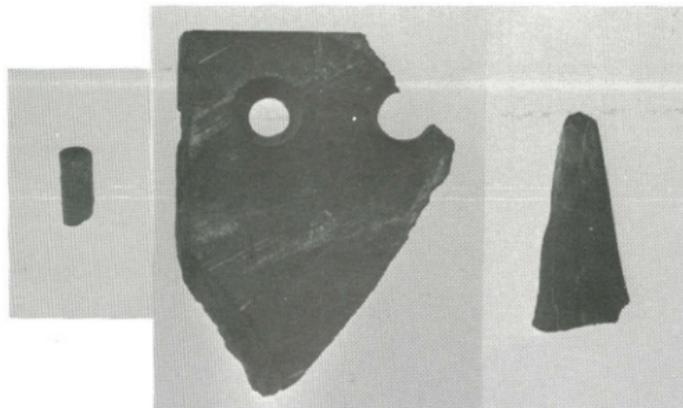


第3地点 横瀬遺跡6号住居址の出土遺物 土器

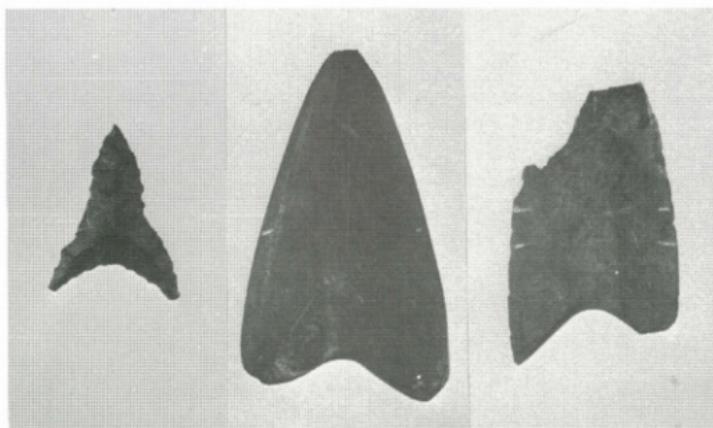


第3地点 横瀬遺跡9号住居址の出土遺物 土器

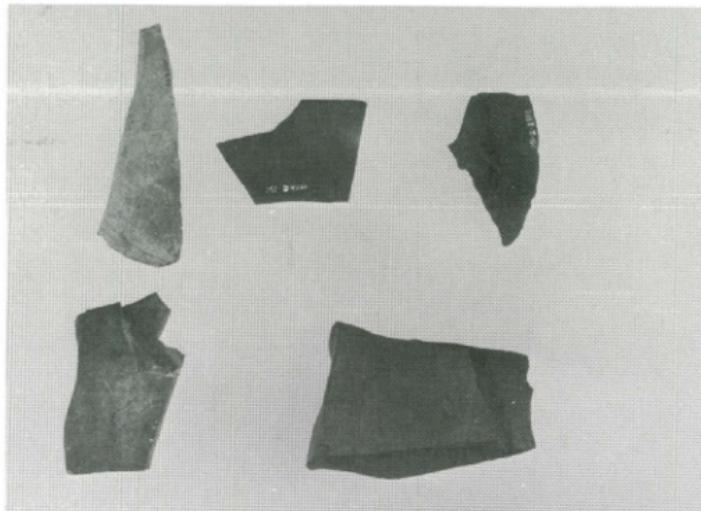
図版28



第3地点の出土遺物土製品 石器



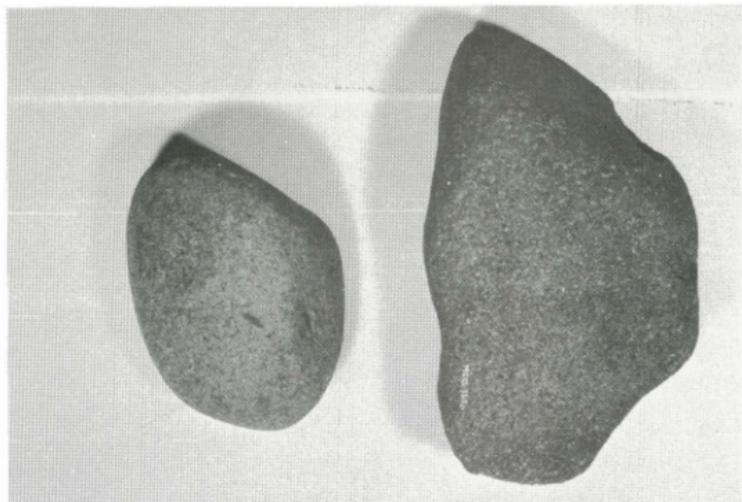
第3地点の出土遺物 石器



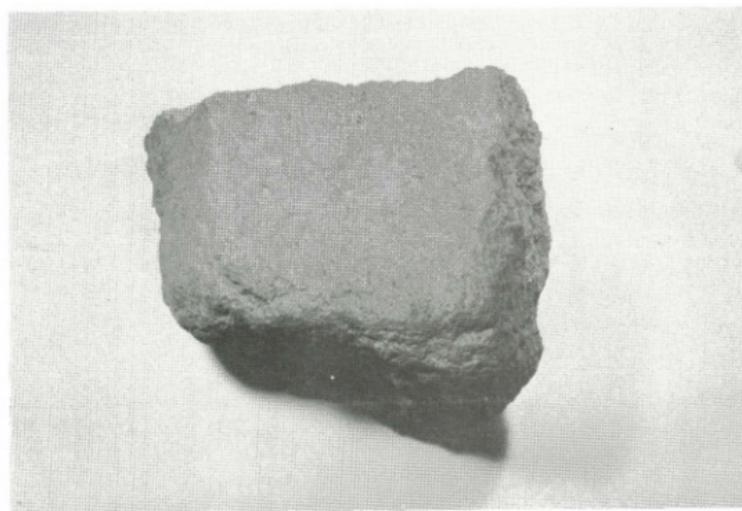
第3地点の出土遺物 石器



第3地点の出土遺物 石器



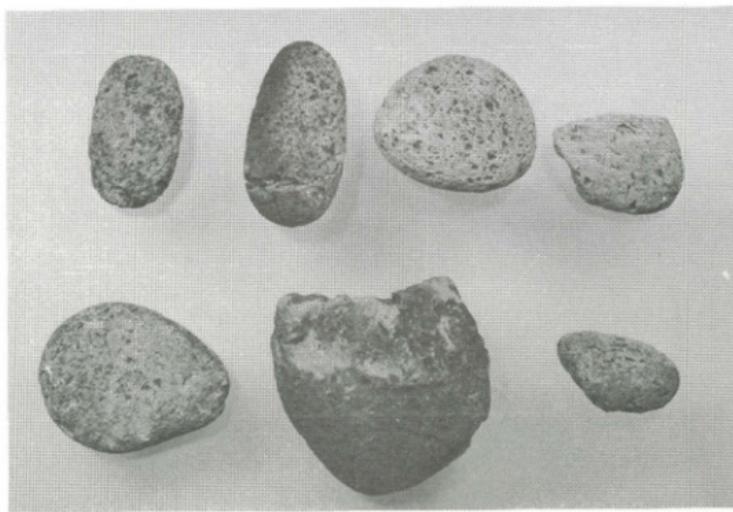
第3地点の出土遺物 石器



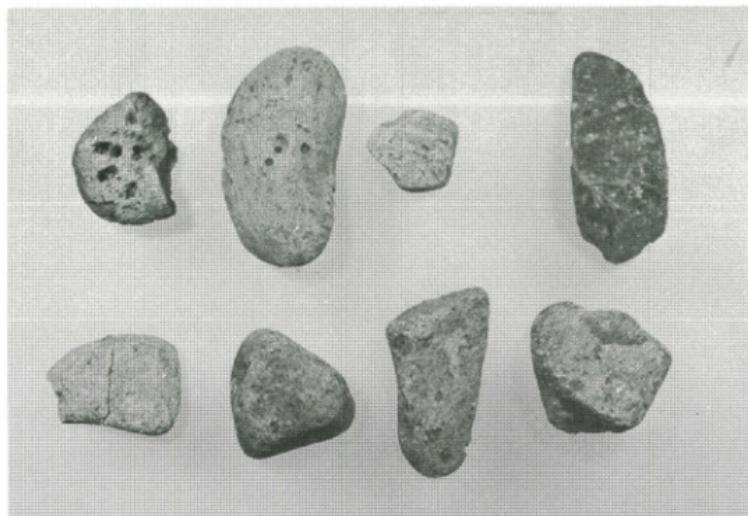
第3地点の出土遺物 石器



第3地点の出土遺物 軽石加工品



第3地点の出土遺物 軽石加工品



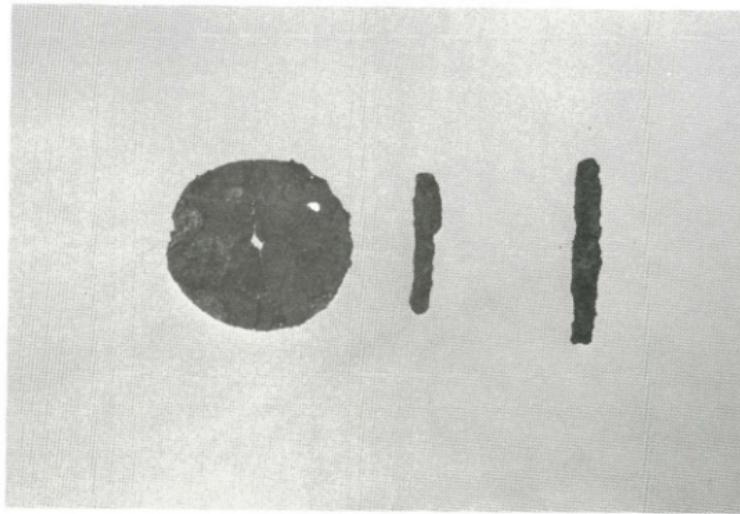
第3地点の出土遺物 軽石加工品



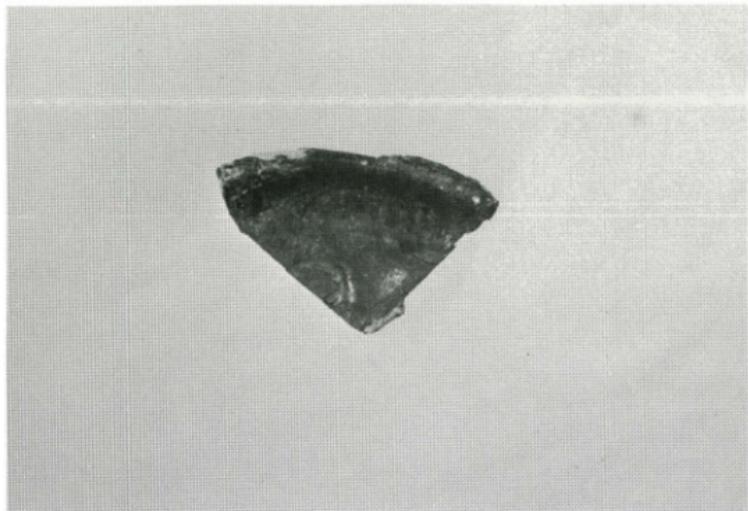
第3地点の出土遺物 軽石加工品



第3地点の出土遺物 軽石加工品



第3地点の出土遺物 鉄器



第3地点の出土遺物 銅鏡

指宿市埋蔵文化財報告書 (6)

横瀬遺跡

発行日 昭和57年3月

発行 指宿市教育委員会 〒891-04 指宿市十町2424

印刷 中央印刷株式会社 〒892 鹿児島市春日町12番16号

